えびの市埋蔵文化財調査報告書　第７集

広　畑　遺　跡

１９９１

えびの市教育委員会

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第７集

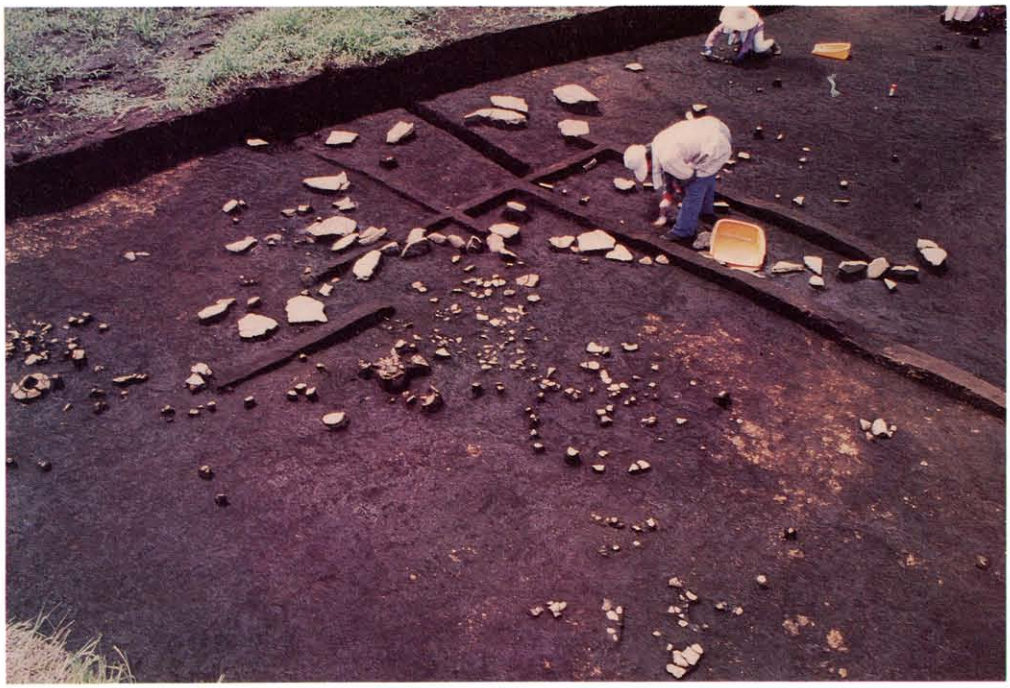
広　畑　遺　跡

１９９１

えびの市教育委員会

Ⅳ・Ⅴ区航空写真

Ｖ区　基本的層序



ＳＺ-01およびＡ群土器

ＳＴ-11
羨道閉塞状態
（西から）

ＳＩ-01

ＳＩ-02

序

えびの市は、日向・肥後・薩摩の分岐点にあたり、古代より多様な文化・文物が混和しながらも独特の文化と伝統をもった地域であります。市内の段丘面から山麓にかけては遺跡が密集しており、本市の歴史を紐解く鍵が眠っております。

平成元年度には九州縦貫自動車道人吉-えびの間の建設が着工し産業開発も増加しつつあります。そこで、埋蔵文化財の保護行政も一層充実していかなければならない時期にきております。

本書は、平成元年度に実施した広畑遺跡の発掘調査報告書であります。市内で２例目の竪穴式住居や古墳時代の墳墓群を調査し、本市の古代史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。本書が学術資料としてだけではなく、学校教育・社会教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が高まれば幸いです。

なお、調査にあたって御指導、御教示頂いた諸先生方、県文化課および調査に対して御理解、御協力頂いた工事関係者並びに地元の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成３年３月

えびの市教育委員会

教育長　平　田　敏　正

例　　言

1．本書は、平成元年度に実施した、市道坂元苧畑（おばたけ）線外２線整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査主体は、えびの市教育委員会である。

3．地下式板石積石室墓は、概要報告の中では便宜上Ａ～Ｅとしたが、本書では01～05に改めて掲載している。

4．本書では方位を磁北で、レベルを海抜標高で示した。

5．写真記録および遺物の写真撮影は、中野が行なった。

6．人骨の実測、取り上げおよび、鑑定については長崎大学医学部の諸氏にお願いした。

7．本書では、遺構を記号で省略している。　ＳＡ：竪穴式住居、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＩ：地下式板石積石室墓、ＳＫ：土坑・土壙墓、ＳＴ：地下式横穴墓、ＰＰ：柱穴、ＳＺ：その他の遺構

8．出土遺物および関係資料は、えびの市文化センターに保管している。

9．本書の編集、執筆は中野が行なった。

調　査　組　織

調査主体　えびの市教育委員会

平田敏正（教育長）

上別府文夫（社会教育課長）

野間寛俊（課長補佐）

浜松政弘（係長、平成元年度）

境田　貢（係長）

上加世田たず子（主事）

中野和浩（技師）

特別調査員

上村俊雄（鹿児島大学　教授）

調査協力

西健一郎（九州大学文学部　助手）　小田富士雄（福岡大学　教授）　掘田啓一

松下孝幸（長崎大学医学部解剖学第２教室　助教授）

分部哲秋（　　同　　講師）

佐伯和信（　　同　　助手）

小山田常一（　同　史学部　大学院生）

近藤　敏（市原市文化財センター）

長津宗重（宮崎県教育庁文化課　主任主事）

境田博之（えびの市土木課長）、小川　博（　同　課長補佐）、外赤勝郎（　同　課長補佐）

北園一正（　同　係長）、境田次男（　同　主査）

遺構実測・発掘調査

大内田春江、加治佐良子、白坂けい子、新原芳子、新屋敷節子、田中のり子、永田美智子、二宮ミツ子、原口キミ子、福満悦子

発掘調査

有木タミ、岩下貞盛、江口タミ、上水流百合子、坂元ミカ、迫田サエ、迫田正雄、田中キサエ、田中康弘、鎮寺シズ、鎮寺達夫、中窪正志、浜脇正則、本二日市栄、馬越脇功、増田光夫、米延二郎、持永秀雄

遺物整理

川上茂子、鶴田美恵子

遺物実測・整図

大内田、加治佐、川上、田中、鶴田

なお調査にあたって、前田・坂元・苧畑地区の方々には多大な御援助を賜った。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……1
Ⅲ．遺構確認調査……5
Ⅳ．発掘調査
　1．弥生時代の遺構と遺物……9
　2．古墳時代の遺構と遺物……10
　3．その他の遺構と遺物……73
Ⅴ．まとめ……73

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：50,000）……2
第2図　調査地点位置図（1：5,000）……4
第3図　層序柱状図……5
第4図　Ⅲ～Ⅴ区遺構配置図（1：500）……6
第5図　SA-01 遺構実測図（1：20）……7・8
第6図　SA-01 出土遺物実測図（1：3、1：2）……9
第7図　SZ-01・A群遺物出土状態実測図（1：30）……11・12
第8図　A群遺物実測図（その1）（1：3）……13
第9図　A群遺物実測図（その2）（1：3）……14
第10図　A群遺物実測図（その3）（1：3）……15
第11図　SI-01 遺構実測図（1：30）……17・18
第12図　SI-02 遺構実測図（1：30）……19・20
第13図　SI-02 出土遺物実測図（1：3）……21
第14図　SI-03 遺構実測図（1：30）……22
第15図　SI-04 遺構実測図（1：30）……23・24
第16図　SI-04 出土遺物実測図（1：2）……25
第17図　SI-05 遺構実測図（1：30）……25
第18図　B群遺物出土状態実測図（1：10）……26
第19図　B群遺物実測図（1：3）……26
第20図　ST-01 遺構実測図（1：30）……27
第21図　ST-02 遺構実測図（1：30）……28
第22図　ST-02 竪坑埋土出土遺物実測図（1：3）……29

第23図　ＳＴ-03 遺構実測図（１：30）……31
第24図　ＳＴ-01，03，05，06，07 出土鉄鏃実測図（１：２）……32
第25図　ＳＴ-04 遺構実測図（１：30）……33
第26図　ＳＴ-05 遺構実測図（１：30）……34
第27図　Ｃ群遺物出土状態実測図（１：30）……35
第28図　Ｃ群遺物実測図（その１）（１：３）……36
第29図　Ｃ群遺物実測図（その２）（１：３）……37
第30図　ＳＴ-06 遺構実測図（１：30）……39
第31図　ＳＴ-07 遺構実測図（１：30）……40
第32図　ＳＴ-08 遺構実測図（１：30）……41
第33図　ＳＴ-08，10，11，14 出土鉄鏃実測図（１：２）……42
第34図　ＳＴ-09 遺構実測図（１：30）……44
第35図　ＳＴ-10 遺構実測図（１：30）……45
第36図　ＳＴ-11 遺構実測図（１：30）……46
第37図　ＳＴ-12 遺構実測図（１：30）……48
第38図　ＳＴ-13 層序実測図（１：60）……49
第39図　ＳＴ-13 遺構実測図（１：30）……50
第40図　ＳＴ-14 遺構実測図（１：30）……51
第41図　Ｅ群遺物出土状態実測図（１：10）……52
第42図　Ｅ群遺物実測図（１：３）……52
第43図　ＳＴ-15 遺構実測図（１：30）……53
第44図　ＳＴ-15 出土鉄鏃実測図（１：２）……54
第45図　ＳＴ-16 遺構実測図（１：30）……55・56
第46図　ＳＴ-16・17 出土鉄鏃実測図（１：２）……57
第47図　ＳＴ-16 出土小刀実測図（１：３）……58
第48図　ＳＴ-17 遺構実測図（１：30）……59
第49図　ＳＴ-18 遺構実測図（１：30）……60
第50図　ＳＴ-19 遺構実測図（１：30）……61・62
第51図　ＳＴ-03，11，13，19 出土短剣実測図（１：２）……63・64
第52図　ＳＴ-06，15，17 出土刀剣実測図（１：３）……65
第53図　ＳＫ-01 遺構実測図（１：30）……66
第54図　ＰＰ-01，02 遺構実測図（１：30）……66
第55図　Ｄ群遺物実測図（１：３）……67
第56図　Ｆ群遺物実測図（１：３）……67

第57図　Ⅳ区出土遺物実測図（１：３）……68
第58図　Ⅴ区出土遺物実測図（１：３）……69
第59図　ＳＢ-01 遺構実測図（１：20）……71・72
第60図　地下式横穴墓集合図（１：20）……75
第61図　地下式横穴墓 群構成推定図（１：200）……76
第62図　地下式横穴墓変遷図……77
第63図　ＳＴ-13 排土模式図……77

表　目　次

第１表　ＳＡ-01 出土遺物観察表……9
第２表　Ａ群遺物観察表……15
第３表　Ｃ群遺物観察表……37
第４表　Ｅ群遺物観察表……52
第５表　Ⅳ区出土遺物観察表……69
第６表　Ⅴ区出土遺物観察表……69
第７表　ＳＢ-01 柱穴一覧表……70
第８表　地下式横穴墓一覧表……78

図　版　目　次

巻頭図版
Ⅳ・Ⅴ区遺構分布状態、Ⅳ区遺構分布状態
ＳＩ-01 床面、ＳＩ-02 床面、ＳＴ-04 羨門閉塞状態
図版１　調査地周辺航空写真、調査地周辺遠景
図版２　Ⅲ～Ⅴ区調査前の状況
図版３　Ⅴ～Ⅶ区調査前の状況、Ⅰ区完掘全景、Ⅱ～Ⅲ区全景
図版４　Ⅲ区完掘全景、Ⅳ区完掘全景、Ⅳ区作業風景
図版５　Ⅴ区作業風景、Ⅵ区完掘全景、Ⅶ区完掘全景
図版６　ＳＡ-01 遺構検出状態、掘込・遺物出土状態、遺物出土状態（接写）
図版７　ＳＺ-01・Ａ群遺物出土状態、ＳＩ-01～03 遺構検出状態、作業風景
図版８　ＳＩ-01 層序、完掘全景、側石除去・完掘
図版９　ＳＩ-02 層序、完掘全景、側石除去、完掘
図版10　ＳＩ-03 層序、完掘全景、ＳＩ-04 層序
図版11　ＳＩ-04 完掘全景、側石除去、ＳＩ-05 完掘全景

図版12　ＳＴ-01 竪坑層序、羨道閉塞状態、完掘
図版13　ＳＴ-01 玄室内、ＳＴ-02 竪坑層序及び閉塞状況、閉塞石除去
図版14　ＳＴ-02 玄室内人骨、ＳＴ-03 完掘全景、玄室内出土遺物、竪坑上部閉塞状態
図版15　ＳＴ-04 羨道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
図版16　ＳＴ-05 竪坑層序、羨道閉塞状態、玄室内人骨
図版17　ＳＴ-06 竪坑層序、閉塞石除去、玄室内
図版18　ＳＴ-07 竪坑層序、羨道閉塞状態、玄室内
図版19　ＳＴ-08 竪坑層序、完掘、玄室内人骨
図版20　ＳＴ-09 竪坑層序、完掘、玄室内人骨
図版21　ＳＴ-10 羨道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
図版22　ＳＴ-11 羨道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
図版23　ＳＴ-12 羨道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
図版24　ＳＴ-13 層序、竪坑層序、羨道閉塞状態
図版25　ＳＴ-13 羨道部のシラス塊、閉塞石除去、玄室内
図版26　ＳＴ-14 遺構検出状態、完掘、玄室内遺物出土状態
図版27　ＳＴ-15 遺構検出状態、完掘、玄室内
図版28　ＳＴ-16 竪坑検出状態、閉塞石除去、玄室内奥壁～右側壁、玄室内右側壁
図版29　ＳＴ-17 完掘、玄室内、鉄刀刺突状態
図版30　ＳＴ-19 竪坑上部閉塞石およびコンクリート塊、完掘、玄室内遺物
図版31　ＳＴ-18 完掘全景、ＳＫ-01 完掘全景、ＰＰ-01 半截、ＰＰ-02 半截
図版32　ＳＢ-01 遺構検出状態、完掘・遺構実測、ＳＤ-04 全景・層序
図版33　ＳＤ-05 全景、層序、Ｂ群遺物出土状態、Ｃ群遺物出土状態
図版34　Ｅ群遺物出土状態、ＳＡ-01 出土遺物
図版35　Ａ群出土遺物（その１）
図版36　Ａ群出土遺物（その２）、Ｂ群出土遺物、Ｃ群出土遺物（その１）
図版37　Ｃ群出土遺物（その２）
図版38　Ｅ群出土遺物、Ｆ群出土遺物、Ｇ群出土遺物、ＳＴ-02 竪坑内および周辺出土遺物
図版39　ＳＴ-13 封土内、ＳＴ-17 玄室崩落土内、ＳＩ-02 内、ＳＩ-04 内、排土内出土遺物
図版40　ＳＴ-01・03・05・06・07・08 出土遺物（鉄鏃）
図版41　ＳＴ-10・11・14・15・16・17 出土遺物（鉄鏃）
図版42　ＳＴ-06 出土大刀、ＳＴ-15 出土剣、ＳＴ-16 出土小刀、ＳＴ-17 出土大刀、ＳＴ-19 出土剣先、ＳＴ-13 出土剣、ＳＴ-03 出土剣、ＳＴ-11 出土剣

Ⅰ．はじめに

調査に至る経緯

えびの市の北に横たわる九州山脈の一郭に、防衛施設庁に管轄される超長波（ＶＬＦ）送信所が建設中である。当事業に関連して、市道坂元-苧畑線を拡幅、国道へは新規直結するという計画が持ち上がってきた。

当該地域は周知の遺跡であることから、埋蔵文化財の保護が必要となり、土木課と協議を重ねた結果、記録保存をはかることとなった。まず、単独市費で遺構確認調査を実施、遺跡の範囲や遺構面までの深さ等を確認して調査地域を絞り、重機を入れて面的調査を行なった。

調査期間は、平成元年７月31日から９月27日を充てた。調査面積は、6,220㎡である。

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境（第１図、図版Ⅰ）

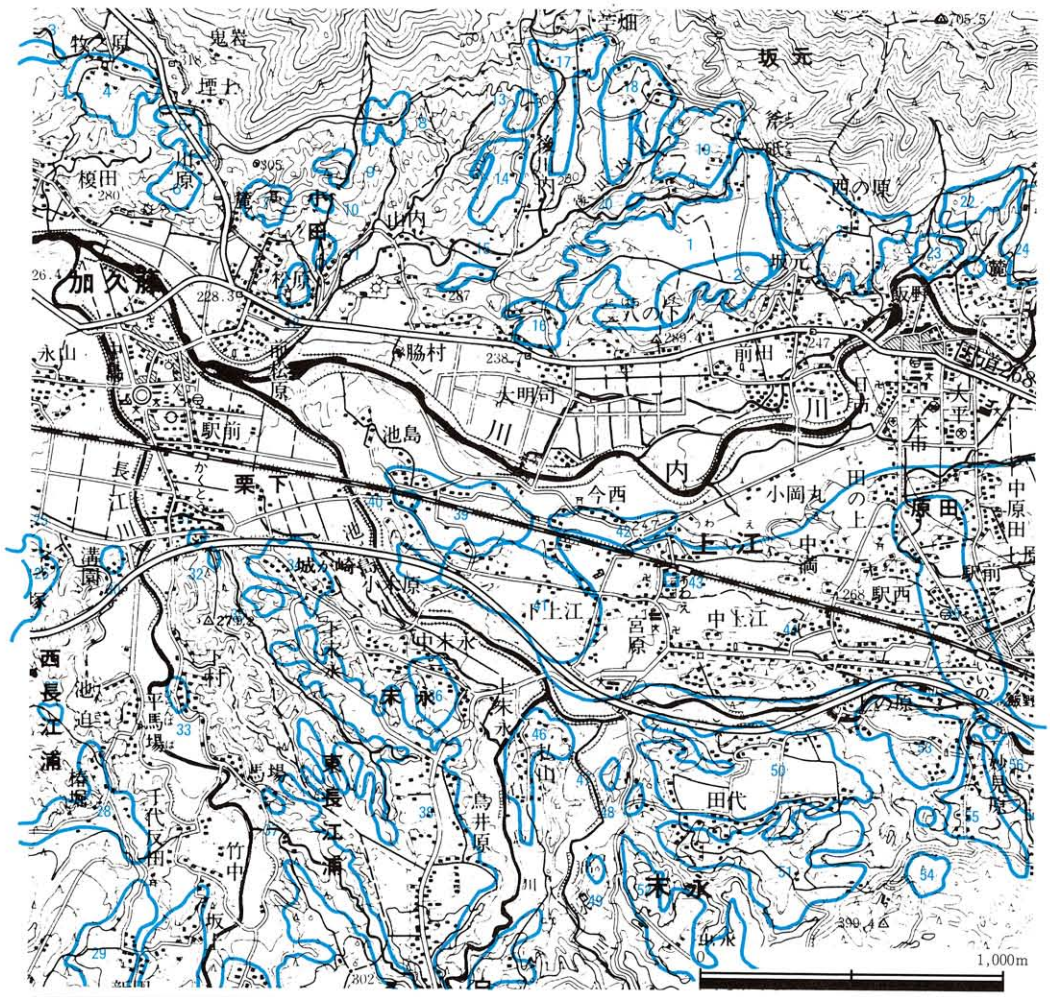
広畑遺跡は、えびの市大字坂元字二本杉・油木の元・広畑・二八山の上、大字大明司字越シ・平田に所在する。

えびの市は宮崎県の西南端に位置し、九州山脈と霧島連山に囲繞された狭長な盆地（加久藤盆地）である。加久藤盆地は、第三紀中頃以後、内陸凹地に湖成層が堆積、第三紀後半から第四紀初に火山砕屑物が堆積したのち、第四紀後半以後泥層と入戸火砕流（シラス）が堆積した。(1) この後、下刻が繰り返され、段丘面が形成されて今日に至る。段丘面には火山灰が堆積しているために水田耕作には適さず、肥沃に富んだ氾濫原が弥生時代以降の可耕地となっていたと思われる。山麓からは鉄山川、池島川、白鳥川、長江川など大小20の支流が川内川に合流し、盆地中央を西へ流れる。

本遺跡は、沖積面との比高約40m、標高約290mの高位段丘上に位置し、現況は遺跡の北半部では湧水を利用した水田、南半部では全て畑となっている。昭和60年度の遺跡詳細分布調査(2)において、縄文時代早期の押型文土器や後期の土器片、弥生土器、土師器、国産陶磁器、剥片（黒曜石）が表採されている。

遺跡の北端域は、斧砥（よきとき）という広域地名で、字のごとく石斧や石庖丁が表採されており、集落や生産遺構が想定される。また北西部では、昭和63年、トレンチャー（ゴボウ播種のための深溝掘削用機械）による掘削の際に石皿が10点余り掘り起こされた。遺跡の背後には、苧畑第１・第２・第３遺跡、山神原遺跡といった縄文時代後期・古墳時代後期を中心とする遺跡が連なっている。

遺跡の南縁部には苧畑地下式横穴墓群が分布しているが、昭和19～20年の飛行場造成の際に相当量の人骨や鉄器が出土した話を聞いている。また、耕作時に板石を掘り当て、庭石等に使用する目的で地下式板石積石室墓の上部構造物はほとんど抜去された。市内には良好な石材が乏しいということも要因になっていると思われる。



№.	遺　跡　名	時　代	19	苧畑第２遺跡	縄文～古墳	38	柊野第１遺跡	縄文～平安
1	広畑遺跡	縄文～古墳	20	苧畑第１遺跡	縄文～古墳	39	永田原遺跡	弥生～中世
2	苧畑地下式横穴墓群	古墳	21	稲荷下遺跡	縄文～中世	40	木崎原古戦場跡	中世
3	東原遺跡	縄文～古墳	22	飯野城跡	縄文～中世	41	小木原地下式横穴墓群	古墳
4	牧ノ原遺跡	古墳	23	極庵遺跡	古墳～平安	42	ロノ坪遺跡	平安
5	丸尾遺跡	縄文～平安	24	愛染院遺跡	古墳	43	法光寺跡	平安
6	埋土遺跡	縄文～平安	25	灰塚遺跡	縄文～平安	44	原田・上江遺跡	縄文～中世
7	加久藤城跡	古墳～中世	26	灰塚地下式横穴墓群	古墳	45	建山地下式横穴墓群	古墳
8	城内第３遺跡	縄文～古墳	27	長牟田遺跡	古墳	46	曲田遺跡	縄文～古墳
9	城内第２遺跡	縄文～古墳	28	岡元遺跡	縄文～平安	47	井穴遺跡	縄文～古墳
10	城内第１遺跡	古墳	29	新田遺跡	縄文～平安	48	後迫遺跡	平安
11	尾山遺跡	平安	30	溝園城跡	中世	49	粥谷遺跡	縄文～弥生
12	廿里遺跡	縄文～平安	31	谷川第１遺跡	平安	50	田代遺跡	縄文～古墳
13	六本原第４遺跡	古墳	32	谷川第２遺跡	弥生～古墳	51	天宮遺跡	縄文～古墳
14	壱合原遺跡	古墳	33	鶴田越遺跡	古墳	52	樅ノ木原遺跡	縄文～古墳
15	大明司鳥越遺跡	古墳	34	城ヶ崎遺跡	弥生	53	妙見原遺跡	縄文～古墳
16	越シ遺跡	古墳	35	柿ノ木城跡	弥生～中世	54	鳶ノ木遺跡	弥生～古墳
17	山神原遺跡	縄文～古墳	36	村ノ前遺跡	縄文～古墳	55	石落下遺跡	縄文～古墳
18	苧畑第３遺跡	縄文～古墳	37	畑田城跡	中世	56	大迫原遺跡	縄文～古墳

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1：50,000）

旧石器時代

遺構・遺物は発見されていない。

縄文時代

早期の遺跡としては、押型文土器の出土した前畑遺跡[3]、灰塚遺跡[4]、小木原遺跡群久見迫Ｂ地区[5]などがあげられ、久見迫Ｂ地区では柱穴状遺構が検出された。前期の遺跡としては、曽畑式轟式土器の出土した前畑遺跡および灰塚遺跡があげられる。中期の遺跡は未発見である。後期の遺跡としては前畑遺跡、灰塚遺跡などがあげられ、当該期に属する遺跡が多い。晩期の遺跡としては、黒色磨研土器が出土した灰塚遺跡があげられる。

表採資料としては、村ノ前遺跡や天神免遺跡、灰塚遺跡、大迫原遺跡などで石皿が、村ノ前遺跡と天宮遺跡で石錘が、石鏃・石斧類は市内各所で採集されている。剥片石器の原石は、鹿児島市三船産、大口市日東産、人吉市桑ノ木津留産の黒曜石が多い。

弥生時代

中期の甕形土器が新田遺跡と小木原遺跡群久見迫Ｂ地区で発見されている。後期の遺跡としては、免田式土器の出土した灰塚遺跡と久見迫Ｂ地区があげられる。生活遺構としては、永田原遺跡[6]で間仕切り住居１軒を検出しているのみである。

生産遺構に関連するものとして石庖丁が、中棚遺跡、田原陣遺跡、小木原遺跡群蕨地区、法光寺跡、天神免遺跡、さらに苧畑遺跡で各１点、灰塚遺跡で２点発見されている[7]。

古墳時代

生活遺構は調査されていないが、南九州独特の墓制が営まれている。

地下式横穴墓は島内、灰塚、小木原、苧畑、建山そして杉水流（すぎづる）の６ヶ所に群在し、各々特徴がみられる。当墳墓はすべて平入り長方形ないし楕円形を呈するが、灰塚では竪坑上部閉塞、小木原のうち馬頭・久見迫地区では羨道閉塞（後者の閉塞材はアカホヤ塊），小木原地区と島内・苧畑では共存している。これらは、全て洪積世の砂礫段丘上に立地する。明治38年には、島内で「径15間、高さ４尺」の墳丘を有する地下式横穴墓が、大正２年には、建山で「高さ３ｍ、饅頭形」の墳丘をもつもの２基が調査されており、早くから当該墳墓は知られていた[8]。昭和44年を中心として島内と小木原では、段丘下部に堆積している礫を建築材料とする目的で、重機による掘削を行ない、幾多の地下式横穴墓が削失した[9]。

小木原１号、杉原（＝島内）、杉原41－1号から甲冑が、小木原Ａ号墳から小型仿製鏡と陶邑産の須恵器が出土している。築造年代は６世紀に集中し、７世紀に降るものは無い。

地下式板石積石室墓は、建山を除く５ヶ所と大迫原遺跡に群在し、４～５世紀代に営まれる。

歴史時代

奈良時代の遺物としては、天神免遺跡（字蓮花寺）より蔵骨器（須恵器）２点[10]が発見されている。平安時代は、10世紀前半の土師器や布目瓦が出土した法光寺が知られているにすぎない。

えびの市は、島津庄真幸院に組み込まれていたが、この領地をめぐって島津氏と伊東氏が激

■ TRENCHI

0　100m

第２図　調査地点位置図（１：5,000）

戦を繰り返し、木崎原や三角田（みすみだ）の古戦場、首塚、六地蔵などが往時を偲ばせる。飯野城・加久藤城をはじめとする20有余の中世の山城は、氾濫原に突出した段丘の先端部に集中している。飯野城周辺には、漢詩を作る時の辞書『三重韻』や教科書『碧厳録』を印刷・出版した長善寺や愛染院、昌極庵といった多くの寺院があったが、廃仏毀釈で廃寺となっている。

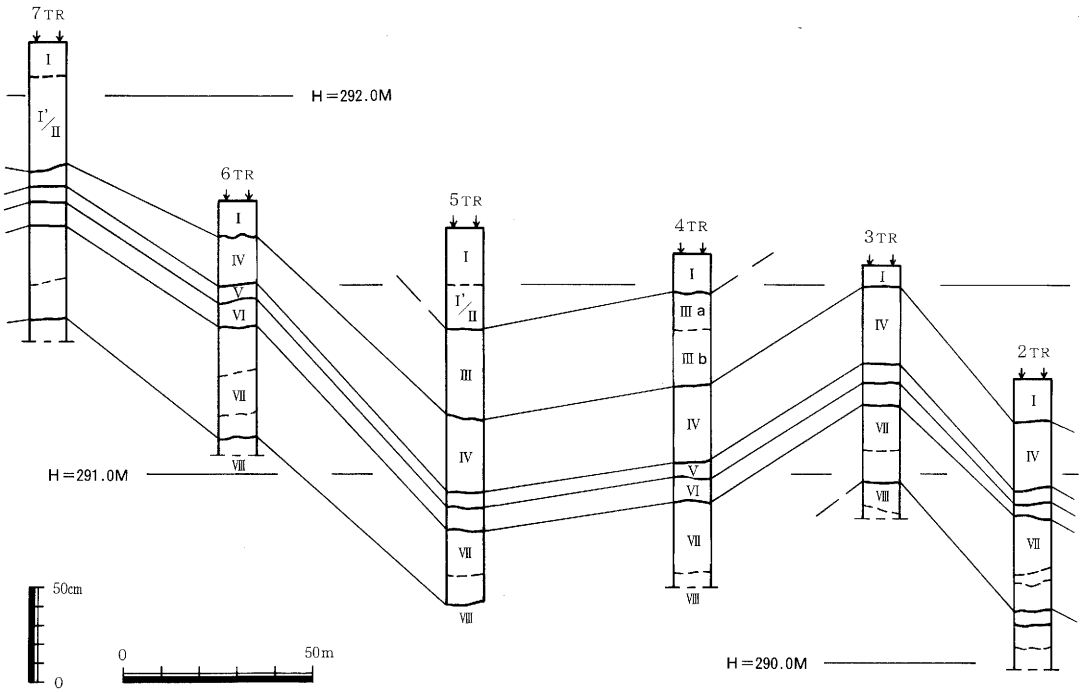
島津氏支配の後は門割制度が設けられ、新田開発・整備が行なわれていったようである。広畑遺跡の北東部には、16世紀後半、島津氏が開山したと伝えられる鉄山があり、砂鉄を原料とした製鉄が明治期まで営まれていたが、実体は不明である。また、市の北西端、西之野においては、1856年に鉄鉱石が発見され、島津斉彬の命によって短期間ではあったが、原料採掘が行なわれた。のち1897年、地元民によって10年余、精錬段階まで営まれていた。

地下式横穴墓から出土する鉄器の量を考えると、上記２ヶ所の製鉄の開始年代に興味がもたれ、今後の調査に期待される。

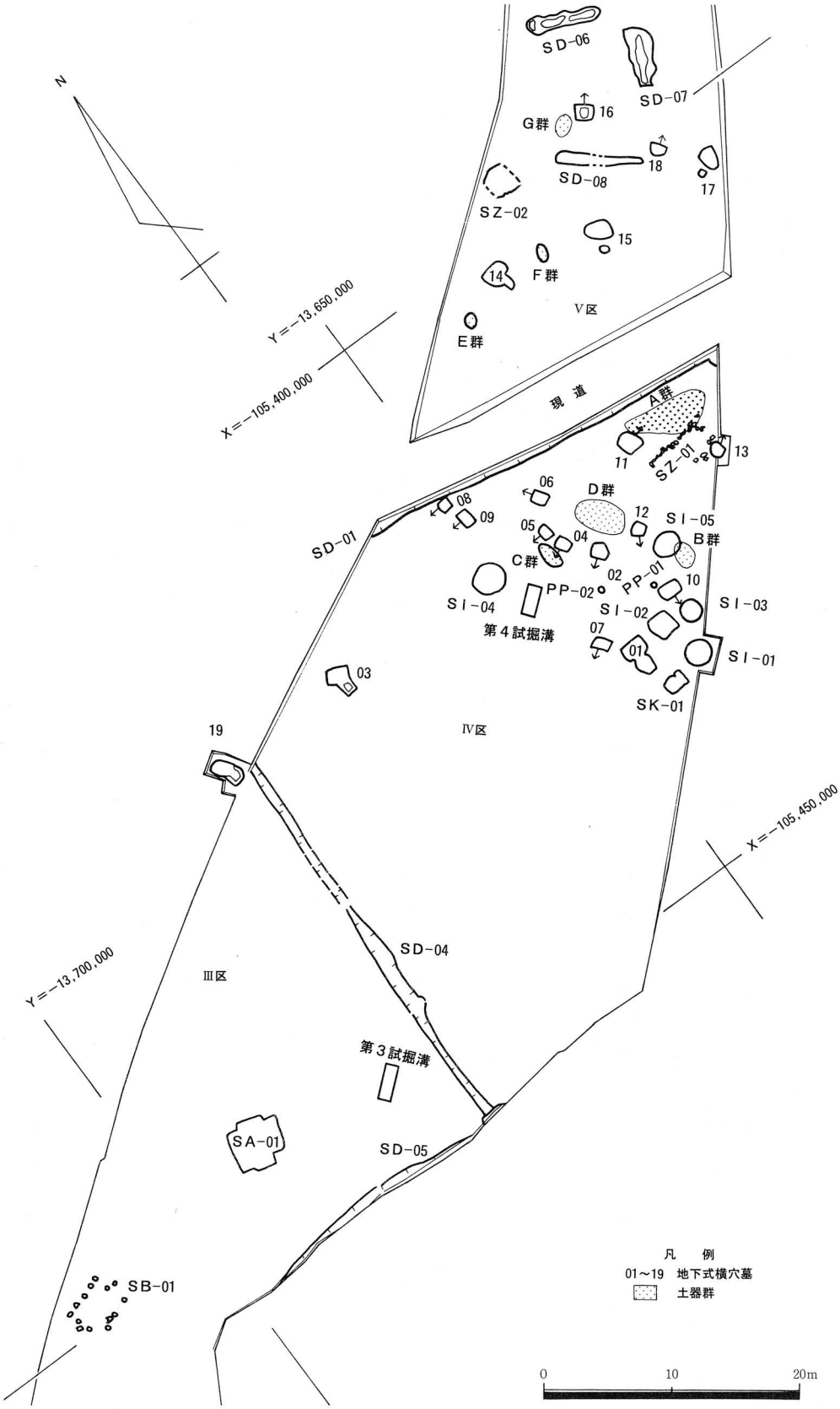
このほか、大字二八の下において、昭和54年３月、圃場整備事業に伴って塚（仕置塚）を削平する際、一字一石経が掘り出され、若干数が現存している。

Ⅲ．遺構確認調査

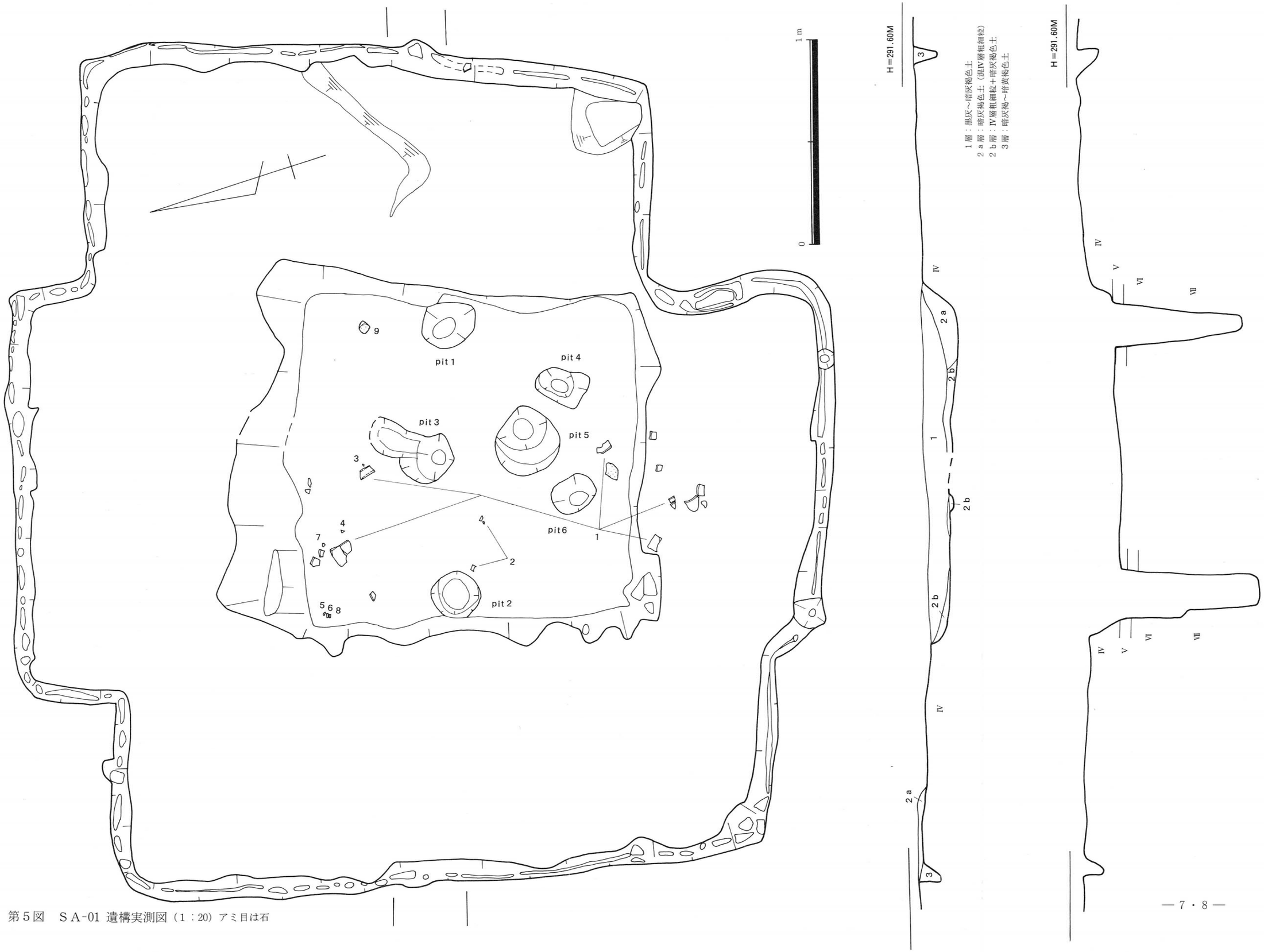
調査対象地域に、約50mおきに19ヶ所設けた。遺跡の北半部は、開墾や道路改修によって撹乱が著しい。南半部においては火山灰が良好に遺存していたものの、遺構は検出されず、極く微量の遺物が検出されたにすぎない。



第３図　層序柱状図



第4図　Ⅲ～Ⅴ区 遺構分布図（1：500）



第５図　ＳＡ-01 遺構実測図（1：20）アミ目は石

基本的層序（第３図）

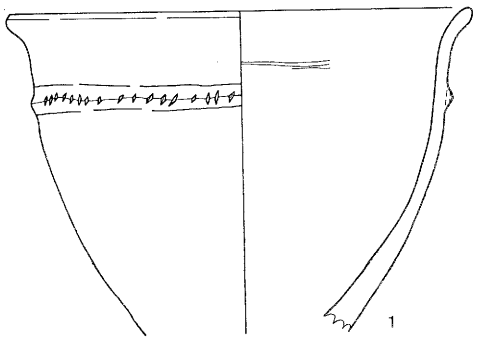
層序は上から、Ⅰ層：耕作土（黒灰色土）、Ⅱ層：畑作基盤土・旧耕作土（淡黒灰～暗灰色土）、Ⅲ層：黒灰色土（ａ・ｂ２層に分けられ、ｂ層は硬質である）、Ⅳ層：黄褐色微砂質土（アカホヤ火山灰）、Ⅴ層：暗茶褐色～茶褐色土（硬質ローム、やや粘質、黒灰色土が斑状に混在）、Ⅵ層：暗灰～淡黒灰色土、Ⅶ層：茶褐色～淡黄褐色土、Ⅷ層：黄褐色土（混橙褐色土、硬質）、Ⅸ層：黄褐色土（混クサリ礫、＝地山）に分別した。なお、台地縁辺部のⅨ層は砂礫層（更新世堆積物）である。

Ⅳ．発掘調査

調査は、遺構確認調査の結果から苧畑地下式横穴墓群分布域と重複する地域に絞り、排土方法等の問題から７区に区分けした。

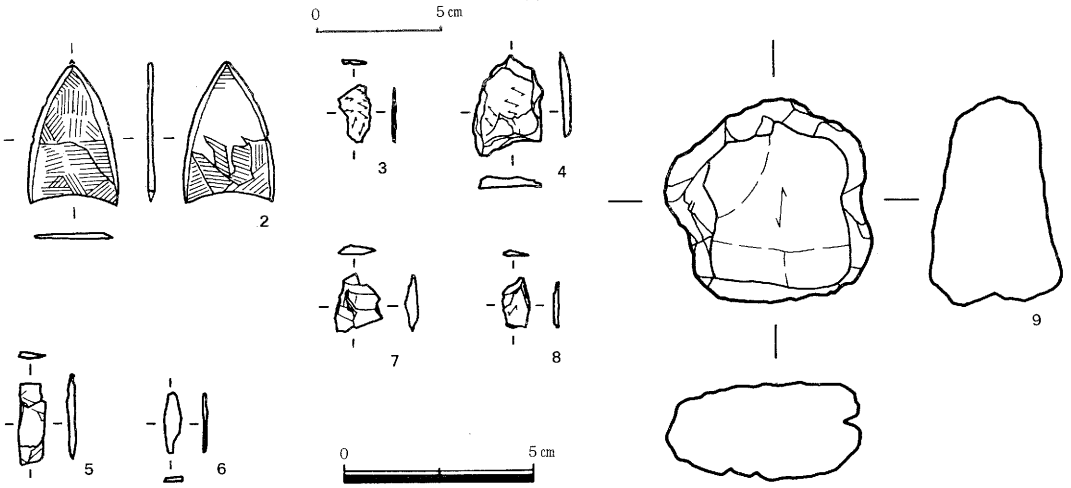
Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ区からは近世ないし近現代と思われる水路や土坑（一筆境畦畔沿いの樹木植栽用の穴）、イモ穴を検出したにすぎず、Ⅲ～Ⅴ区に遺構が集中していた。

１．弥生時代の遺構と遺物



No.	図版	器種	法量(mm) 長	幅	厚	石質	特徴
2	34-3	磨製石鏃	37.5	24	1.5	緑色片岩	基部は面をなす
3	34-8	同 破片	16	8	1	〃	Ａ面のみ研磨痕
4	34-4	〃 〃	27	18	3	〃	Ａ面上半のみ研磨痕
5	34-5	剥 片 ？	15	12.5	3	〃	
6	34-9	破 片 ？	13.5	7.5	1	〃	Ａ面のみ研磨痕
7	34-6	剥 片 ？	21.5	7	2	〃	
8	34-7	〃	16.5	5	1	〃	
9	34-2	用途不明	54	53	35	軽石	Ｂ面は自然面

第１表　ＳＡ-01 出土遺物観察表



第６図　ＳＡ-01 出土遺物実測図

Ⅲ区において、竪穴式住居１（ＳＡ-01）を検出したのみである。

ＳＡ-01（第５図、図版６）

遺構面が高く、0.40～0.50m程度削失している。遺存部の規模は、東西3.80～4.20m、南北4.20mを測る。四隅を欠く間仕切りタイプで、幅・深さともに0.10m内外の壁溝が全周する。壁溝には板が立ててあったと思われ、溝底部において、長さ0.10m内外で若干のレベル差が認められる。南辺２ヶ所には、小柱穴が設けられている。

床面中央部（内区）は、0.10～0.18m掘り込まれ、四辺がベッド状遺構（外区）になっている。pit １（直径0.23～0.25m、深さ0.61m）とpit ２（直径0.23m、深さ0.68m）が主柱穴である。pit ３は、直径0.24～0.26m、深さ0.07mのものに、長さ0.18m、幅0.16m、深さ0.02mの浅い掘り込みを伴うものである。pit ４は、直径0.18～0.23m、深さ0.32mを測る。pit ５は、直径0.32～0.35m、深さ0.30mを測り、二段掘りである。pit ６は、直径0.17～0.22m、深さ0.36mを測る。いづれも柱痕は無い。

外区は東・西辺を長く、北・南辺を短く区分けしてある。また、上面にはⅢ層のブロックが多量に混在している。

出土遺物（第６図、第１表、図版34）

全て流れ込みで、原位置を保つものは無い。甕１、磨製石鏃１、同　破片３、同　破片もしくは剥片３、用途不明石器１が出土した。

甕は、内区北西部から外区にかけて散在し、底部を欠く。口縁部は外反し、端部外面は肥厚する。体部との境には刻目凸帯１条を付す。内面はナデ調整であるが、外面にはススが付着しており、調整は不明である。内面は茶褐色を呈し、１㎜前後の砂粒を含む。

磨製石鏃は、完形品１が３片に割れていた（**2**）。凹基式で左右対象形、断面は扁六角形を呈し、鎬は無い。Ｂ面上半部に剥離面を残すほかは全て研磨され、基部は面をなしている。内区の北西部には、同一石材で片面が研磨されているものや、砕片もしくは剥片と考えられるものが検出された。

その他、片面に磨痕のある軽石１が内区の北東部で出土した。

２．古墳時代の遺構と遺物

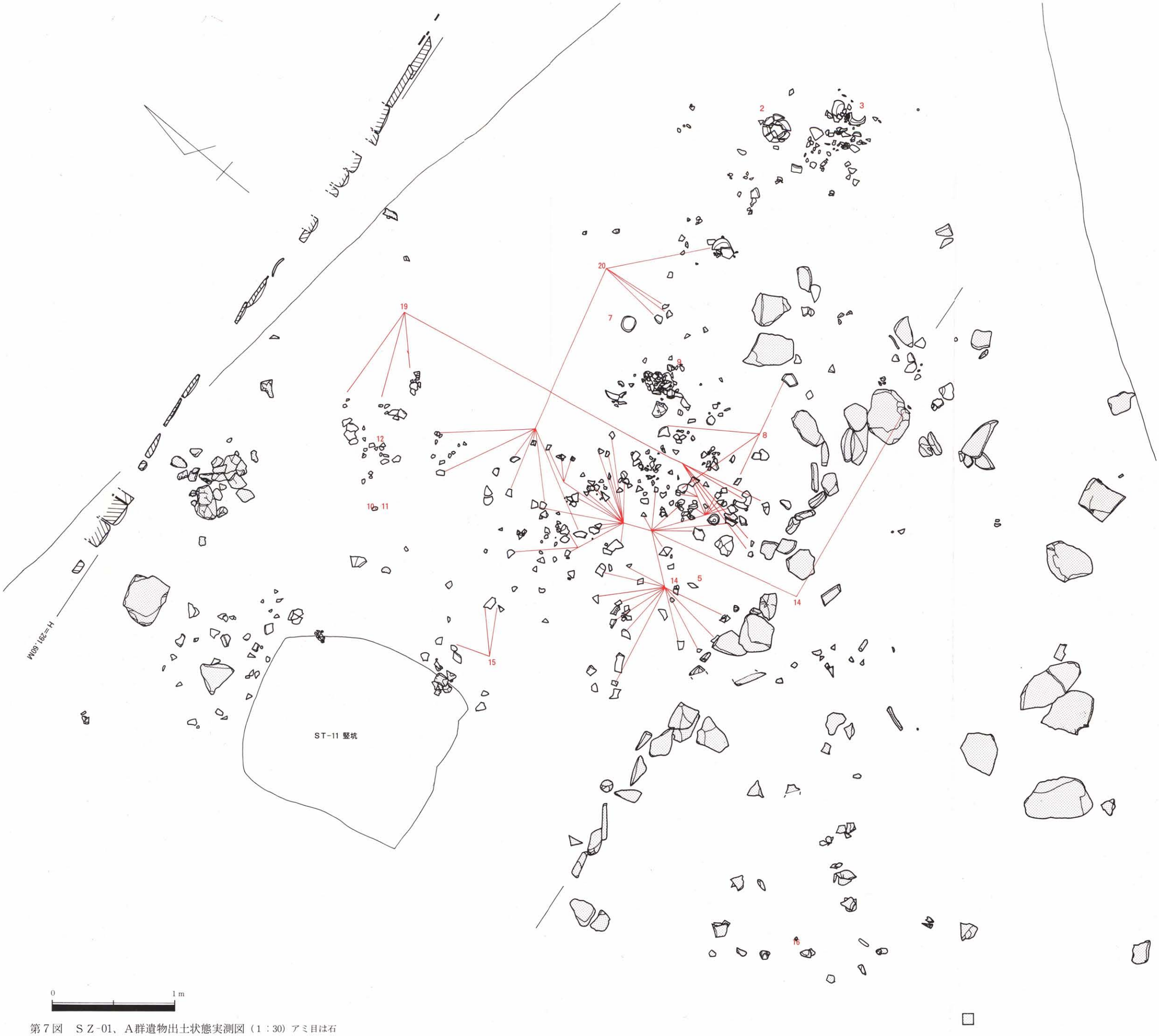
Ⅳ～Ⅴ区において、石組遺構１（ＳＺ-01）、地下式板石積石室墓（ＳＩ-01～05）、地下式横穴墓（ＳＴ-01～19）、柱穴２（ＰＰ-01、02）、土器群７（Ａ～Ｇ群）を検出した。

ＳＺ-01（第７図、図版７）

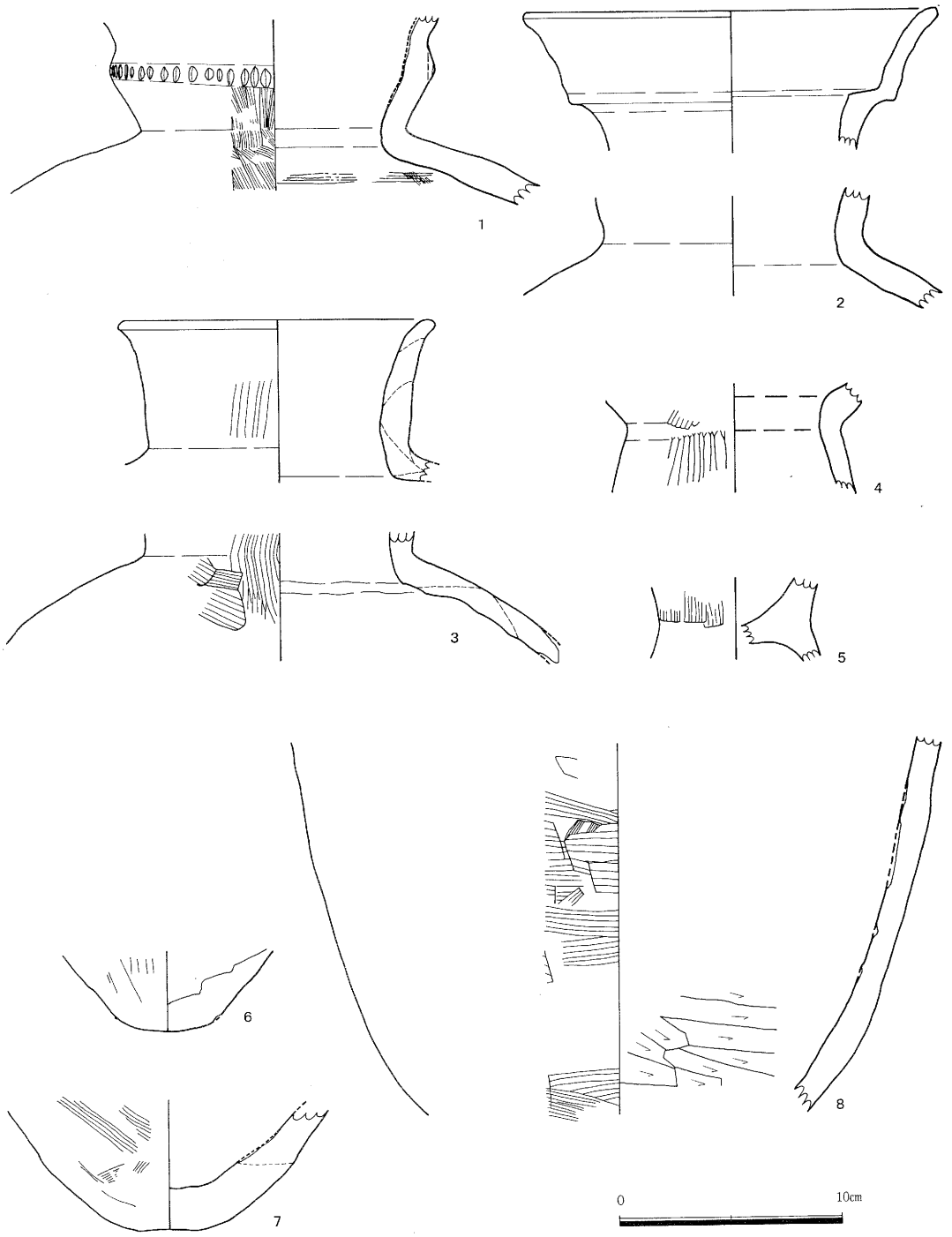
ＳＴ-13の西に接して、東西4.80m、南北2.20mの長方形に板石を配置した遺構である。

板石は、地下式板石積石室墓や地下式横穴墓の閉塞石と同じ輝石安山岩の割り石がほとんどで、若干の扁平な河原石を使用している。

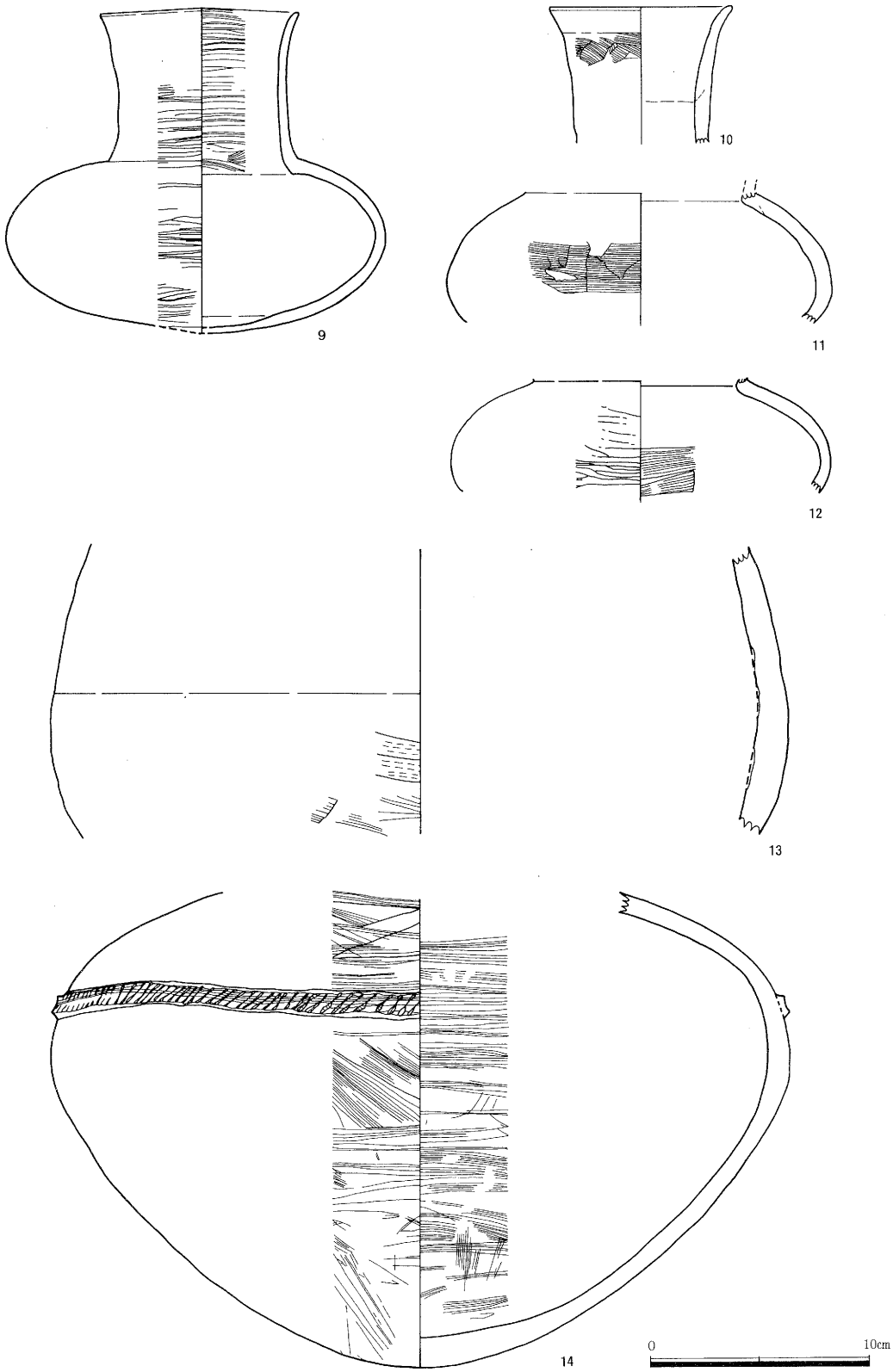
北辺は遺存状態が良い。板石の半数は埋め込まれたままで、掘形も確認された。人頭大を越



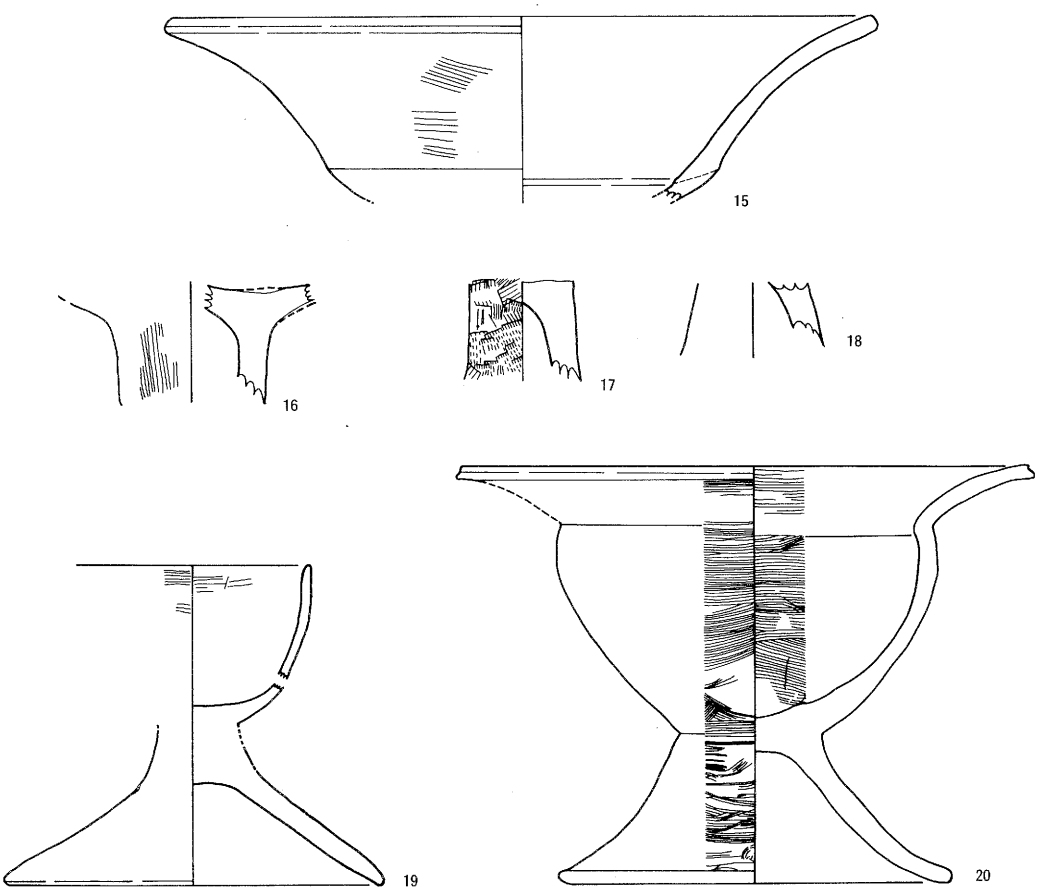
第７図　ＳＺ-01、Ａ群遺物出土状態実測図（１：30）アミ目は石



第８図　Ａ群遺物実測図(1)（その１）（１：３）



第９図　Ａ群遺物実測図(その２)（１：３）



第10図　A群遺物実測図(その３)（１：３）

0　10cm

No.	図版	器形	法量(mm) 口径	底径	器高	最大径	文様および調整 外面	内面	胎土 砂粒・量	しそ輝石	赤褐色粒	焼成	色調 外面	内面
1	35-1	壷					ヨコナデ、ハケ	ナデ、タタキ→ナデ	1～5⁵/₉・多	微		良好	淡茶灰	淡黄灰～淡茶灰
2	35-4	壷	185				ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	1～2⁵/₉・多		1～4⁵/₉・少	ややあまい	淡橙褐	淡橙褐
3	35-2	壷	141				口縁部ヨコナデ他はハケ	口縁部ヨコナデ他はナデ	1⁵/₉位・多		1～4⁵/₉・少	ややあまい	淡橙黄～淡黄	淡黄～淡黄白
4	36-5	甕					ハケ	ナデ	1～2⁵/₉・少		1～5⁵/₉・少	良好	淡灰褐	淡灰褐
5		甕					ハケ、台部はナデ	ハケ	1～2⁵/₉・多		2～3⁵/₉・少	ややあまい	淡桃黄	淡灰褐
6		壷		33			ハケ	不明	1～2⁵/₉・多		1～4⁵/₉・多	良好	淡桃褐	淡桃褐
7	35-7	壷		29			ハケ	不明	1～2⁵/₉・多		2～4⁵/₉・多	良	淡黄褐～茶褐	淡黄
8	35-8	壷					ハケ	ケズリ	1～2⁵/₉・多		1～5⁵/₉・多	良	淡黄	淡黄白～淡橙黄
9	35-9	長頸壷	90		150	173	ハケ	頸部ハケ、以下ナデ	1⁵/₉位・少	少		良好	茶褐	淡茶褐
10		長頸壷	83				ハケ、ナデ	ナデ	1⁵/₉位・少	少		良好	淡橙黄～淡黄	淡橙黄～淡黄
11		長頸壷				175	ハケ	ハケ→ナデ、ハケ	精良		1⁵/₉位・少	良好	淡橙黄	淡黄
12		長頸壷				173	ヘラミガキ	ナデ、ハケ	精良			良好	淡桃黄～淡黄褐	黄灰
13	35-5	壷				337	ハケ	不明	1～2⁵/₉・多		1～5⁵/₉・多	良	淡黄褐	淡黄褐
14	35-3	壷				338	ナデ、凸帯以下ハケ	ハケ	1～5⁵/₉・多	少		良好	淡黄褐～淡橙黄	淡茶褐～淡黄褐
15	36-2	高坏				279	ナデ	ナデ	1～2⁵/₉・少			良好	黄褐	淡茶褐
16	36-1	高坏					ハケ	不明	1～2⁵/₉・微		1～3⁵/₉・少	ややあまい	淡茶褐	淡茶褐
17		高坏					ハケ	ナデ	1⁵/₉位・多			良	淡黄褐	淡黄褐
18		高坏					不明	ナデ	1⁵/₉位・多			ややあまい	淡橙褐	暗灰鼠
19	36-3	高坏	84～93	143	80		ハケ、脚ハケ→ナデ	ハケ、ナデ	精良			良好	淡橙黄～淡黄	淡黄～淡黄褐
20	36-4	台付鉢	227	150	165		ハケ	ハケ	1～2⁵/₉・少			良	淡灰褐	淡灰褐

第２表　A群遺物観察表

えるものは、全て倒れたり移動している。南辺は、大きめ（長さ0.30～0.50m）の板石が倒れている状態で、東・西辺も極く一部しか遺存していない。南西部には、５～15cm大の、破砕片と思われる板石が散在している。

Ａ群遺物（第７～10図、第２表、図版35～36）

ＳＴ-11の東、ＳＺ-01の北に遺物が集中している。ＳＺ-01内にも微量ながら散布している。破片数は多いが、個体数としては25前後である。壷８と長頸壷４、甕２、高坏５、台付鉢１の計20点が図化できた。各々の個体片は広範囲に散り、全体の形状がわかるのは９の長頸壷のみである。

１は復合口縁の壷で、肩が強く張るタイプである。口縁屈曲部は肥厚し、米粒大の刻み目が施されている。**２**は１と異なるタイプの壷で、くの字に屈曲する部位の稜線は鋭い。口縁端部は面をなし、端部は鋭い。**３**は、口縁部がゆるやかに外反し、端部を屈曲させるタイプの壷である。**４**は小型の甕、**５**は甕の底部片である。**６**と**７**は壷の底部で、平坦面をわずかに有する。**８**と**13**は壷の胴部であるが、傾きに不安がある。**９～12**は長頸壷で、12の外面のみヘラミガキ他はハケとナデ調整である。**９**の底部は丸底に近く、内面の器壁は薄く削られている。**13**は壷の胴～底部で、破片がすべて接合したものの、半個体分しか遺存していない。胴部には、断面M字型の突帯が巡り、刻み目が施される。器壁はほぼ均等の厚さで、ハケあるいはナデ調整によって丁寧に仕上げられている。**15**は大型の高坏の坏部で、外面にハケ目を一部残すが、全体的に丁寧な仕上げである。**16～18**は高坏の脚部であるが、一様ではない。**19**の坏部の器壁は薄く、いびつである。脚部は直線的に扇状に広がり、内部にはモミ殻の圧痕がある。**20**は台付鉢で、口縁部と体部、底部と体部の境は鋭く屈曲する。口縁端面には若干の凹みがある。

ＳＩ-01（第11図、図版７・８）

ＳＫ-01、ＳＴ-01、ＳＩ-02、03と隣接する。

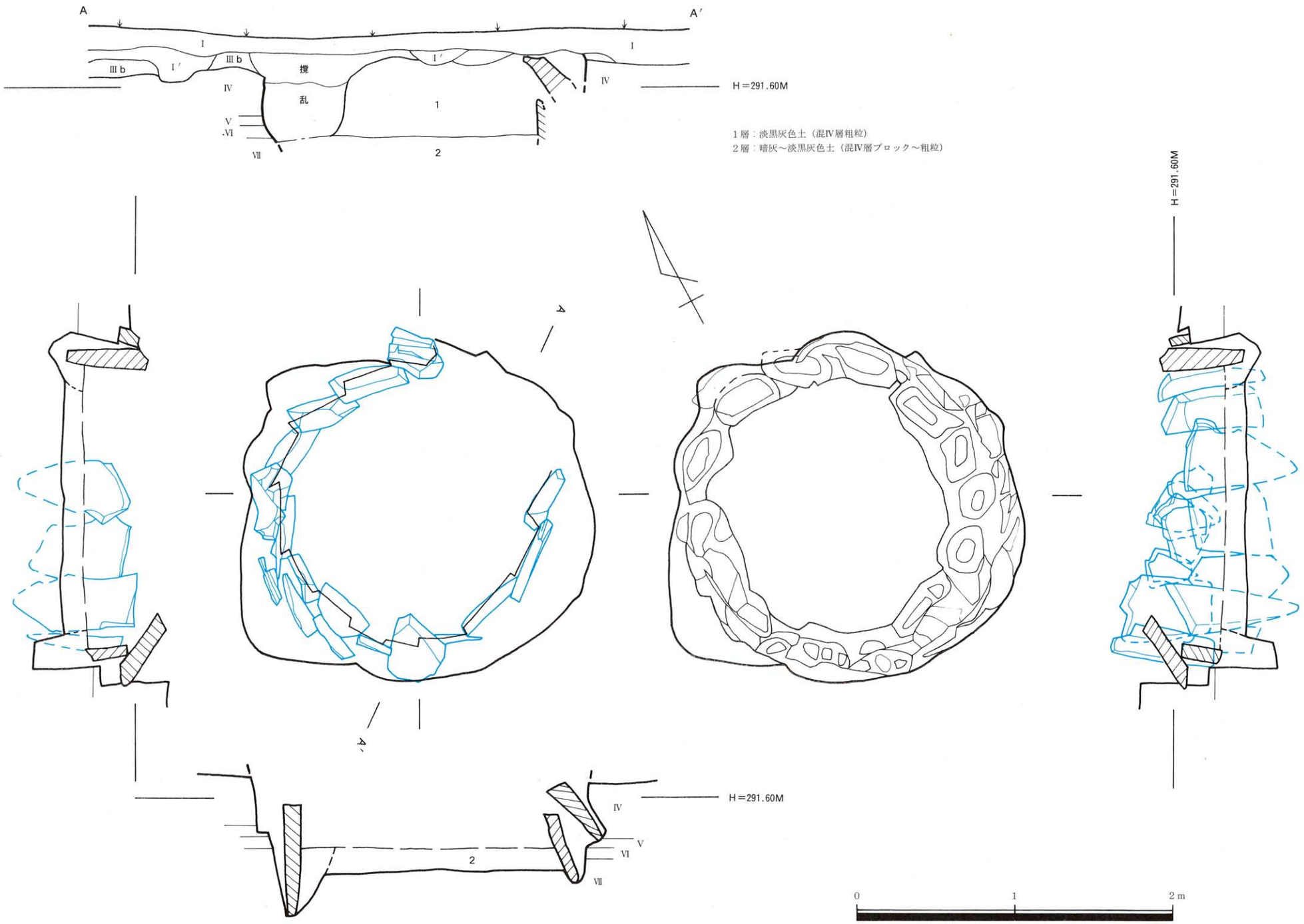
表土を剥ぐとすぐに、板石の一部が露出した。上部構造は削失し、側石（基底立石）も1／4が抜去されている。プランは半円半方形を呈し、墓壙の規模は長さ2.24m、幅2.12m、底面までの深さ0.60mを測る。床面までの深さは0.45mで、その差0.15mが貼り床である。貼り床後、周壁に、側石を立てるために深さ0.22～0.43mの坑が個別に掘削される。側石の裏込めには、アカホヤ塊が多く使用されている。側石は13枚遺存している。床面は内法径1.60～1.80mの円形を呈する。墓壙壁面は、石室構築（持ち送り）のための抉り込みやテラスが設けられている。

出土遺物は無い。

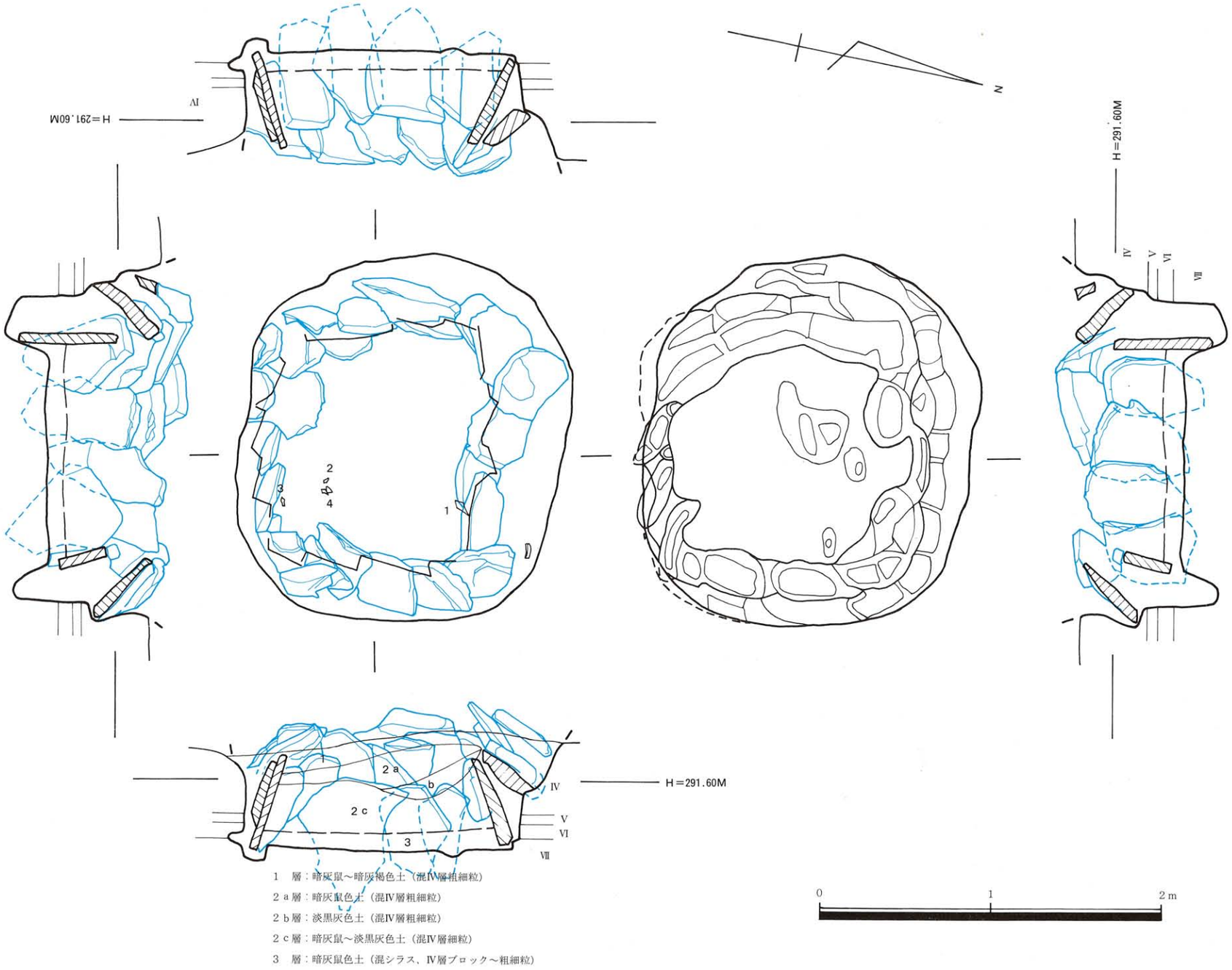
ＳＩ-02（第12図、図版９）

ＳＴ-10とＳＩ-03の間に位置する。

上部構造は削失するが、天井石２～３段まで遺存している。検出時には、天井石の一部がＳＴ-10の竪坑寄りに散乱しており、早くに損壊を受けたものと思われる。



第11図　ＳＩ-01 遺構実測図（1：30）



第12図　ＳＩ-02 遺構実測図（1：30）

プランは楕円形に近い隅丸方形で、墓壙の規模は長さ2.14m、幅1.90m、底面までの深さ0.66mを測る。さらに周壁には、深さ0.09～0.26mの側石溝が個別に掘削される。側石の裏込めと並行して、厚さ0.12m前後の貼床（第３層）が施される。床面上面にはシラスも混入される。

側石は北・南・東辺で各４枚、西辺３枚で構築され、床面の内法は、東西1.22～1.40m、南北1.12－1.40mの歪方形を呈する。

墓壙の壁面には、内傾する抉り込みやテラスが設けられている。

出土遺物（第13図、図版39）

北東部に１点、南東部に３点の鉄鏃を検出した。**1**は床面から0.17m、**2**・**4**は0.05m浮いた状態で、原位置ではない。**1**・**2**・**4**の頸部には、樹皮巻き矢柄（竹）が遺存している。

1は、圭頭広根斧箭式である。現存長96㎜、鏃身長16㎜、最大幅35㎜を測る。**2**～**4**は、椿葉式である。**2**は全長81㎜、鏃身長と最大幅は25㎜である。**3**は全長52㎜、鏃身長14㎜、最大幅18㎜である。**4**は全長45㎜、鏃身長11㎜、最大幅13㎜である。

ＳＩ－03（第14図、図版10）

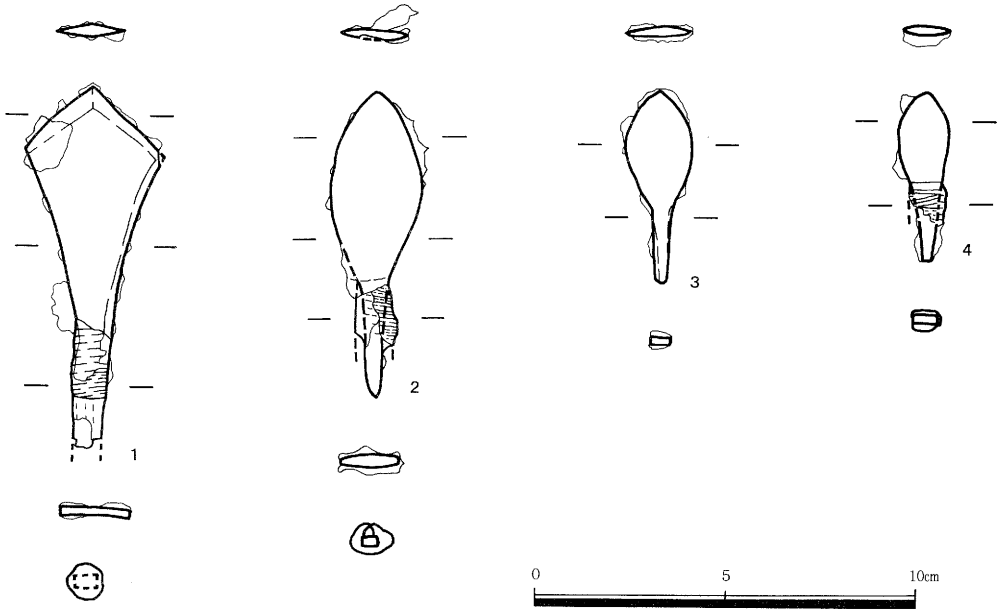
ＳＩ-02から東へ0.90mに位置する。

地下式板石積石室墓の中では、最も小規模な遺構である。

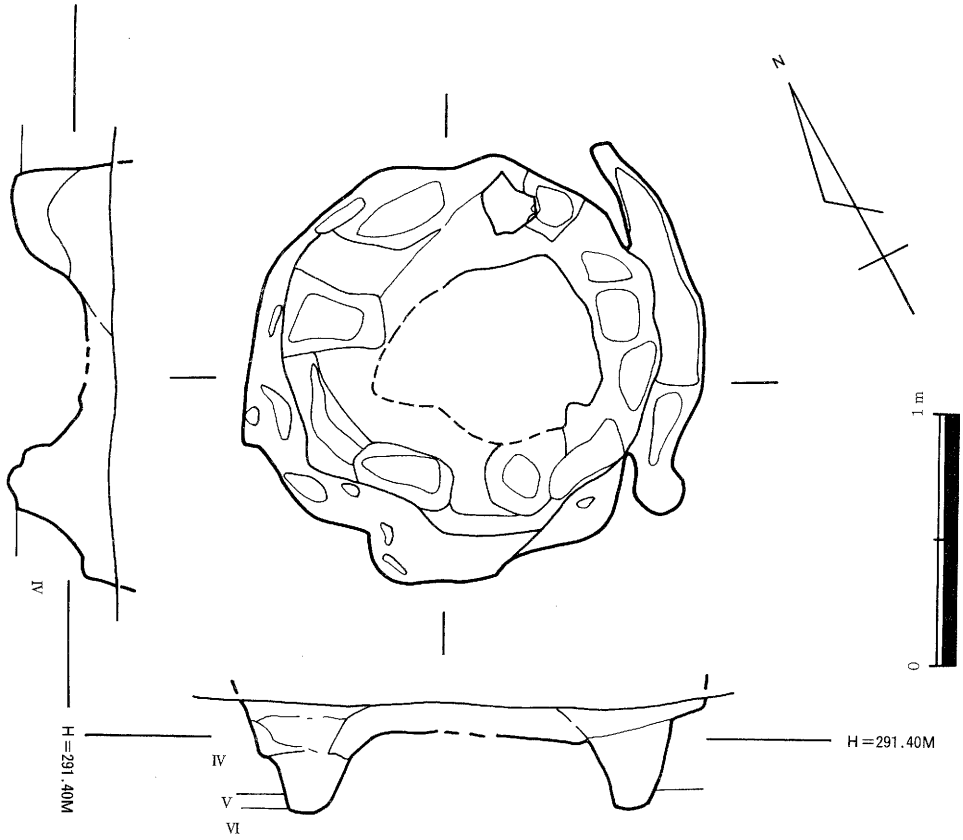
後世の削平および撹乱が著しく、板石も全て抜かれていた。

プランは円形を呈し、墓壙の規模は、直径1.70～1.80m、底面までの深さ0.11mを測る。貼り床の有無は不明である。周壁には、深さ0.20～0.30mの側石溝が掘削される。床面の内法は直径0.70～0.90mであったと推定される。

出土遺物は、側石溝内から土師器片が１点出土したのみである。



第13図　ＳＩ-02 出土遺物実測図（１：２）



第14図　ＳＩ-03 遺構実測図（1：30）

ＳＩ-04（第16図、図版10・11）

他の板石積石室墓とは、距離を置く。掘形は原形を保っているものの、内部の撹乱は著しく側石９枚と天井石１枚が原位置を保っていたにすぎない。

プランはほぼ正円形で、墓壙の規模は直径2.50m前後、底面までの深さ0.50～0.55mを測る。周壁には、深さ0.18～0.30mの側石溝が掘削される。側石構築後、シラス塊の混じる厚さ0.06～0.08mの貼床（第５層）が施される。

床面は、内法1.84m前後の円形を呈する。

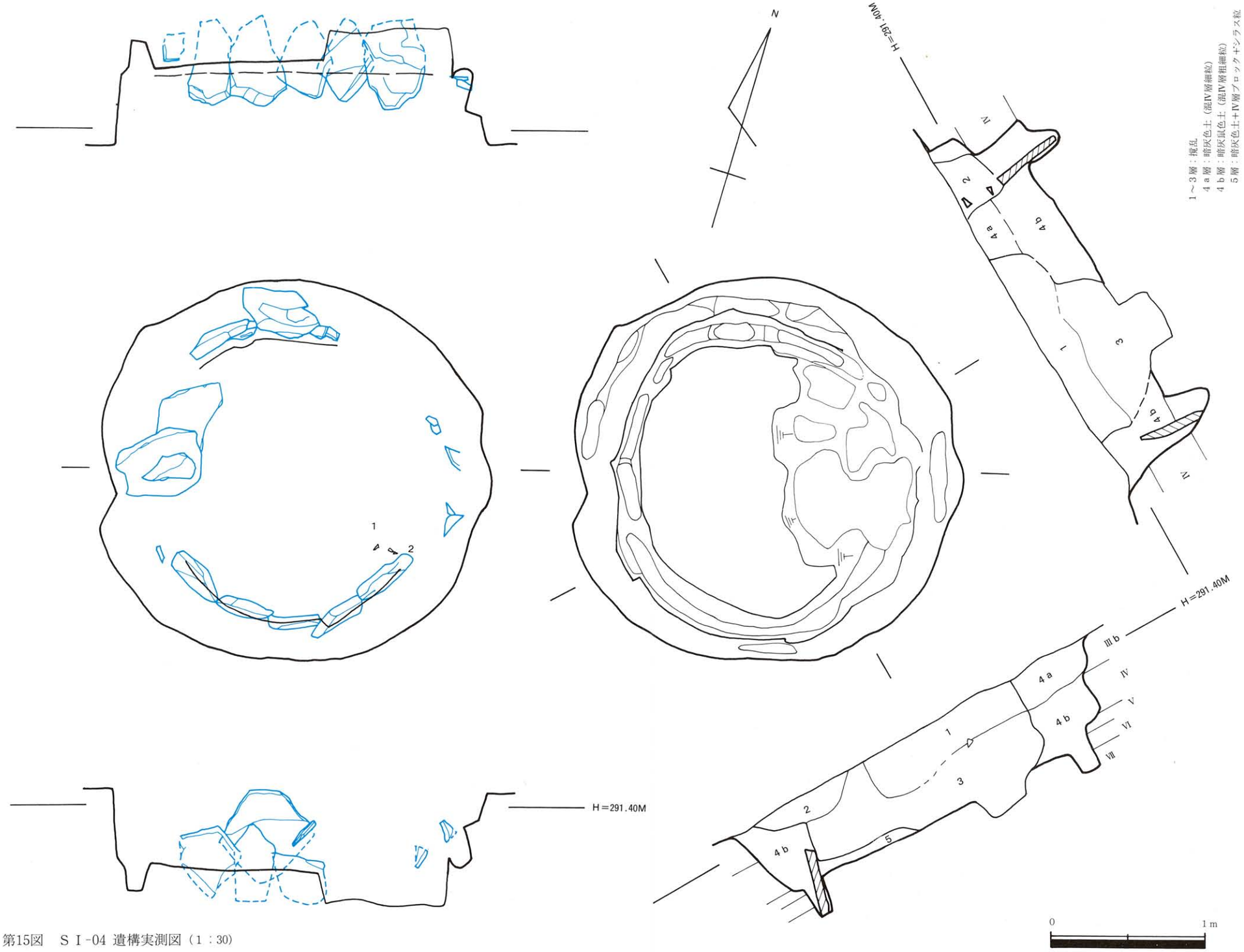
出土遺物（第16図、図版39）

撹乱坑から、鉄鏃の頸部２点が出土した。２点とも広根式で、**1**は現存長46㎜を測り、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。**2**は現存長36㎜を測る。

ＳＩ-05（第17図、図版11）

ＳＴ-10の北東1.50mに位置する。

プランはほぼ円形で、掘形の規模は直径2.00～2.20m、底面までの深さ0.60mを測る。側石溝は北～東部にかけてみられ、深さは0.05～0.15mを測る。



第15図　ＳＩ-04 遺構実測図（1：30）

墓壙埋土からは、１片の板石も出土していない。また、最下層はⅣ層のブロックを主とし、人為的に埋め戻した感を受ける。

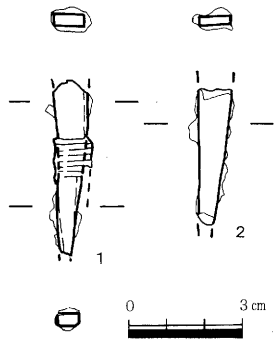
平面プラン、墓壙の規模と断面形態、側石溝の掘り込み状態、さらに板石の有無を総合すると、当墳墓は築造途中に何らかの理由で放棄されたものと思われる。

出土遺物は無い。

Ｂ群遺物（第18・19図、図版36）

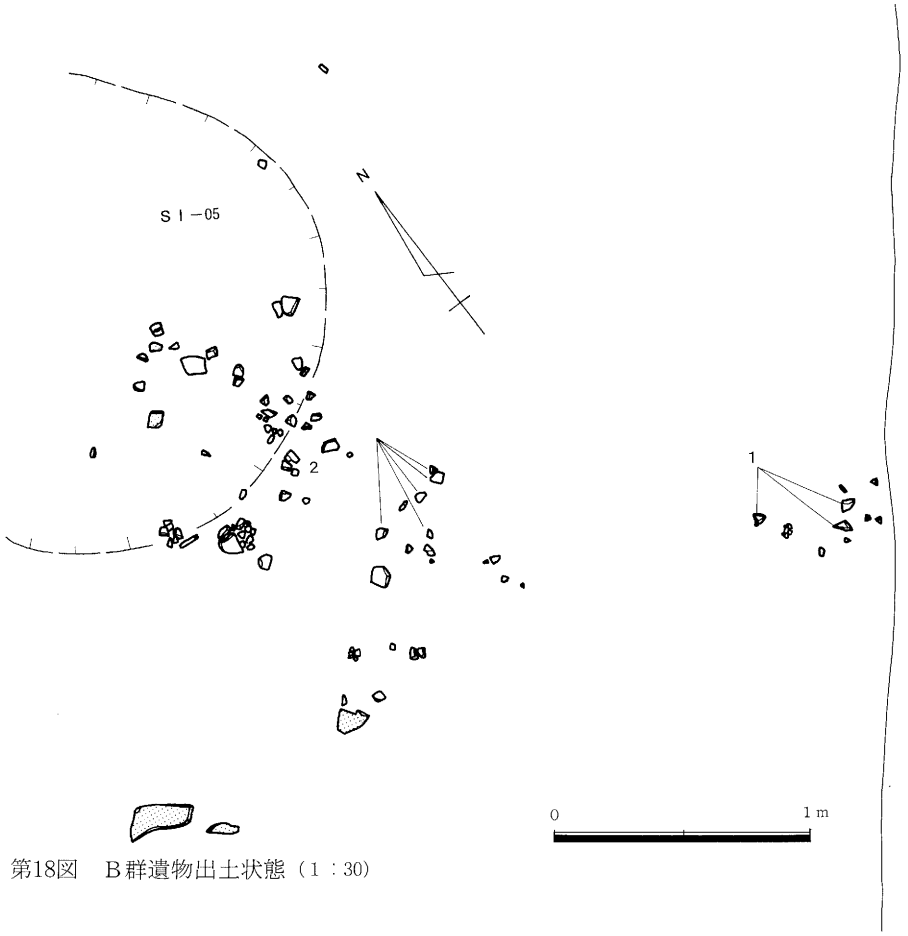
ＳＩ-05上面の南部から南方にかけて、土師器の破片が集中していた。壷と長頸壷、高坏で構成されるが、図化できる遺物が少ない。

１は、壷の口縁部で口径16.2cmを測る。外反する口縁部の端部は面をなす。調整は不明である。２は、長頸壷の肩～胴部で、最大径11.7cmを測る。調整は不明である。

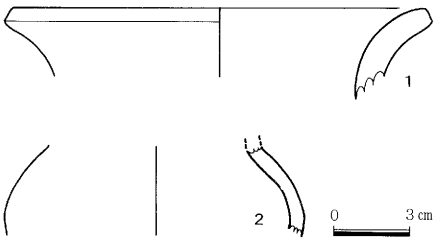


第16図　ＳＩ-04出土遺物

第17図　ＳＩ-05 遺構実測図（1：30）



第18図　Ｂ群遺物出土状態（1：30）



第19図　Ｂ群遺物実測図（1：3）

ＳＴ－01（第20図、図版12・13）

ＳＩ-02と1.10m、ＳＴ-07と0.50m離れて位置する。主軸方位は、N175°Ｅを示す。

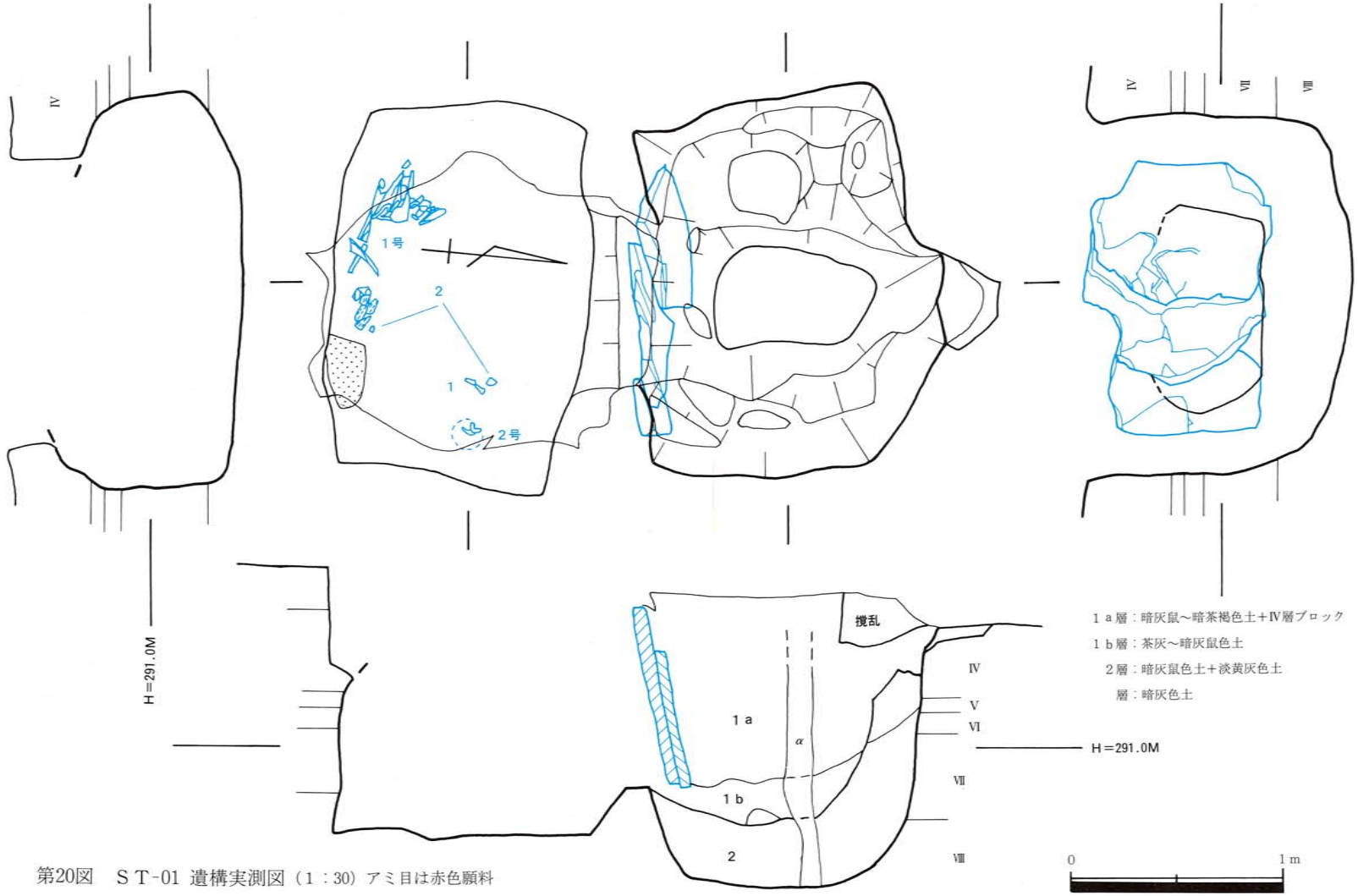
羨道板石閉塞、平入り長方形プランである。

竪坑は長さ1.86m、幅1.30mを測り、北辺が不整形となる。深さは1.39mを測り、底面は浅い凹面形態である。玄室との間には、断面台形の仕切りが削り出されている。上面は長さ0.10～0.20m、幅0.66～0.81mの台形で、竪坑との比高0.47m、玄室との比高0.22mを測る。玄室は長さ1.66～1.82m、幅1.00～1.22mで、長辺が外湾する。高さは0.90m前後と推定される。壁面は直立するが、明瞭な稜線を持たない。

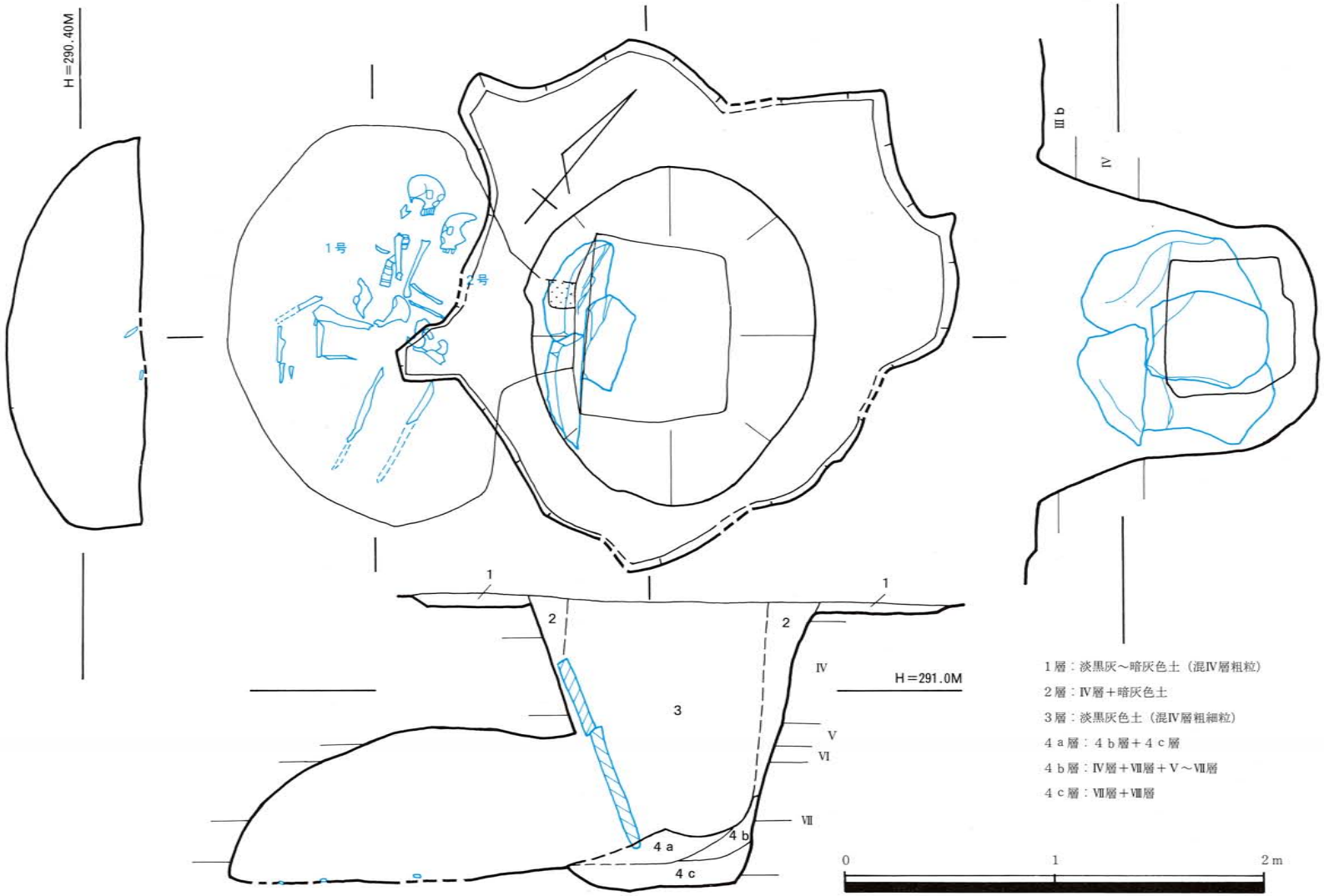
被葬者は２体であるが、遺存状況が悪い。１号人骨の頭部にあたる所には、赤色顔料が認められた。２号人骨は、頭骨の一部のみ遺存していた。

羨道は、長さ0.7～0.8m、幅0.4～0.8m、厚さ0.05m前後の板石３枚で閉塞されている。

竪坑埋土は、Ⅲ～Ⅶ層のブロックからなる１ａ層、Ⅲ・Ⅶ層を主とする１ｂ層、Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ層のブロックを主とする２層に区分できる。α層は軟質で、木痕のようである。



第20図　ＳＴ-01 遺構実測図（1：30）アミ目は赤色顔料



第21図　ＳＴ-02 遺構実測図（1：30）アミ目は赤色顔料

玄室周囲に土層観察用土手を残せたが、盛土は確認できなかった。

閉塞石下底が１ｂ層上面にあること、１層と２層の層界の様子、竪坑北辺部の突出状況、さらには人骨２体の遺存状況の差を総合すると、当墳墓の追葬行為を想定できる。

出土遺物（第24図－１・２、図版40）

１号人骨の北に鉄鏃の頸部(1)が、２号人骨の西に**1**の鏃身部と**2**が検出された。１の鏃身部は、床面下に突き刺さっていた。当墳墓は玄室の天井が陥没したため、遺物は原位置を保っていない（多少の移動）と考えられる。

２点とも圭頭広根斧箭式で、１は小型のタイプである。**1**は現存長49㎜、鏃身長13㎜、最大幅23㎜を測り、樹皮が一部に遺存している。**2**は現存長85㎜、鏃身長12㎜、最大幅34㎜を測り、樹皮巻き矢柄が遺存している。

ＳＴ-02（第21図、図版13・14）

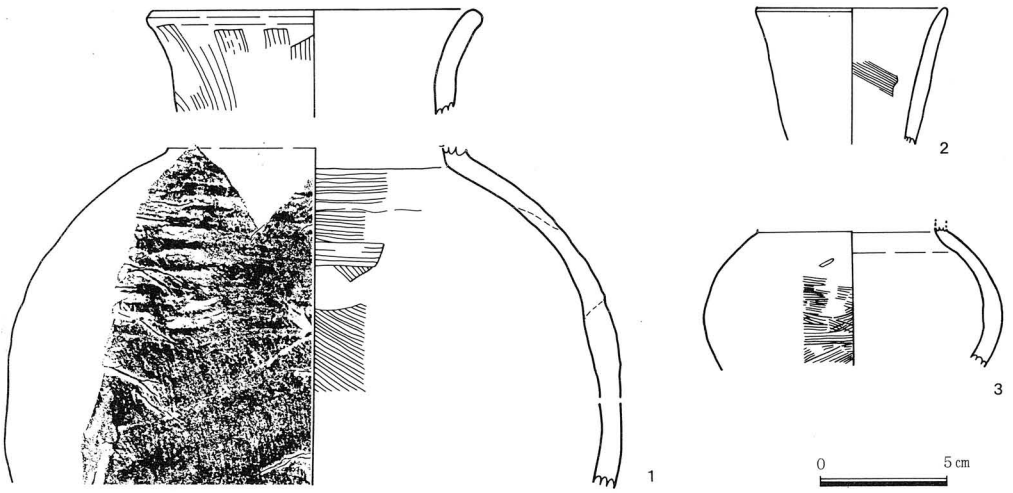
主軸方位は、N130°Wを示す。羨道板石閉塞、平入り楕円形プランを呈する。

竪坑上面は長さ1.60m、幅1.38mの楕円形を呈し、さらに外周には、直径2.50m前後、深さ0.02～0.13mの不整形な掘り込みが認められた。これは、閉塞後、竪坑を埋め戻す際に偶然削られたものと思われる。深さは1.36mを測り、底面は長さ0.72～0.86m、幅0.62～0.69mの長方形を呈する。羨道は長さ0.36m、幅0.39～0.67m、高さ0.66～0.69m、竪坑底部との比高0.10mを測り、玄室へ向かって緩やかに傾斜する。玄室は長さ1.88m、幅1.31mを測り、奥壁と側壁の区分がない。高さは0.72mを測り、アーチ形を呈する。壁面は、左側のみ直立する。

被葬者は女性２体で、１号人骨は屈膝葬である。

羨道は長さ0.55～0.85m、幅0.32～0.52m、厚さ0.06m内外の板石４枚で閉塞される。

竪坑埋土は、大きく３層（第２層、３層、４ａ～ｂ層）に分けられ、第３層の切り込み状態および閉塞石下底のレベルから追葬行為が確認できる。



第22図　ＳＴ-02 竪坑埋土出土遺物実測図（１：３）

出土遺物（第22図、図版38）

副葬品はないものの、竪坑埋土から土師器片が出土した。

1は、口径12.6cmを測る長胴型の壷である。口縁部は直線的に曲がり、端部は丸みをもっている。口縁部内面はナデ、口縁部・胴部外面はハケ、胴部外面はタタキのあとハケ調整が施される。**2**と**3**は、長頸壷である。**2**は口径7.6cmで、口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ハケ調整である。**3**は胴部最大径18.8cmで、外面ハケ、内面ナデ調整を施す。

ＳＴ-03（第23図、図版14）

羨道閉塞の墳墓群とは距離を置いて位置する。遺構検出時には、すでに玄室の天井が崩落し黒灰色土が埋積していた。

主軸方位は、磁北を示す。竪坑上部閉塞、平入り長方形プランである。竪坑の１段目は、長さ1.10m内外、幅0.94～1.22m、深さ0.18～0.22mを測る。２段目は長さ0.62m、幅0.52m、深さ0.96m、遺構面からの深さは1.14mを測る。底面は、袋状に広がる。羨道は長さ0.30～0.46m、幅0.42～0.66m、高さ0.75mを測る。玄室は長軸と斜交し、長さ1.46～1.57m、幅1.20mを測る。高さは1.10m前後と思われる。壁面は直立する。側壁は不整形で、片袖に近い。

竪坑上部は、長さ0.66～0.90m、幅0.10～0.48m、厚さ0.05m内外の板石４枚で閉塞される。

出土遺物（第24図－３～５、第51図－43、図版40・42）

玄室の北東端に、右側壁とほぼ並行して鉄鏃３本と短剣１振が副葬されていた。**3**は、全長91mm、鏃身長15mm、最大幅24mmを測る三角形式である。**4**は、全長132mm、鏃身長19mm、最大幅35mmを測る圭頭広根斧箭式である。**5**は、現存長116mm、鏃身長24mm、最大幅38mmを測る圭頭広根斧箭式である。いづれも樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。**43**は現存長195mm、鏃身長167mm、身幅38mmを測る。身部には木製鞘の一部が、柄には鹿角が遺存している。

ＳＴ-04（第25図、図版15）

ＳＴ-02と1.60ｍ、ＳＴ-05と0.55ｍ離れて位置する。主軸方位は、N127°Wを示す。

羨道板石閉塞、平入り楕円形プランである。竪坑は、長さ1.35m、幅1.19m、深さ1.40mを測る。底面は長さ0.85m、幅0.50～0.62mの隅丸長方形を呈する。羨道は長さ0.14m、幅0.51m、高さ0.52m、竪坑底面との比高0.22mを測る。玄室は、長さ1.70m、幅1.13m、高さ0.66mのアーチ型を呈する。床面には、0.04mの貼床が施される。

被葬者は女性１体で、頭部と足先にシラス塊が置かれている。

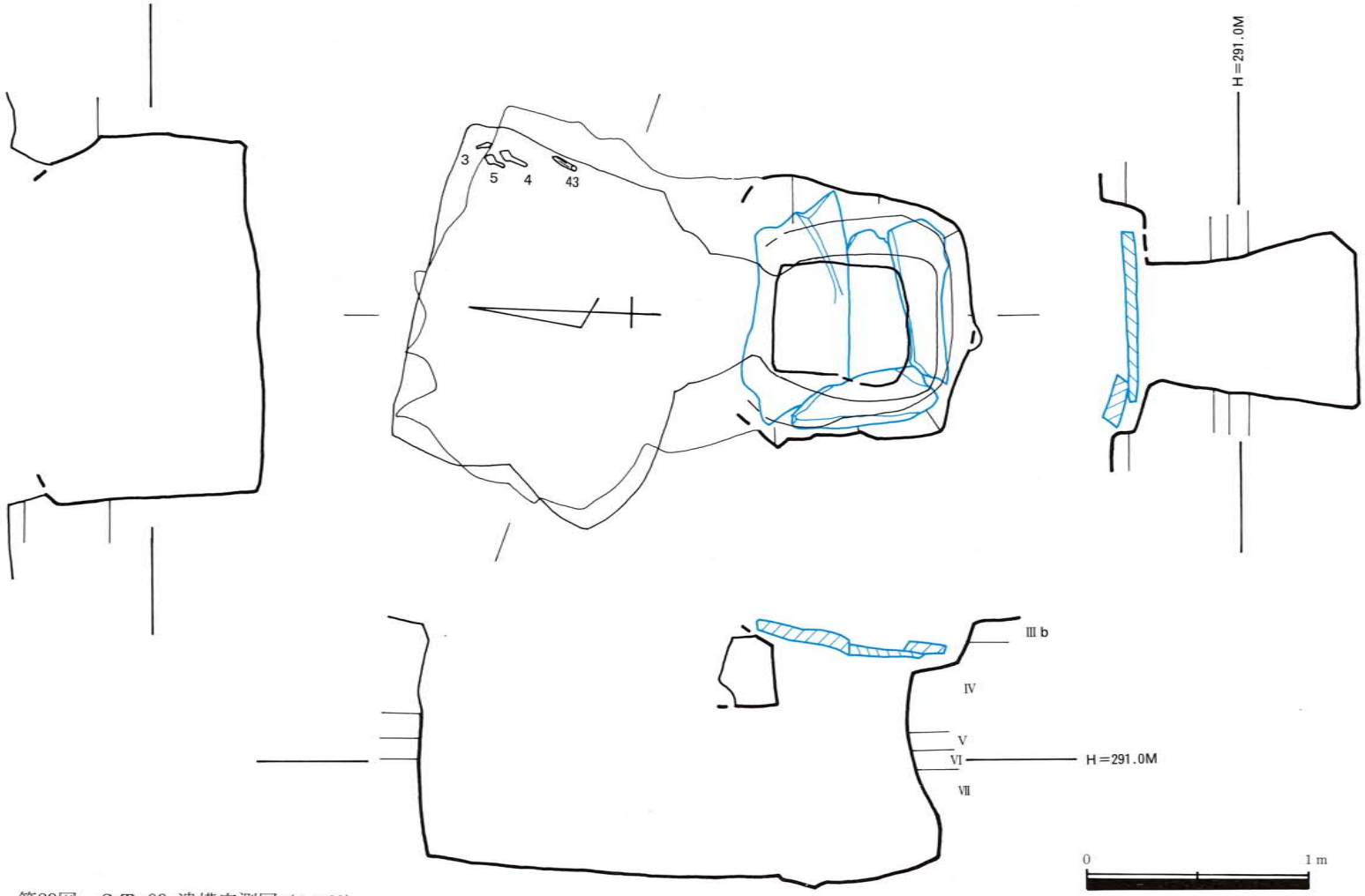
羨道は、長さ0.40～0.80m、幅0.10～0.44m、厚さ0.05m内外の板石５枚で閉塞される。

出土遺物は無い。

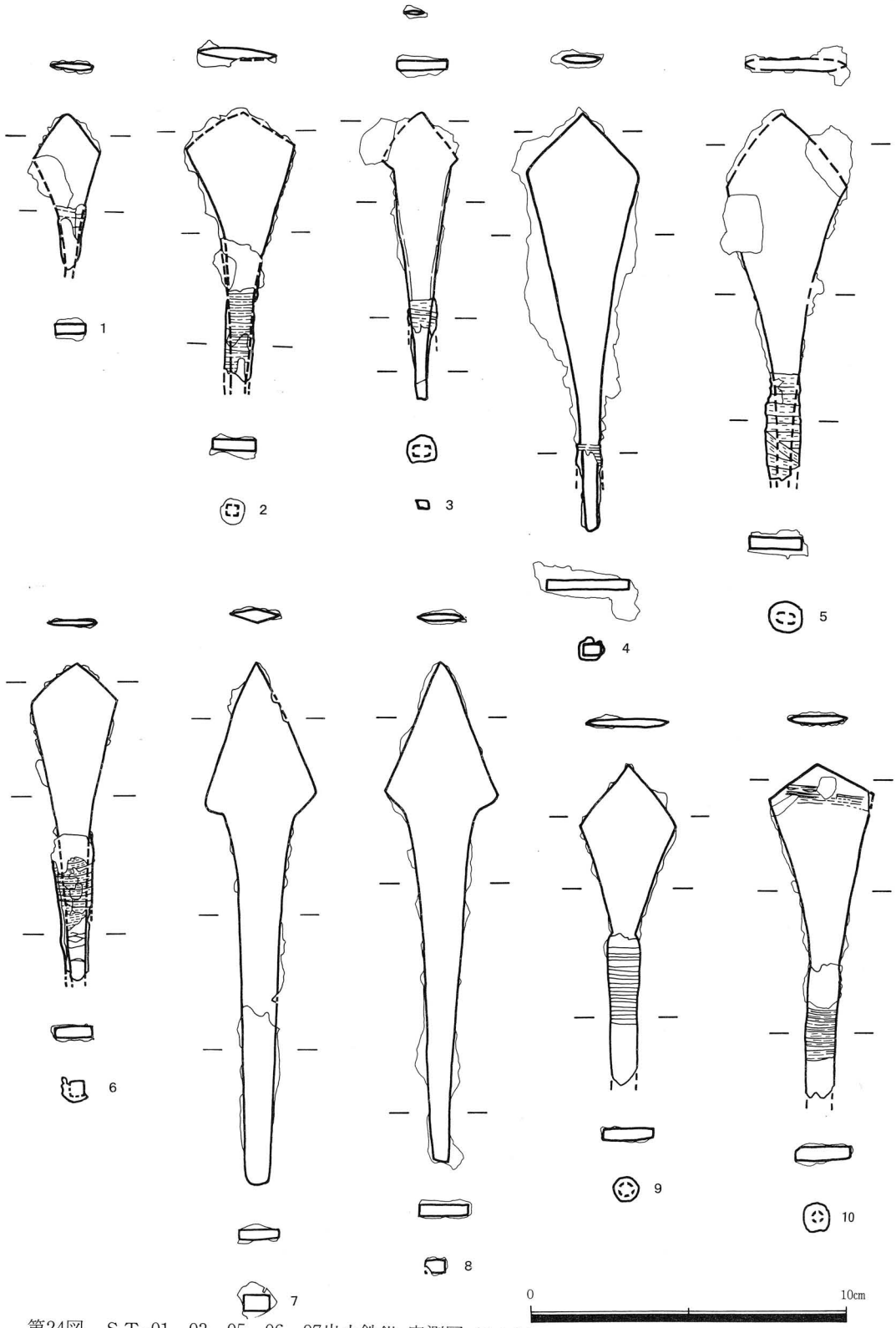
ＳＴ-05（第26図、図版16）

主軸方位は、N98°Wを示す。羨道板石閉塞、平入り楕円形プランを呈する。

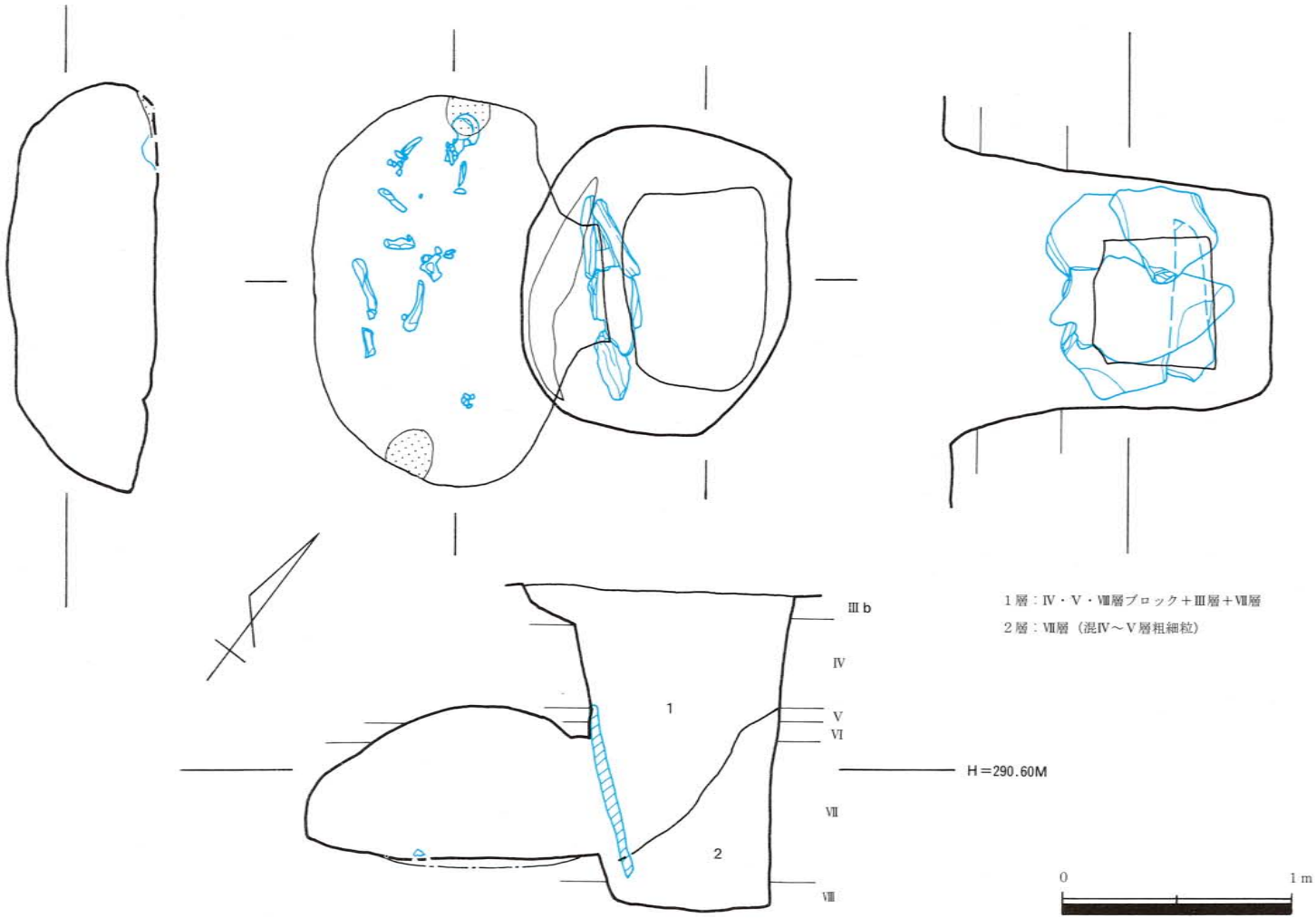
竪坑は長さ1.15m、幅0.97m、深さ1.07mを測る。底面は、長さ0.94m、幅0.66mの隅丸長方形を呈する。羨道は、長さ0.11～0.17m、幅0.42m、高さ0.50m、竪坑底面との比高0.04m



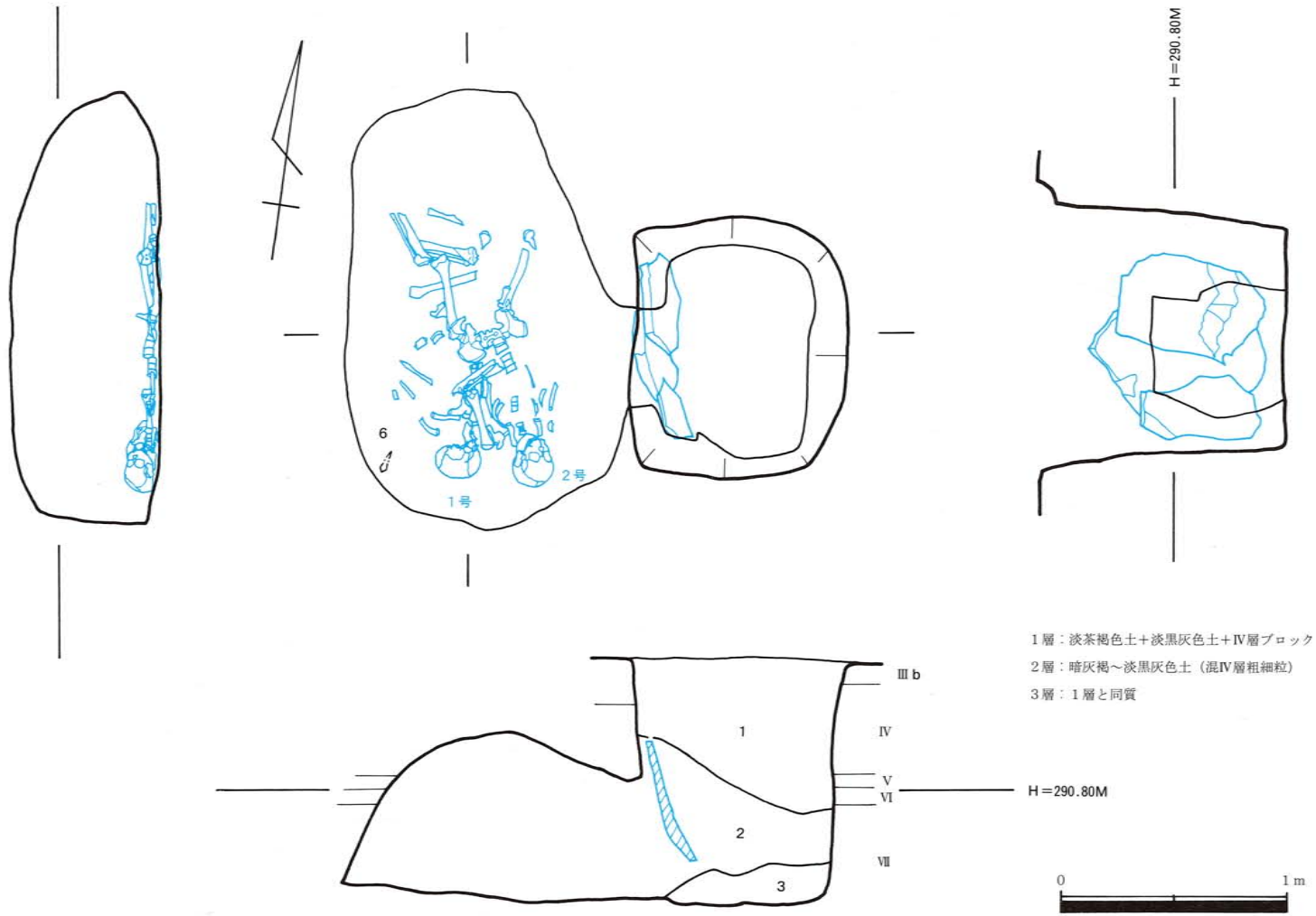
第23図　ＳＴ-03 遺構実測図（1：30）



第24図　ＳＴ-01、03、05、06、07出土鉄鏃 実測図（1：2）



第25図　ＳＴ-04 遺構実測図（1：30）アミ目はシラス塊）



第26図　ＳＴ-05 遺構実測図（1：30）

を測る。玄室は、不整形で北側に張り出し、長さ1.92m、幅0.74～1.24m、高さ0.73mを測りアーチ型を呈する。

被葬者は男性２体で、遺存状態も良い。

羨道は、長さ0.53～0.77m、幅0.15～0.50m、厚さ0.04m内外の板石３枚で閉塞される。

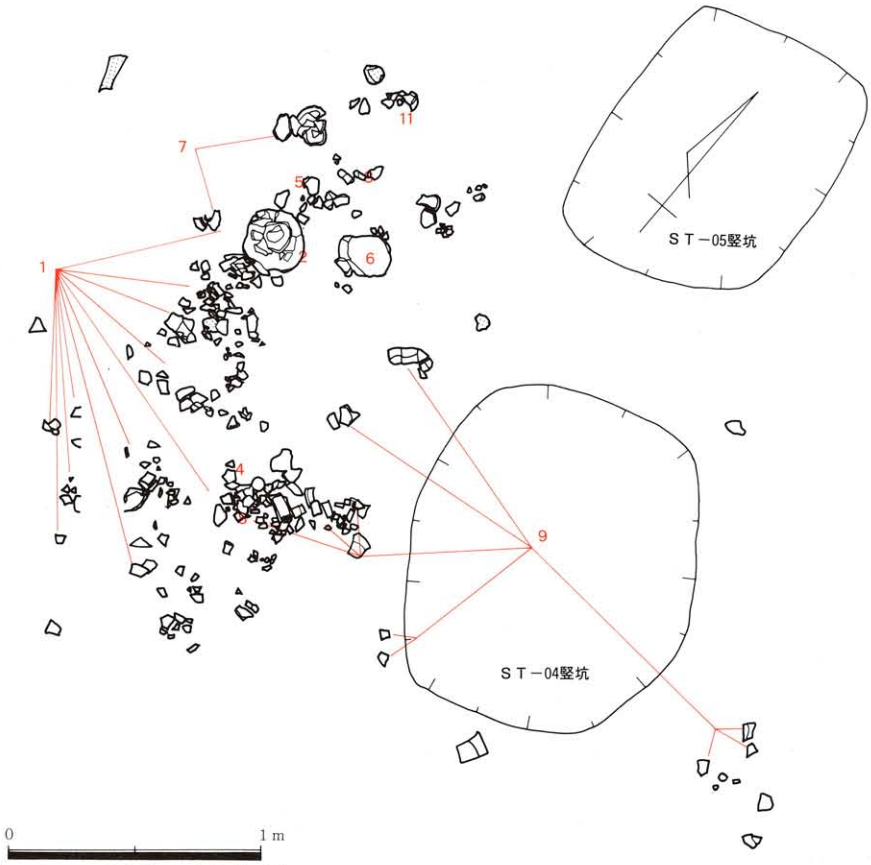
出土遺物（第24図－６、図版40）

１号人骨の頭部に並行して、鉄鏃を１本副葬している。現存長101㎜、鏃身長12㎜、最大幅27㎜を測る。圭頭広根斧箭式で、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。

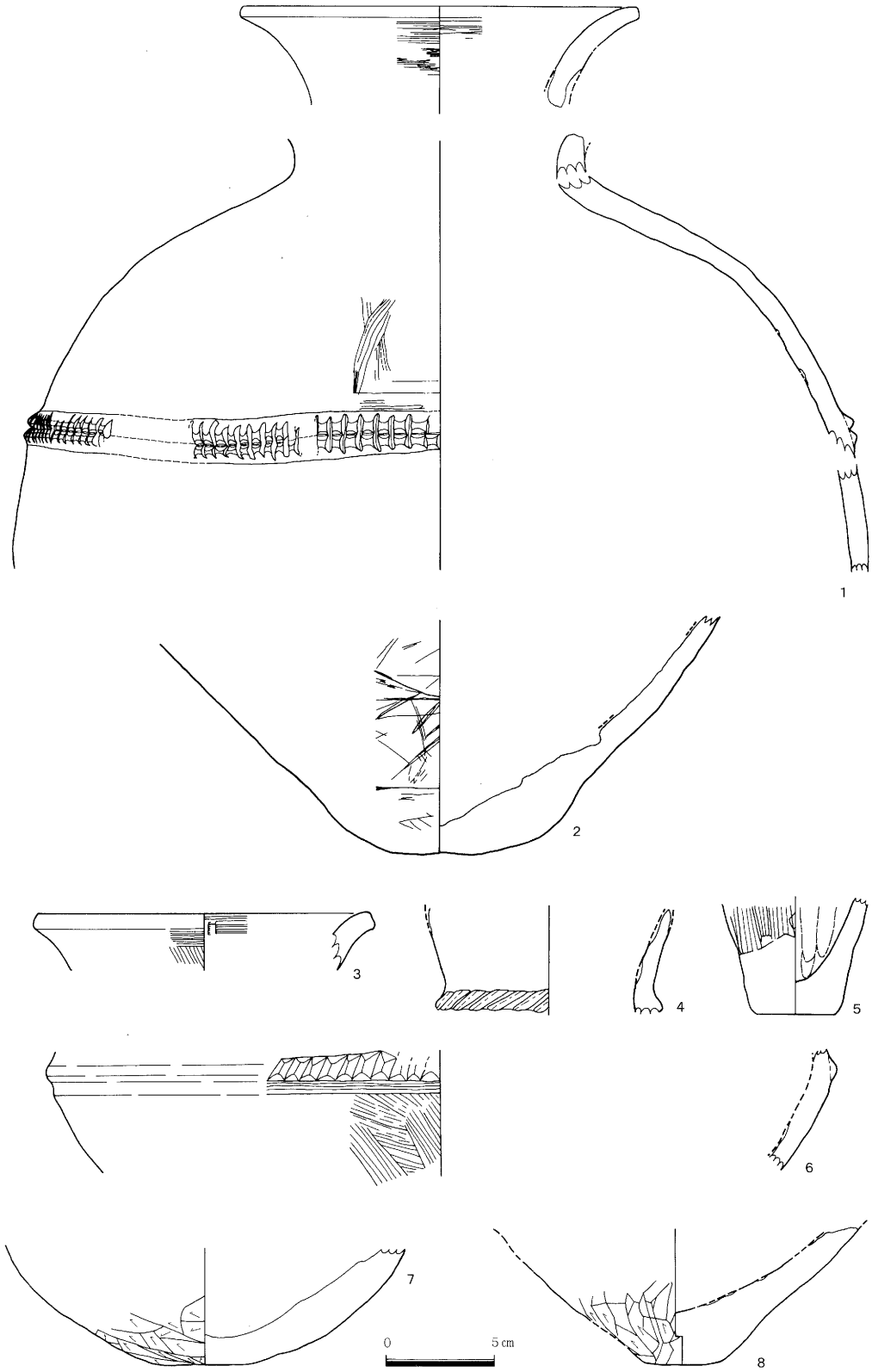
Ｃ群遺物（第27～29図、第３表、図版36・37）

ＳＴ-04と05の玄室上面にあたる区域において、土師器が纏まって出土した。壷４、甕１、脚台付鉢１、坩２、手捏ね土器１で構成される。**１**と**10**は、広範囲に散在していた。

１の胴部に貼り付けてある突帯は、凹部に沈線を施した後に、刻み目を入れている。**６**の壷は、蒲鉾形に面取りされた突帯を有し、その直下は箆状工具で調整される。**10**の脚台部には、小孔が４個穿たれている。



第27図　Ｃ群遺物出土状態実測図（１：30）



第28図　C群遺物実測図(その１)（1：3）

ＳＴ－06（第30図、図版17）

ＳＴ-05と1.3ｍ離れて位置する。主軸方位はＮ58°Ｗを示す。

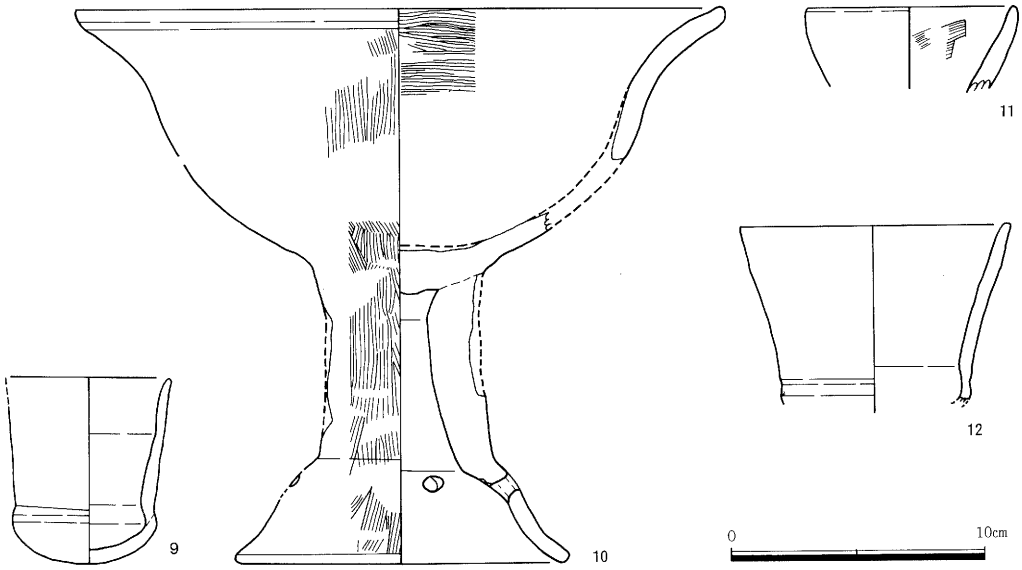
羨道板石閉塞、平入り長方形プランである。竪坑は隅丸長方形で、長さ1.52m、幅1.18m、深さ1.12mを測る。底面は不整形である。羨道は長さ0.20～0.27m、幅0.41～0.60m、高さ0.50m、竪坑底面との比高0.14mを測る。玄室は、長さ1.64～1.82m、幅1.12～1.24m、高さ0.79mを測る。天井部は寄棟造りで、棟木が削り出されている。

被葬者は男性１体で、良好に遺存している。

羨道は、長さ0.40～0.50m、幅0.30m内外、厚さ0.04m内外の板石５枚で閉塞される。

出土遺物（第24図－７、８、第51図－41、図版40・42）

玄室東隅から鋒を中央に向けた直刀１振と、並行する鉄鏃２本が副葬されていた。**41**は、鋒



第29図　Ｃ群遺物実測図(2)（１：３）

No.	図版	器形	法量（mm）				文様および調整		胎土			焼成	色調	
			口径	底径	器高	最大径	外面	内面	砂粒・量	しそ輝石	赤褐色粒		外面	内面
1	37-1,3	壷	183			395	ヨコナデ、ナデ	ハケ、胴部は不明	1ミリ位・多			良好	淡茶褐	暗黄褐
2	37-6	壷					ハケ、ナデ	不明	1～3ミリ・多	多		良	淡橙褐～淡茶褐	淡橙褐
3	37-2	壷	156				ハケ	ハケ	1～4ミリ・少	微		良	淡茶褐	淡茶褐
4	36-8	壷					ナデ	ナデ	1～2ミリ・多			良	黄褐	黄褐
5	37-5	甕		36			ハケ、ナデ	ナデ	1ミリ位・多		1～3ミリ・少	良	淡灰～淡桃灰	灰～暗灰
6	37-4	壷				364	ハケ	不明	1ミリ位・多			良	黄灰	黄褐
7	37-7	壷		45			タタキ→ハケ	不明	1～3ミリ・多	多		良	淡茶褐	淡黄褐
8	37-8	壷		32			ヘラケズリ	不明	1～2ミリ・多		1～3ミリ・多	良	淡茶褐	淡黄褐
9	37-11	坩	65		74	57	ナデ	ナデ	精良	微	1～2ミリ・少	良	淡茶褐	淡茶褐
10	37-9	脚付鉢	255	126	220		ハケ	ハケ、脚はナデ	1～2ミリ・少	多		良	淡橙褐	淡橙褐
11	36-9	手捏ね	79				ナデ	ハケ、ナデ	精良		1～2ミリ・少	良好	淡茶褐～淡茶灰	淡茶褐
12	37-10	坩	106				ナデ	ナデ	1ミリ位・少		1～2ミリ・少	良好	淡黄灰	淡黄灰

第３表　Ｃ群遺物観察表

が床面から0.04m、把部が0.10m浮き、把頭と右側壁が接していた。現存長680㎜、刀身長536㎜、最大幅33㎜、最大厚９㎜を測る。部分的に木製鞘の一部、関から把にかけて鹿角、さらに把には木質と糸巻きの一部が遺存している。

鉄鏃２本は同形式であり、矢柄の痕跡は無い。**7**は全長165㎜、鏃身長43㎜、最大幅35㎜、**8**は、それぞれ157、41、36㎜を測る。

ＳＴ-07（第31図、図版18）

ＳＴ-01と0.50m離れて位置する。主軸方位は、N126°Wである。

羨道板石閉塞、平入り略長方形プランである。竪坑は長方形で、長さ1.41m、幅1.12m、深さ1.57mである。底面は不整形で、羨道部側のほうが深掘されている。羨道は長さ0.35～0.41m、幅0.39～0.57m、高さ0.84m、竪坑底面との比高0.16mを測る。玄室は、長さ1.97m、幅1.12～1.24m、高さ0.84mを測る。左袖から側壁にかけてのみ、直線的に掘削されている。壁面には、刀幅80㎜内外の工具痕が明瞭に残っている。天井は平垣で、羨道との境が無い。

被葬者は１体で、頭骨の一部のみ遺存している。

羨道は、長さ0.25～0.74m、幅0.12～0.50m、厚さ0.06m内外の板石７枚で閉塞される。

出土遺物（第24図－９・10、図版40）

玄室の奥壁寄りに、鉄鏃２本が重なって副葬されていた。２本とも圭頭広根式で、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。**9**は現存長101㎜、鏃身長20㎜、最大幅30㎜を測る。**10**はそれぞれ106、11、32㎜を測る。

ＳＴ-08（第32図、図版19）

ＳＴ-09と0.80m離れて位置し、竪坑の北辺上部に後世の溝による削平を受ける。主軸方位はN81°Wで、羨道閉塞、平入り楕円形プランである。

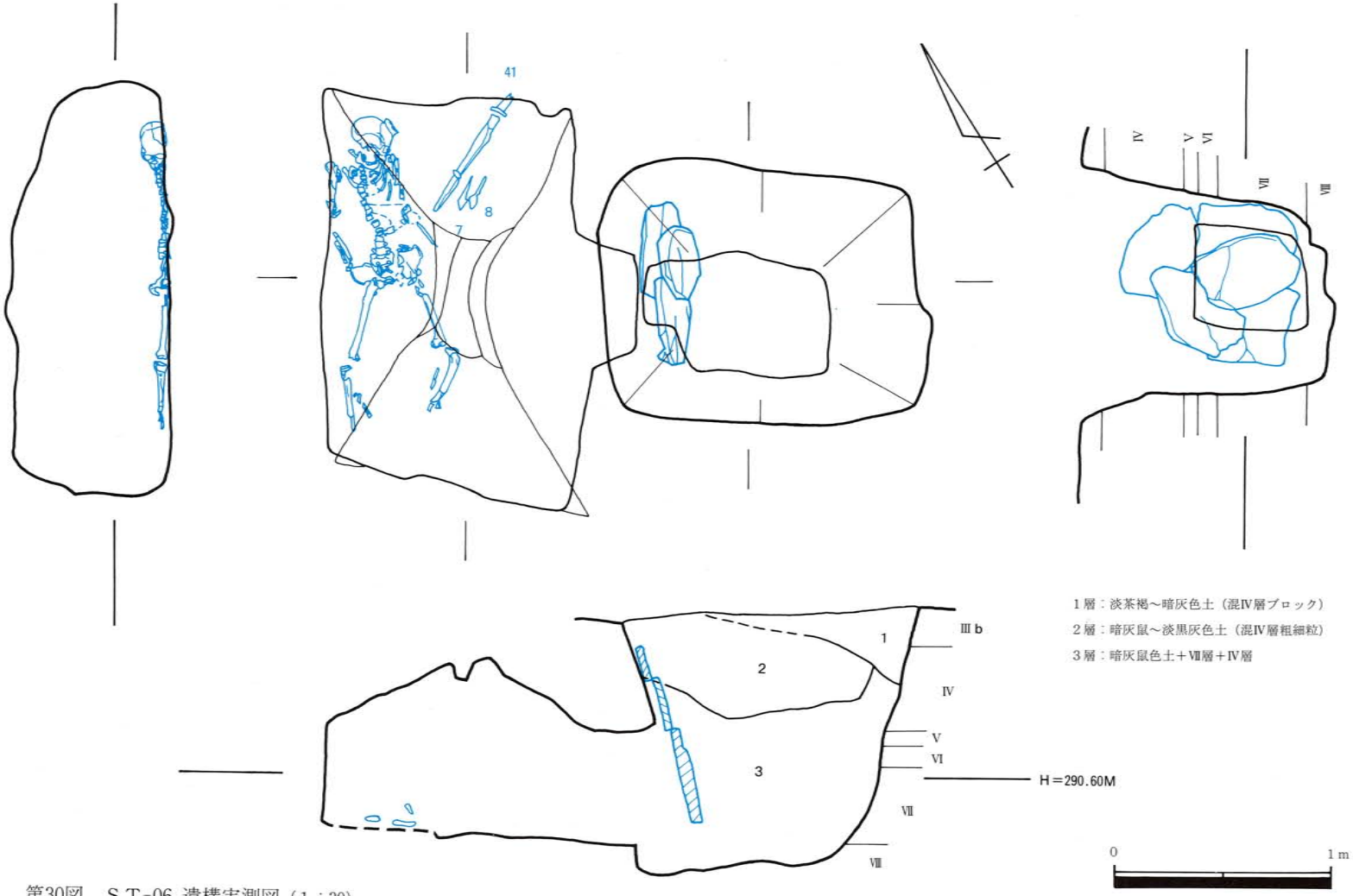
竪坑は、長さ1.12m、幅1.04m、深さ0.96m、底面は長さ0.74m、幅0.70mを測る。羨道は長さ0.22～0.28m、幅0.50～0.58m、高さ0.41m、竪坑底面との比高0.08mを測る。玄室は、長さ1.89m、幅1.21m、高さ0.61mを測り、プラン・天井ともに不整形である。

被葬者は２体で、１号人骨は流入土により押し寄せられ、持ち上げられている。２号人骨は、頭骨の一部のみ遺存する。

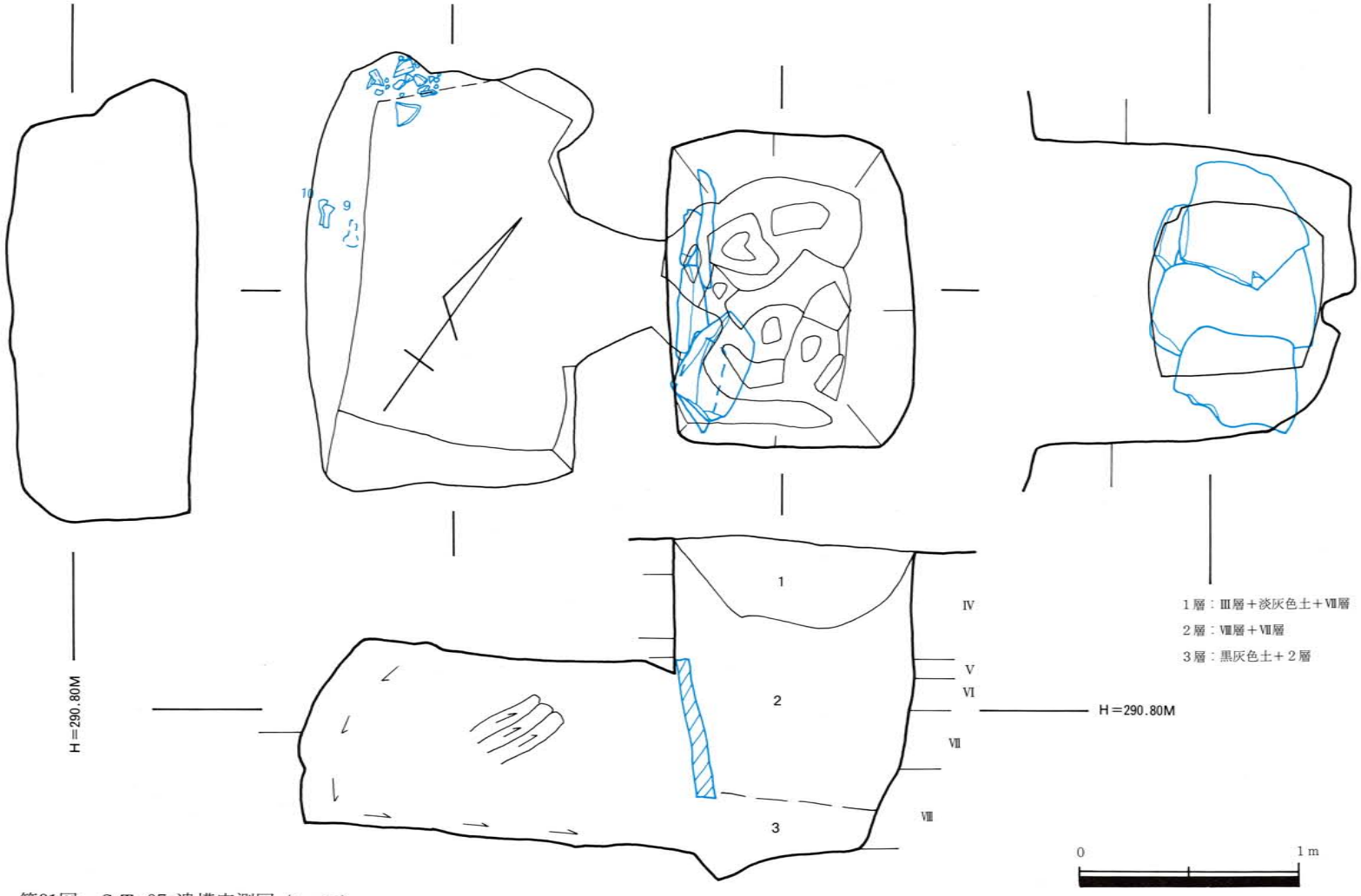
羨道には閉塞の痕跡が無かったが、竪坑埋土の第１層がレンズ状を呈すること、軟らかい黒土が玄室に流入して羨道が完全に塞がれていることから、有機質（木板）で閉塞されていたものと思われる。

出土遺物（第33図－11～13、図版40）

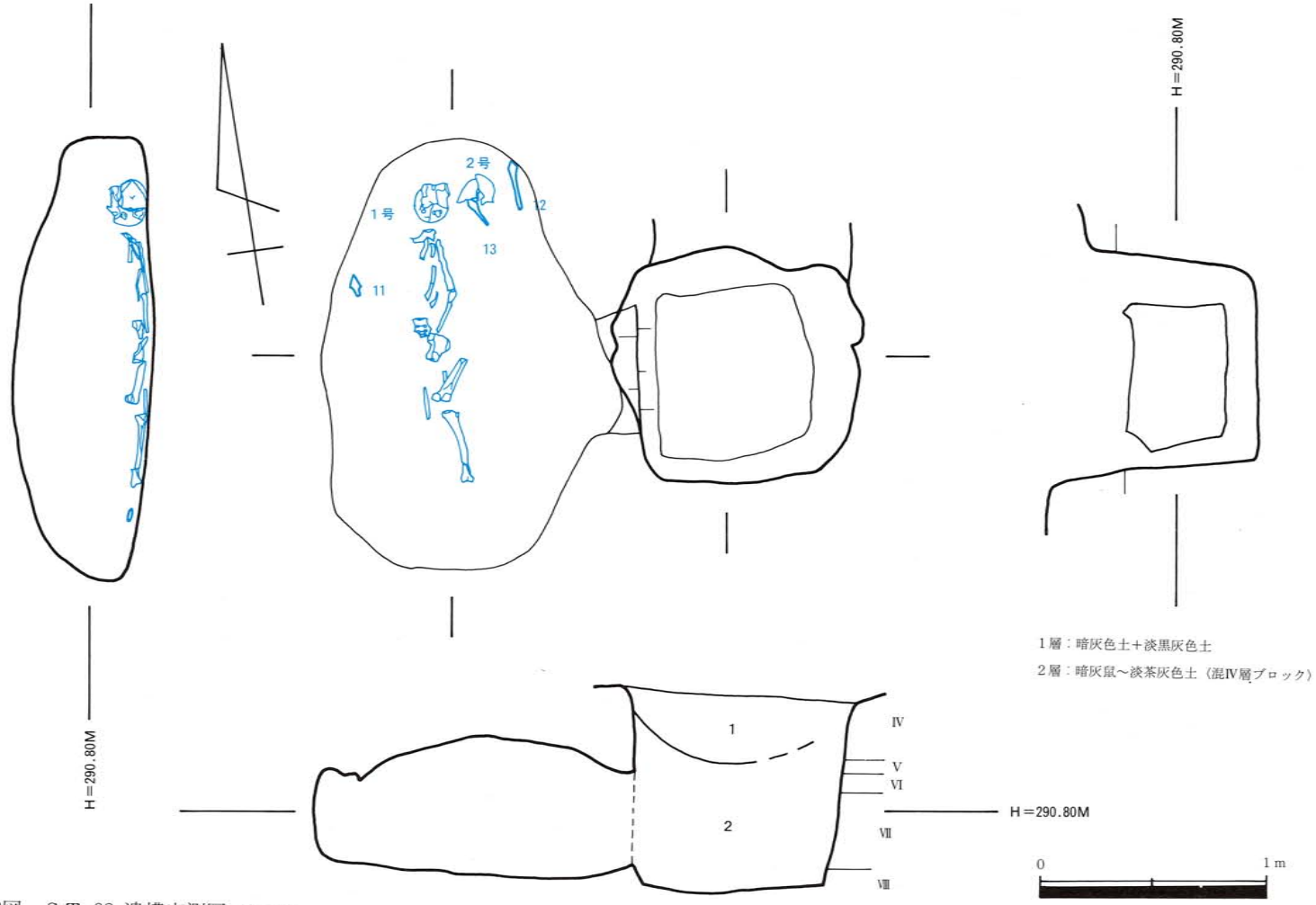
玄室の奥壁寄りに鉄鏃１本、２号人骨付近に鉄鏃２本が副葬されていた。**11**は、現存長99㎜鏃身長15㎜、最大幅30㎜を測る。**12**は、現存長198㎜、鏃身長29㎜、最大幅34㎜を測り、矢柄の表面には、蝿の蛹の抜け殻が密集、錆化している。**13**は、現存長137㎜、鏃身長59㎜、最大幅23㎜を測る二段逆刺式である。３点とも樹皮巻き矢柄が遺存する。



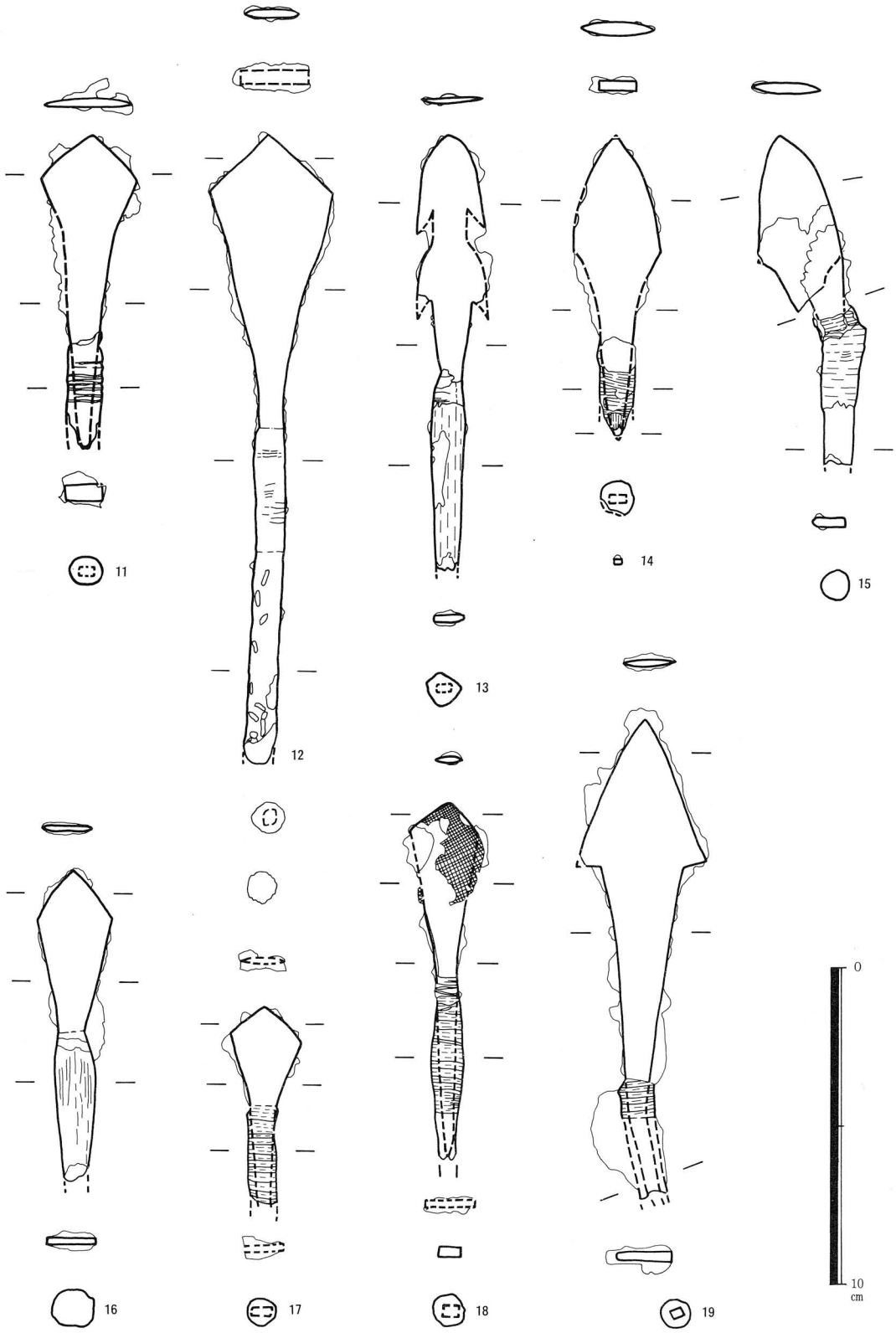
第30図　ＳＴ-06 遺構実測図（1：30）



第31図　ＳＴ-07 遺構実測図（1：30）



第32図　ＳＴ-08 遺構実測図（1：30）



第33図　ＳＴ-08、10、11、14出土鉄鏃 実測図（1：2）

ＳＴ－09（第34図、図版20）

主軸方位はＮ87°Ｗで、羨道閉塞、平入り楕円形プランである。

竪坑は、長さ1.35m、幅1.16m、深さ0.90mで、底面は長さ0.90～1.0m、幅0.64～0.80mを測る。羨道は長さ0.30m、幅0.43～0.48m、高さ0.55～0.69mを測る。玄室は、長さ1.71m、幅1.05m、高さ0.69mを測り、左側辺と奥壁は直線的である。全体的に不整形で、荒削りな構築である。

被葬者は１体で、遺存状態も悪い。人骨は流入土（第１層と同質）によって、0.10m前後持ち上げられている。

羨道はＳＴ-08と同様、木板で閉塞されていたものと思われる。

出土遺物は無い。

ＳＴ－10（第35図、図版21）

ＳＩ-02と1.4m、ＳＩ-05と1.6m離れて位置する。主軸方位はＮ179°Ｅを示す。羨道閉塞平入り長方形プランである。

竪坑は、長さ1.20～1.61m、幅1.21m、深さ1.05mを測り、底面中央部が若干凹む。底面のレベルは羨道に向かって下降する。羨道は、長さ0.21～0.30m、幅0.65～0.70m、高さ0.52mを測る。玄室は１段（0.14m）低くなり、長さ1.55m、幅0.80～0.91m、高さ0.72mを測る。壁面と床面は丁寧に整形され、両側壁は直立する。

被葬者は男性１体で、頭骨等一部が遺存している。

羨道は、長さ0.26～0.46m、幅0.12～0.32m、厚さ0.06m内外の板石６枚で閉塞される。

出土遺物（第33図－14～16、図版41）

人骨に接して、鉄鏃３本が副葬されていた。**14**は現存長96㎜、鏃身長37㎜、最大幅27㎜を測る。**15**はそれぞれ107、39、27㎜、**16**はそれぞれ99、15、23㎜を測る。３本とも、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。

ＳＴ－11（第36図、図版22）

ＳＺ-01の北西に位置する。主軸方位はＮ73°Ｅである。羨道板石閉塞、平入り楕円形プランを呈し、羨道閉塞地下式横穴墓中、最大規模のものである。

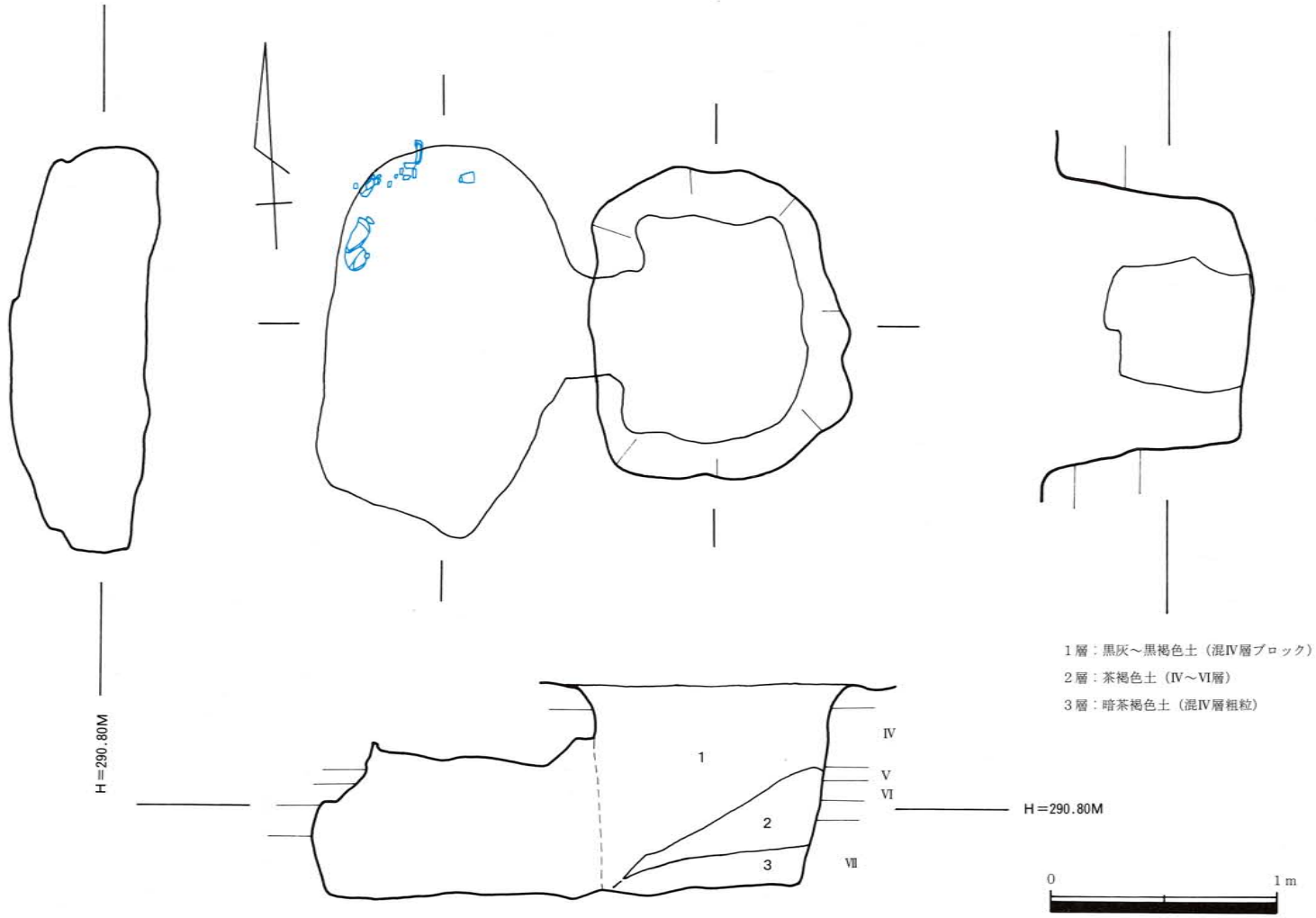
竪坑は、長さ1.63m、幅1.56m、深さ1.52mを測る。底面は長さ0.64～0.98m、幅0.81mの台形を呈する。羨道は、長さ0.20m、幅0.65～0.76m、高さ0.60mを測る。玄室は、長さ1.97m、幅1.40m、高さ0.88mを測り、アーチ型の天井を有する。

被葬者は３体で、頭骨および下肢骨の遺存状態が良く、１号人骨の頭骨には赤色顔料が塗布されている。右側壁の中央部には、シラスの土塊が置かれている。

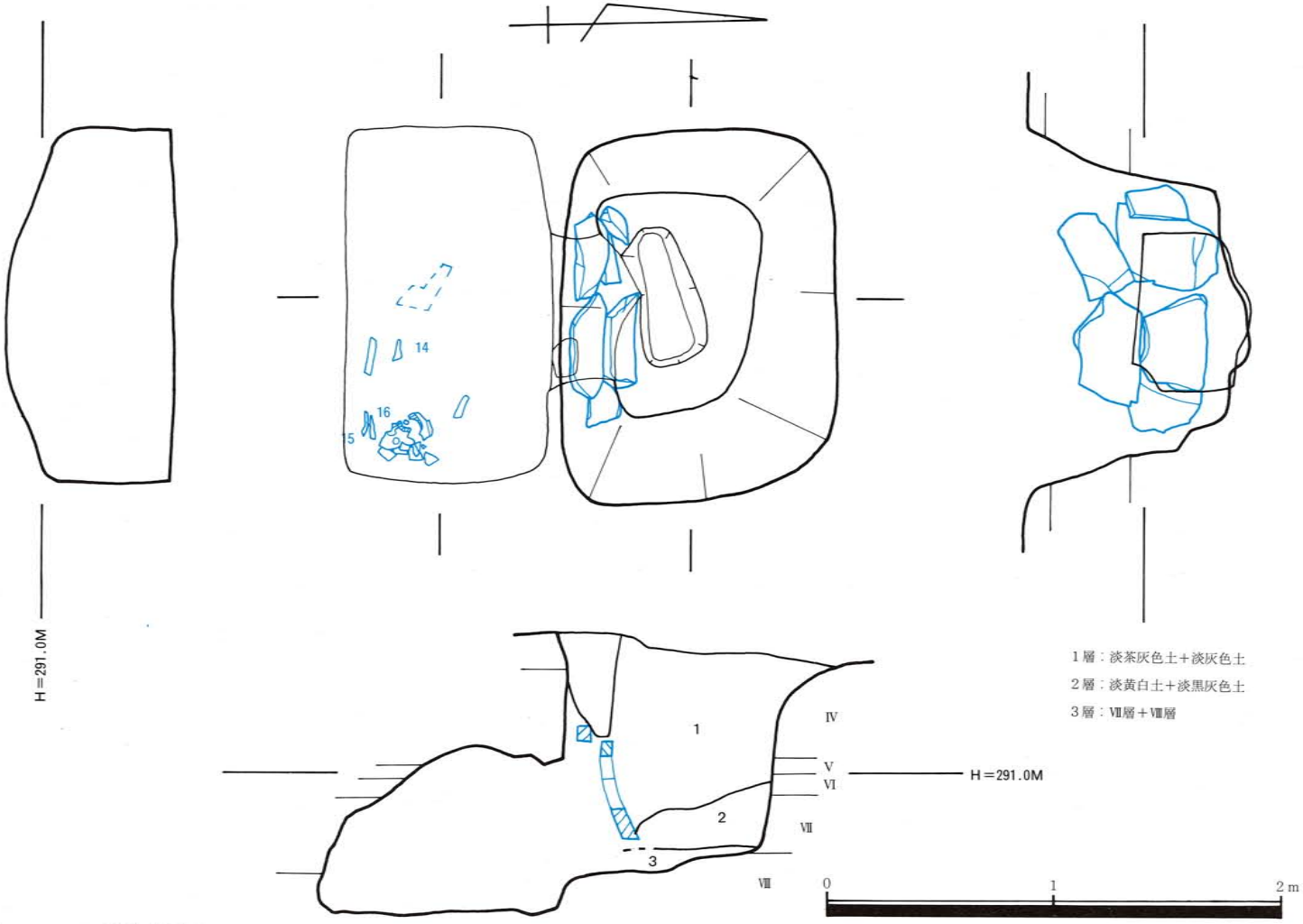
羨道は、長さ0.34～0.52m、幅0.18～0.38m、厚さ0.05m内外の板石11枚で閉塞される。

出土遺物（第33図－17・18、第52図－44、図版41・42）

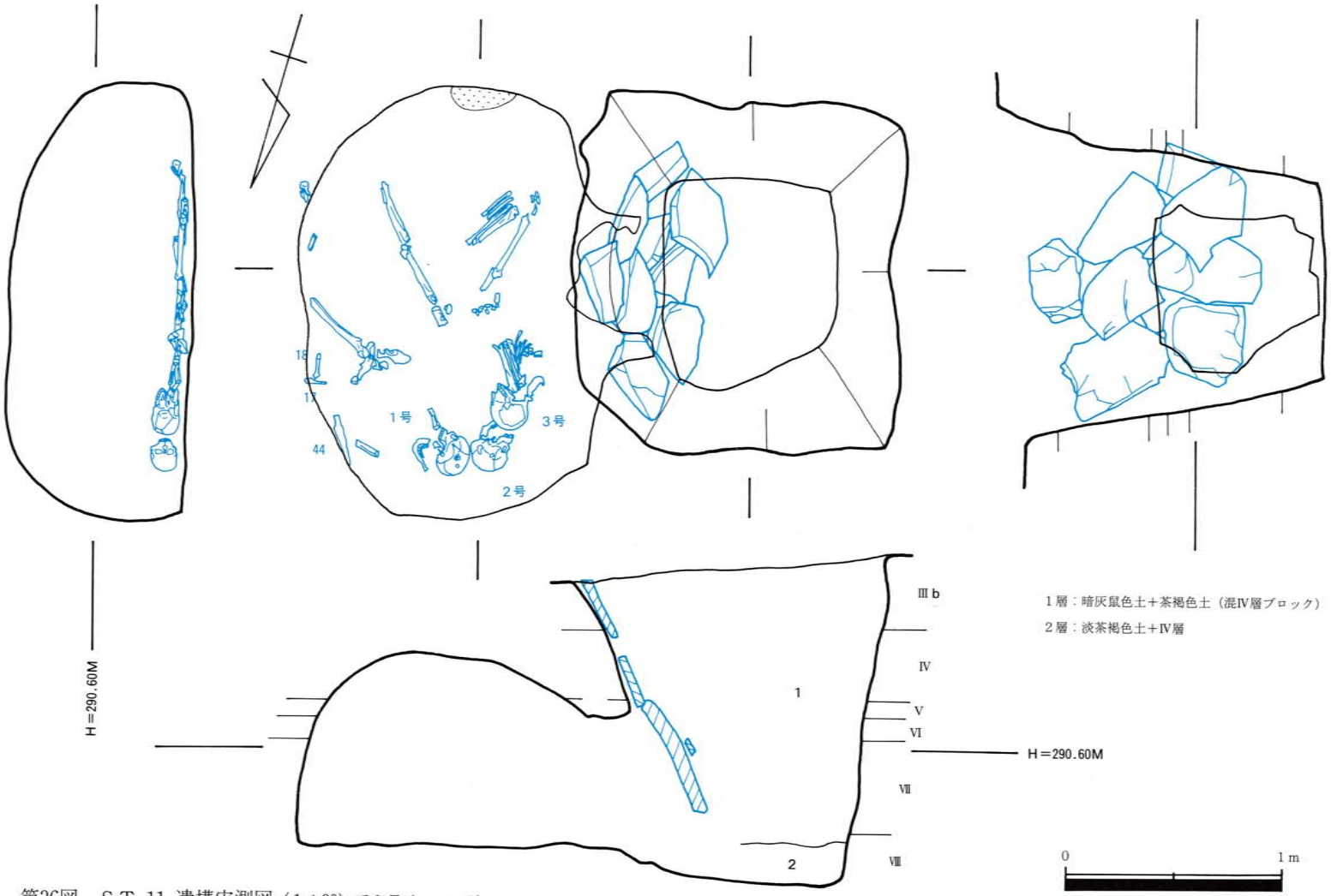
１号人骨の横に、短剣１振と鉄鏃２本が副葬されている。**44**は現存長262㎜、剣身長180㎜、



第34図　ＳＴ-09 遺構実測図（1：30）



第35図　ＳＴ-10 遺構実測図（1：30）



第36図　ＳＴ-11 遺構実測図（1：30）アミ目はシラス塊

幅26㎜を測る。把部には、把木が遺存している。鉄鏃は圭頭式で、樹皮巻き矢柄の一部が遺存する。**17**は現存長62㎜、鏃身長10㎜、最大幅22㎜を測る。**18**は、それぞれ113、10、22㎜を測り、鏃身から頸部にかけて布が付着している。

ＳＴ−12（第37図、図版23）

ＳＩ-05と1.1m、ＳＴ-02と2.1m離れて位置する。主軸方位は、N142°Wを示す。

羨道板石閉塞、平入り楕円形プランである。竪坑は、長さ1.12m、幅1.00mの楕円形を呈し深さ1.18mを測る。玄室との間には、上面の長さ0.10〜0.14m、幅0.68〜0.78mの断面台形の仕切りが設けられており、竪坑底面との比高0.17m、玄室床面との比高0.13mを測る。玄室は、長さ1.58m、幅1.00m、高さ0.60mを測る。

被葬者は男性１体で、頭骨、寛骨および下肢骨が遺存する。

羨道は、長さ0.18〜0.58m、幅0.14〜0.33m、厚さ0.03m内外の板石６枚で閉塞される。

出土遺物はない。

ＳＴ−13（第38・39図、写真１、図版24・25）

ＳＺ-01の南東部に位置し、遺構検出時においては竪坑の北半部が調査区にかかった。このため、当墳墓を構築する際の排土処理の様子を伺うことができる。竪坑掘削の初期の排土であるⅢ・Ⅳ層は、玄室奥壁を想定してその外側に置かれる（Ｃ層に相当)。Ⅴ層以下底面までと羨道および玄室の掘削土は、竪坑の周囲に置かれる。被葬者を埋葬し、羨道を閉塞した後に玄室上位の排土を主として埋め戻す。この際、下部のⅢｂ層も0.10m内外の削平を受けている。最後に、地表に残った排土（A_1、$A_2\alpha$〜γ、Ｂ層）を押し広げて整地していることが伺われる。平面的には、長さ9.16m、幅1.5〜2.5m（推定）の長方形〜長楕円形を呈し、厚さ0.15〜0.26mを測る。なお、Ｂ・Ｃ層には、ＳＺ-01の構築材と思われる板石や土器片を含んでいる。

当墳墓の主軸方位は、N67°Ｅを示す。羨道板石閉塞、平入り楕円形プランである。竪坑は長さ1.20m、幅1.14m、深さ1.24mを測る。底面は長さ0.68〜0.87m、幅0.74mの台形を呈し中央部と西隅に、径と深さが0.10m内外の小柱穴を有する。羨道には仕切りが設けられ、上面の長さ0.22m、幅0.59m、竪坑底面との比高0.20m、玄室との比高0.10mを測る。玄室は、長さ1.86m、幅1.16m、高さ0.73mを測る。羨道部には、シラスの土塊が置かれていた。

被葬者は男女各１体で、１号人骨のほうが遺存状態が悪い。

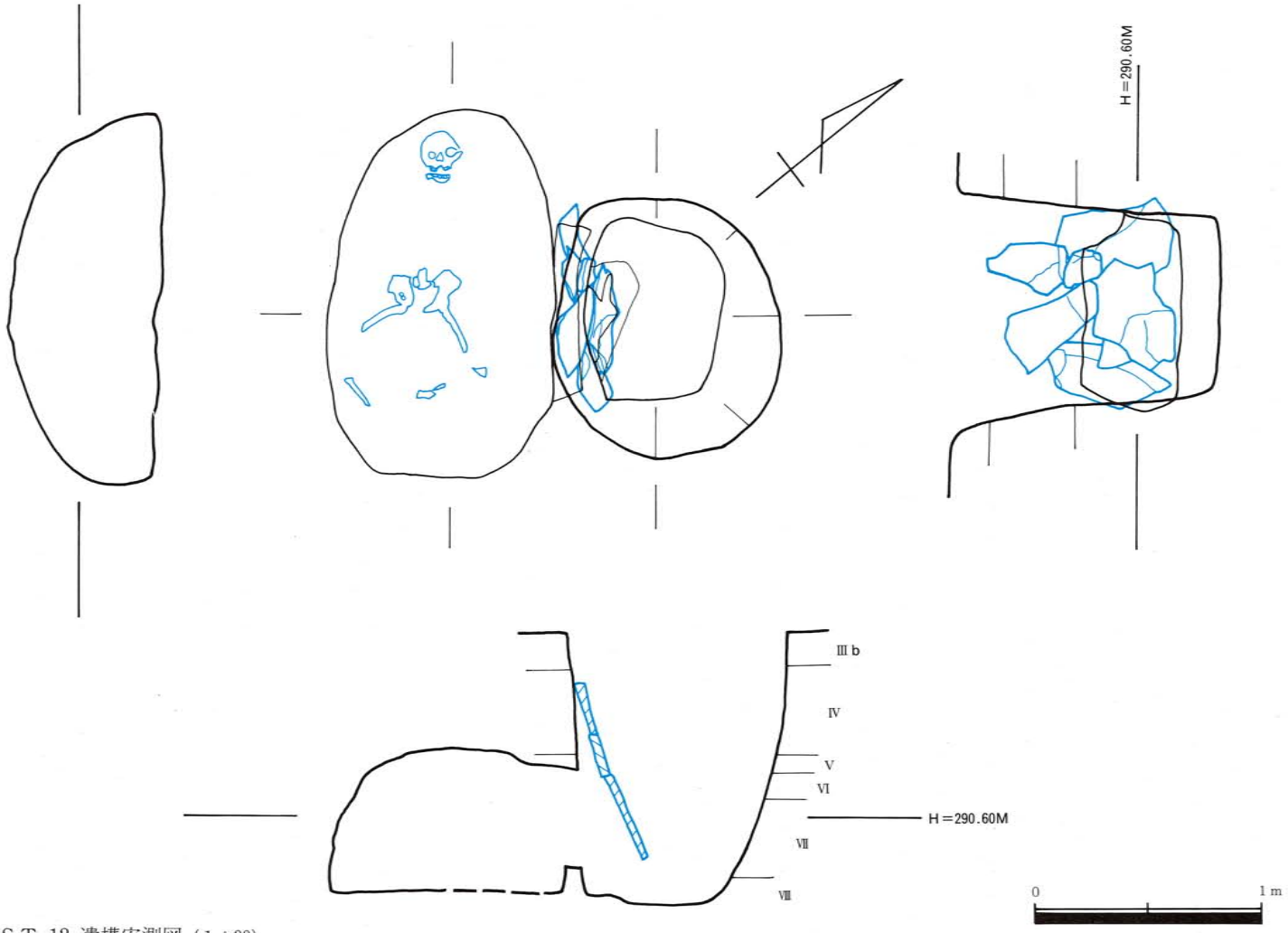
羨道は、長さ0.28〜0.71m、幅0.22〜0.32m、厚さ0.03〜0.10mの板石10枚で閉塞される。

出土遺物（第52図−46、図版42）

２号人骨の頭骨の西側に、鋒を左側壁に向けた短剣１振が副葬されている。現存長355㎜、剣身長252㎜、幅29㎜を測る。鎬は明瞭でない。把部には目釘孔が１孔確認できる。また、把木が遺存している。

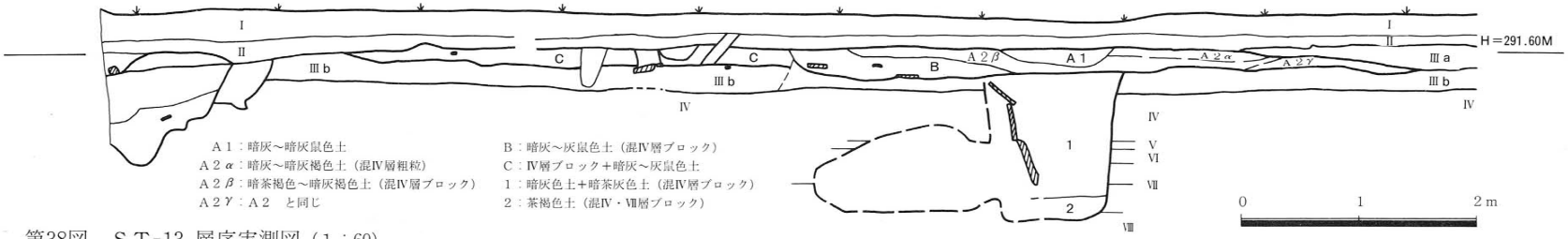
ＳＴ−14（第40図、図版26）

遺構検出時には、すでに玄室の天井が崩落して黒色土が埋積し、閉塞石も移動していた。

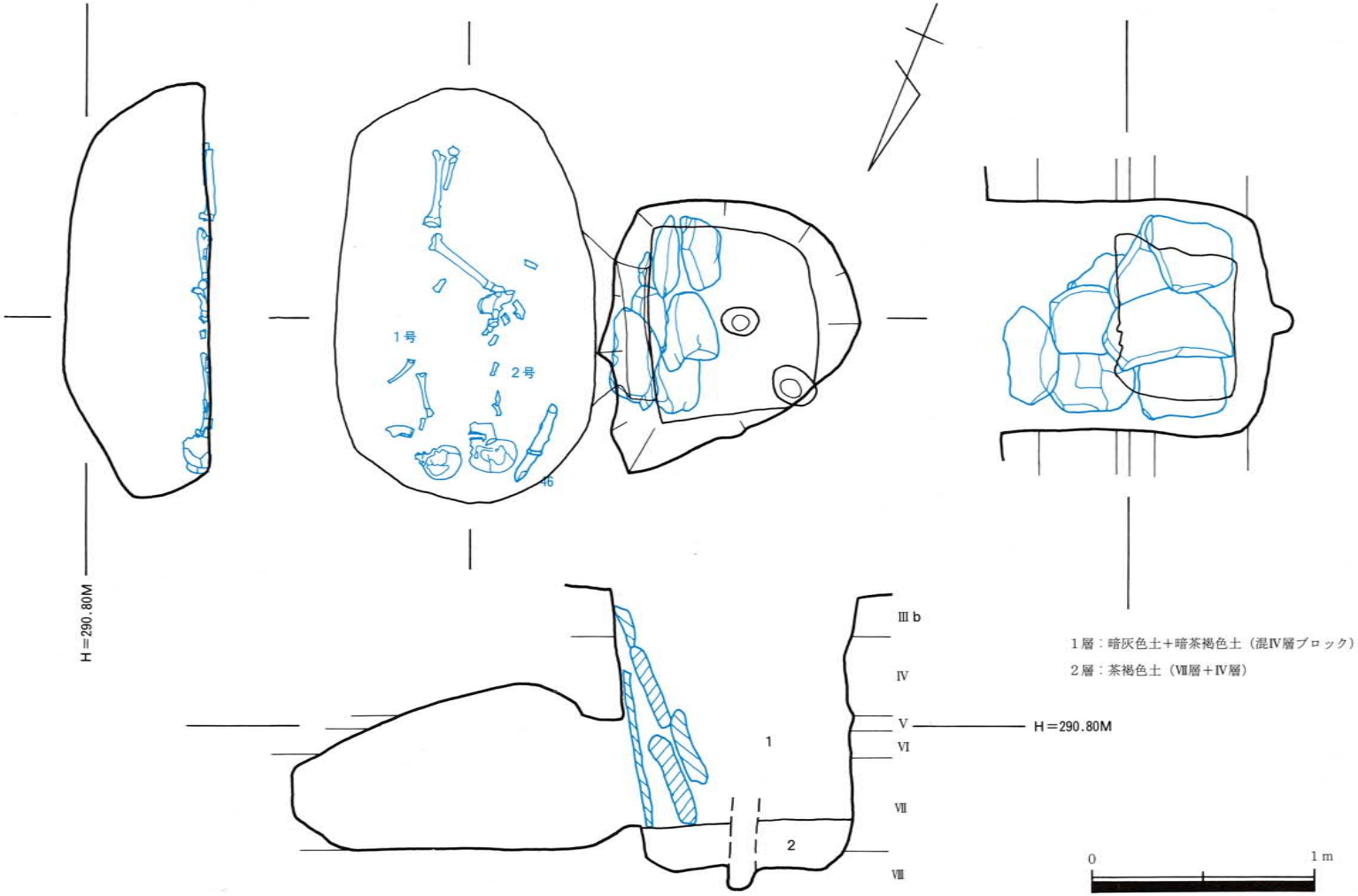


第37図　ＳＴ-12 遺構実測図（1：30）

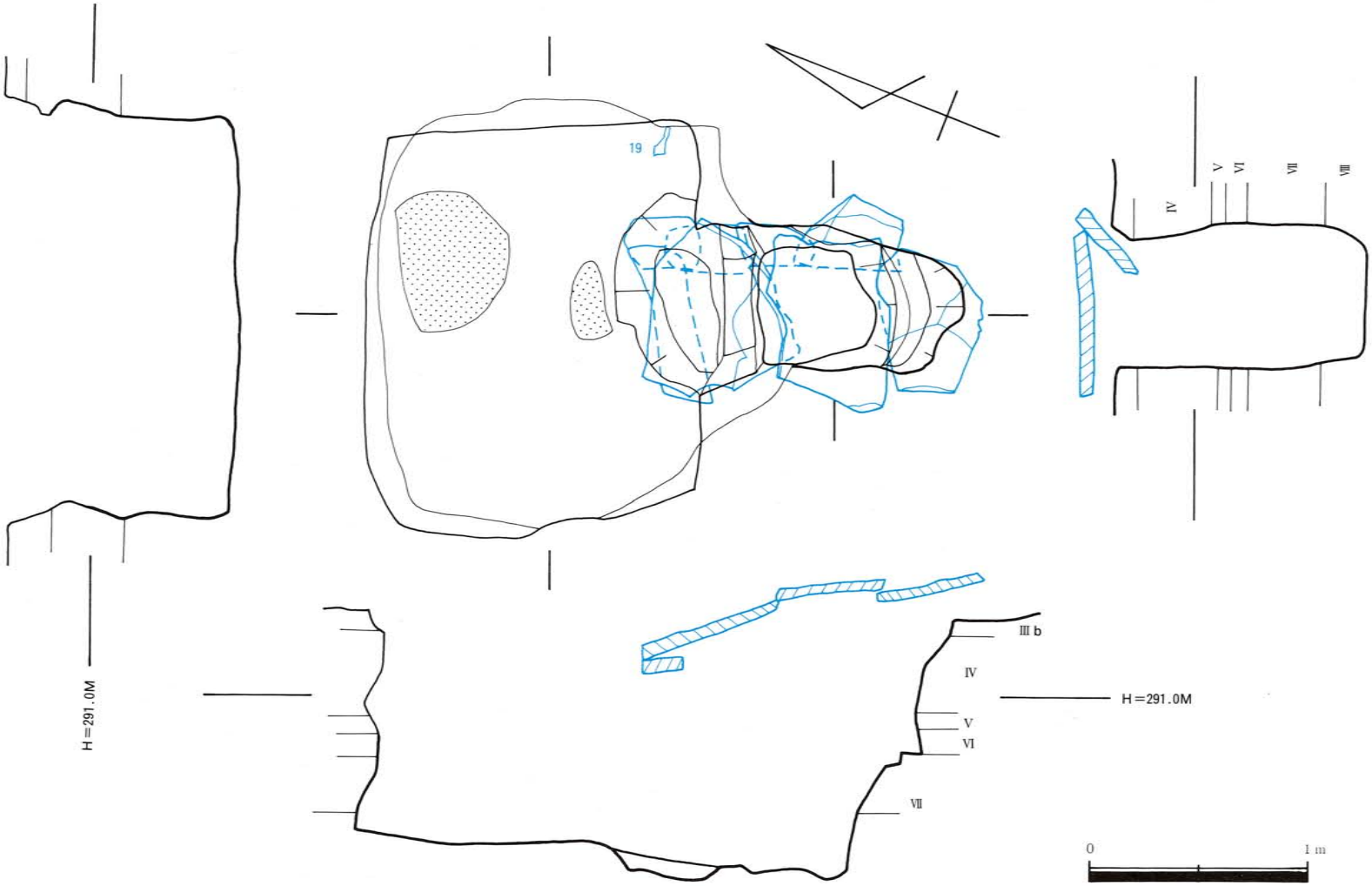
写真１　ＳＴ-13 層序



第38図　ＳＴ-13 層序実測図（１：60）



第39図　ＳＴ-13 遺構実測図（1：30）



第40図　ＳＴ-14 遺構実測図（1：30）アミ目は赤色顔料

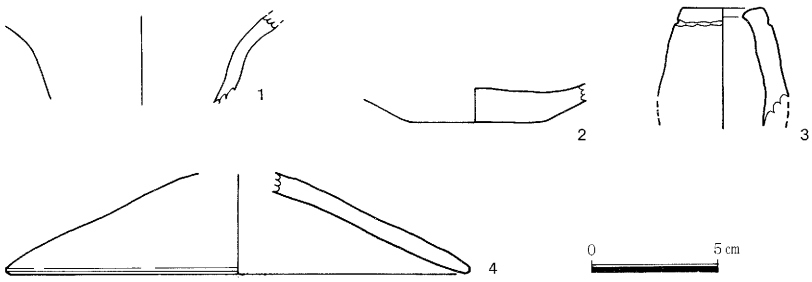
主軸方位は，N21°Wを示す。竪坑上部閉塞、平入り長方形プランである。

竪坑は不定形で、長さは不明、幅0.66m、深さ1.17mを測る。羨道には断面台形の低い仕切りが設けられるが、玄室床面のレベルが高くなったために平坦に埋め戻されている。羨道の全長は0.24m、幅0.67～0.75mを測る。玄室は、長さ1.67～1.80m、幅1.41～1.51mを測り、高さは不明である。両側壁はほぼ直立する。床面には、２ヶ所に赤色顔料の塗布が認められた。

人骨は遺存していない。

羨道は、長さ0.34～0.80m、幅0.17～0.73m、厚さ0.04m内外の板石８枚で閉塞される。

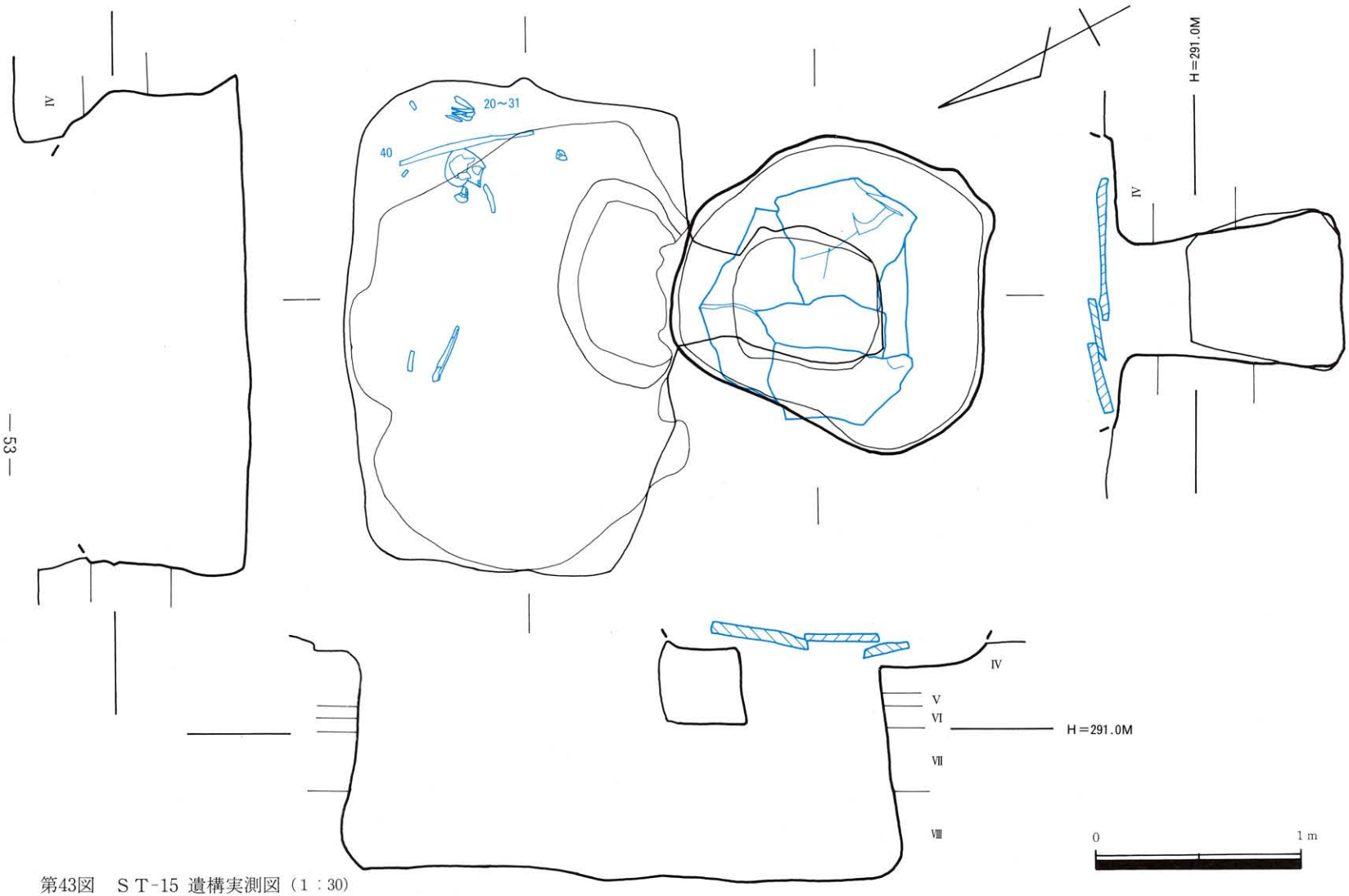
第41図　E群遺物出土状態実測図（1：10）



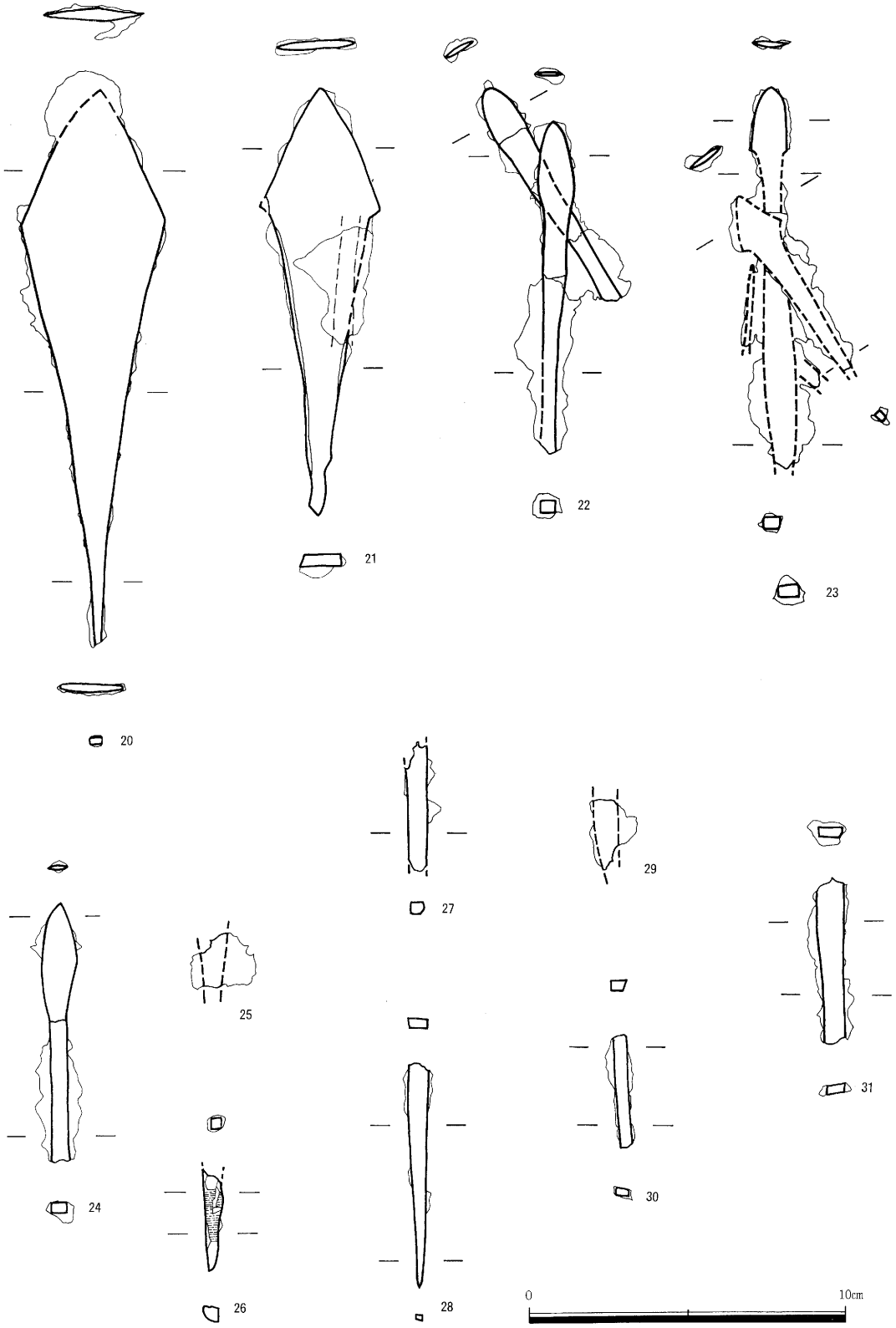
第42図　E群遺物実測図（1：3）

No.	図版	器形	法量(mm)		文様および調整		胎土		焼成	色調	
			口径	底径	外面	内面	砂粒・量	赤褐色粒		外面	内面
1		壺			不明	不明	精良		ややあまい	淡黄	灰
2		壺		53	ナデ	ナデ	1ミリ・微	1～2ミリ・多	良好	淡黄褐	淡黄褐
3	38-2	不明	32		ナデ	ナデ	精良		良好	淡桃黄	淡黄褐
4	38-1	高坏		184	不明	不明	1ミリ・少		あまい	淡橙褐	淡橙褐

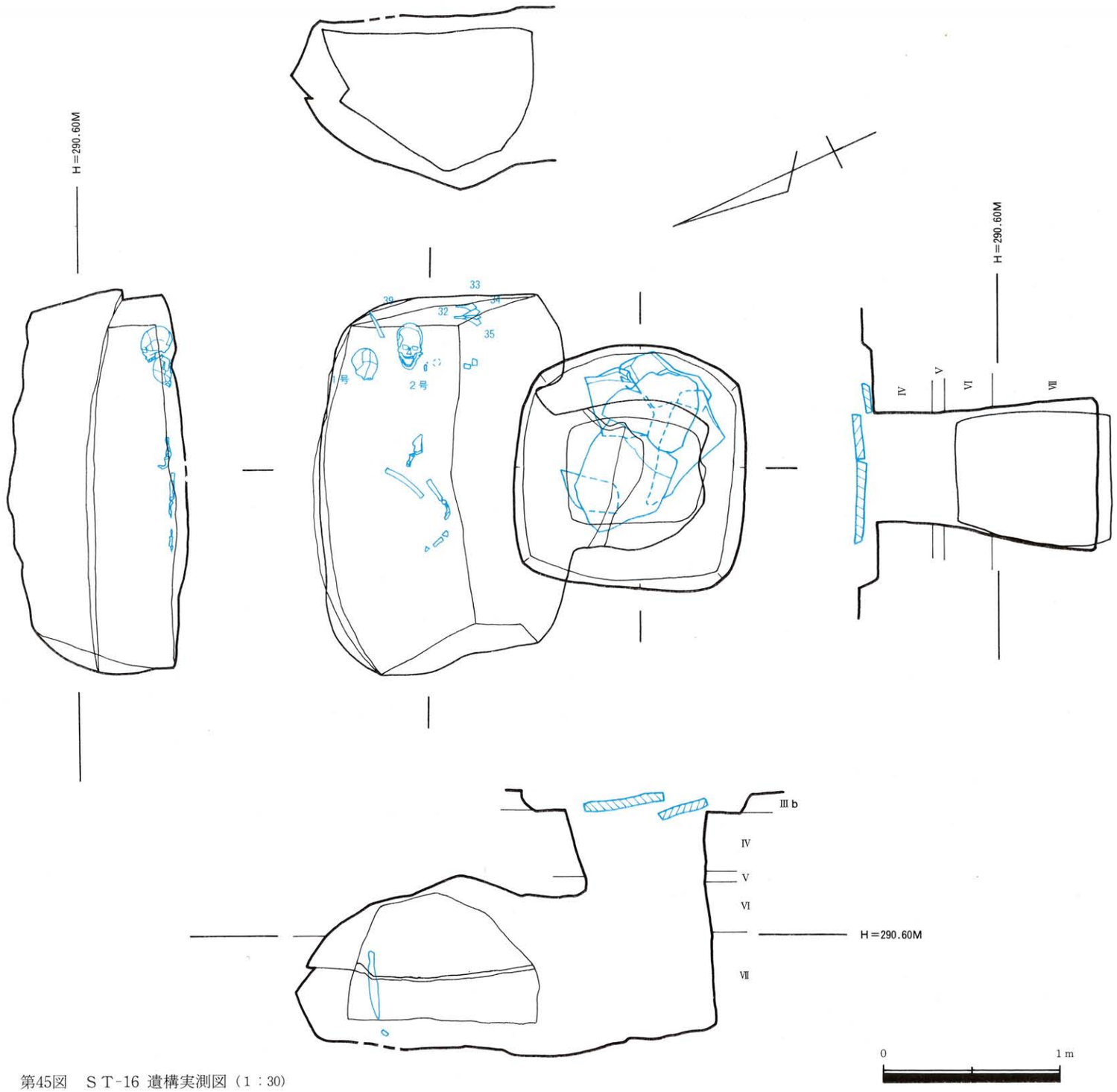
第４表　E群遺物観察表



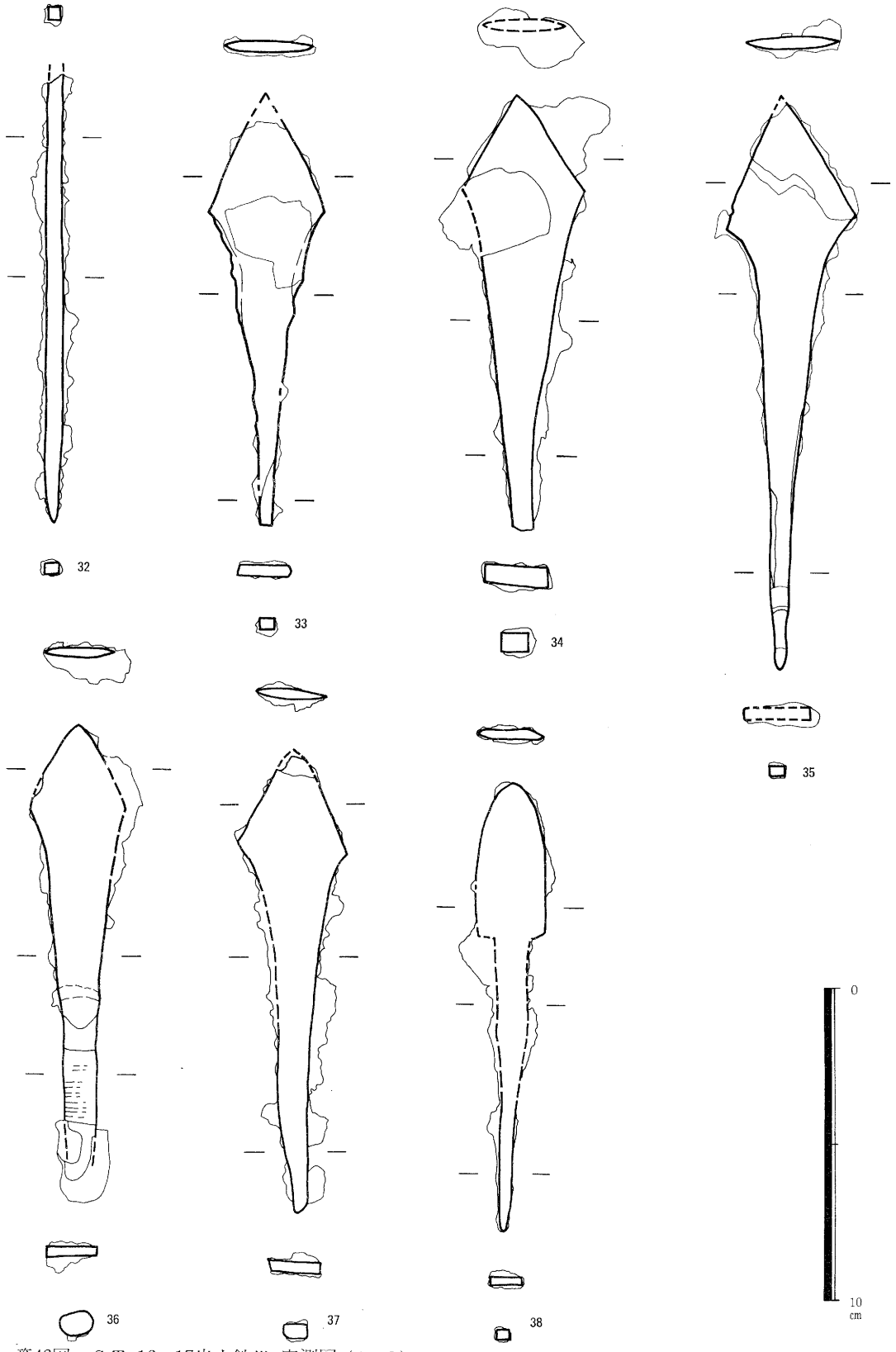
第43図　ＳＴ-15 遺構実測図（1：30）



第44図　ＳＴ-15出土鉄鏃 実測図（１：２）



第45図　ＳＴ-16 遺構実測図（1：30）



第46図　ＳＴ-16、17出土鉄鏃 実測図（1：2）

出土遺物（第33図－19、図版41）

玄室の右袖部に鉄鏃１本が副葬されていた。大形の三角形式で、現存長152㎜、鏃身長47㎜、最大幅42㎜を測る。頸部は腐蝕で曲がっているが、樹皮巻き矢柄が遺存している。

Ｅ群土器（第41・42図、第４表、図版38）

ＳＴ-14から南東へ2.2～3.0mの小範囲に、土器群が検出された。すべて土師器で、壷２、長頸壷１、甕１、高坏１、用途不明土製品１で構成される。砕片ばかりで、器形を復元できるものは無い。**3**の口縁部には、篦状工具で１条の沈線が施されている。

ＳＴ-15（第43図、図版27）

調査前（平成２年３月）に耕作機械の重圧で玄室の天井が崩落し、地権者によってその存在が知らされていた墳墓である。

ＳＴ-14と8.0m離れて位置する。主軸方位は、N28°Eを示す。

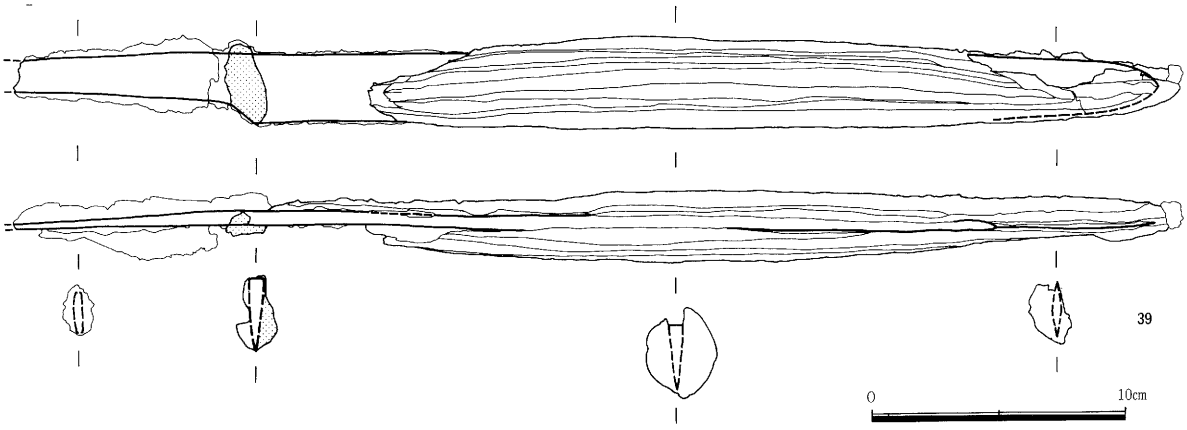
竪坑上部閉塞、平入り長方形プランを呈する。竪坑の１段目は不定形で、長さ1.51m、幅1.42m、深さ0.07mを測る。２段目は長さ0.70m、幅0.60m、深さ1.10mを測る。羨道は、長さ0.28m、幅0.38～0.49m、高さ0.73mを測る。玄室へ少し入った所までは同一レベルで掘り進められるが、玄室床面の大部分は若干高くなっている。玄室は、長さ2.25～2.38m、幅1.20～1.63mを測り、左側壁が短い。壁面には、刀幅40～50㎜の横位の掘削痕が明瞭に残っている。竪坑の２段目と玄室の壁面中位（Ⅶ層に相当する部分）には、赤色顔料が塗布されている。

被葬者は男性１本で、頭骨のみ遺存状態が良い。

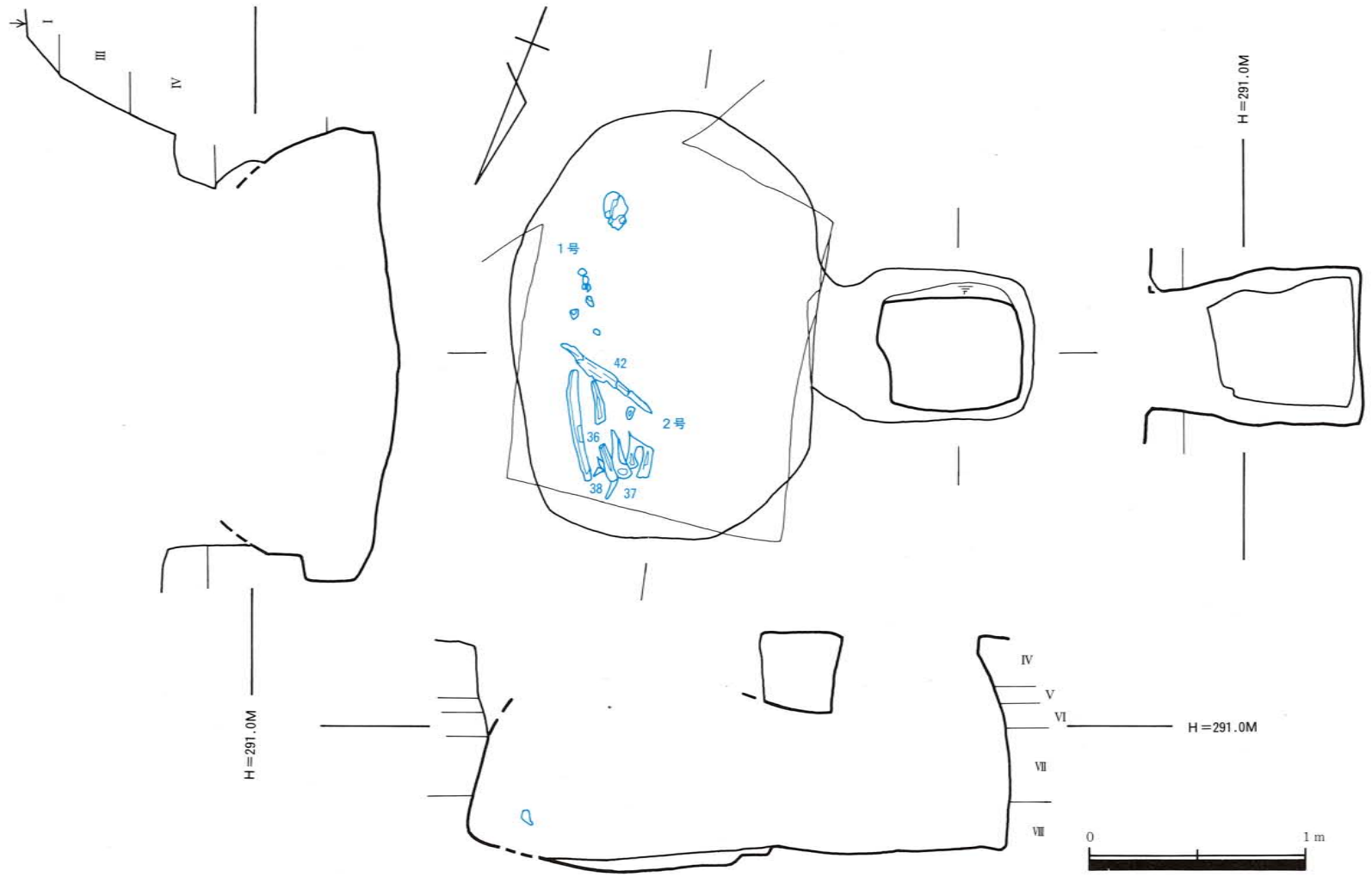
竪坑上部は、長さ0.62～0.90m、幅0.13～0.70m、厚さ0.04m内外の板石５枚で閉塞される。

出土遺物（第44図、第51図－40、図版41・42）

頭骨に接して鉄剣１振、その奥に鉄鏃７～８本が副葬されていた。**40**は、現存長790㎜、剣身長645㎜、最大幅37㎜、最大厚９㎜を測る。鎬は不明瞭で、やや丸みを持つ。剣身には木鞘の一部が、把には把木の一部が遺存する。目釘穴は、錆化のために見い出せない。鉄鏃は、圭



第47図　ＳＴ-16 出土 小刀実測図（１：３）



第48図　ＳＴ-17 遺構実測図（1：30）

頭・三角形・長頸鏃からなる。**20**は現存長176㎜、鏃身長46㎜、最大幅45㎜を測る。**21**は、それぞれ136、39、38㎜を測る。**22～31**で５～６本分であり、長さ70～150㎜前後、最大幅11～16㎜を測る。樹皮巻き矢柄は、**23**に遺存する。

ＳＴ-16（第45図、図版28）

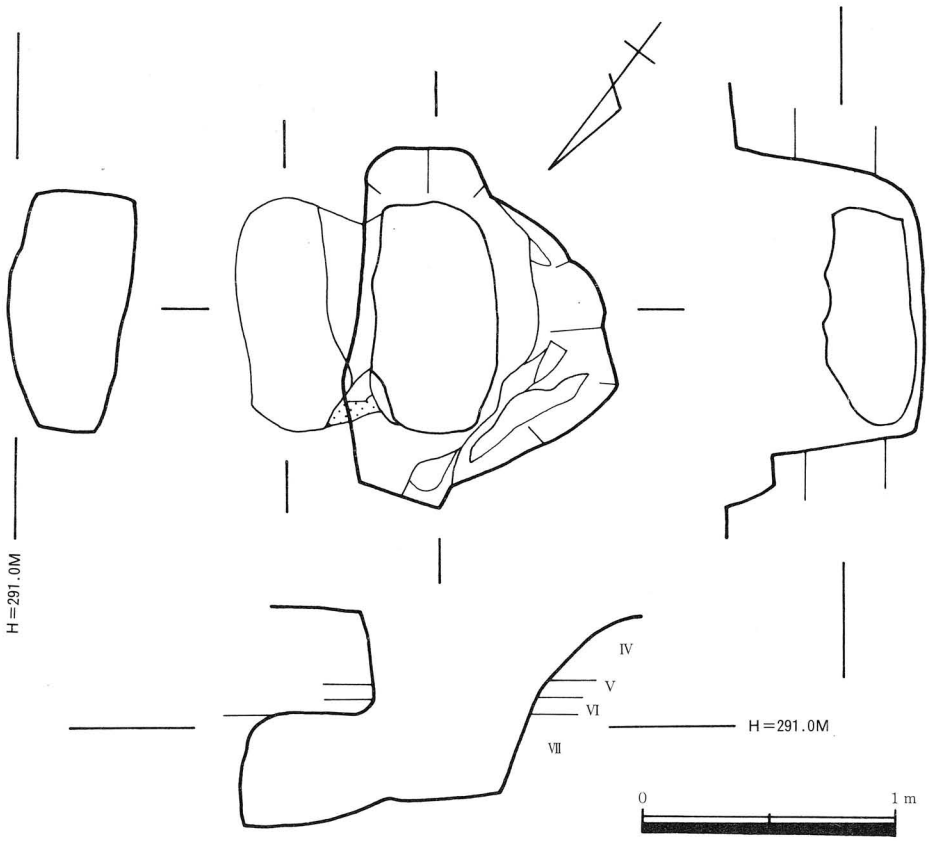
地下式横穴墓分布域の北端に位置し、竪坑上部閉塞のものとしては唯一、原形を保っていたものの閉塞石は若干移動し、竪坑内に１枚落ち込んでいた。

主軸方位は、N25°Ｅを示す。平入り長方形（やや胴張り）プランを呈する。

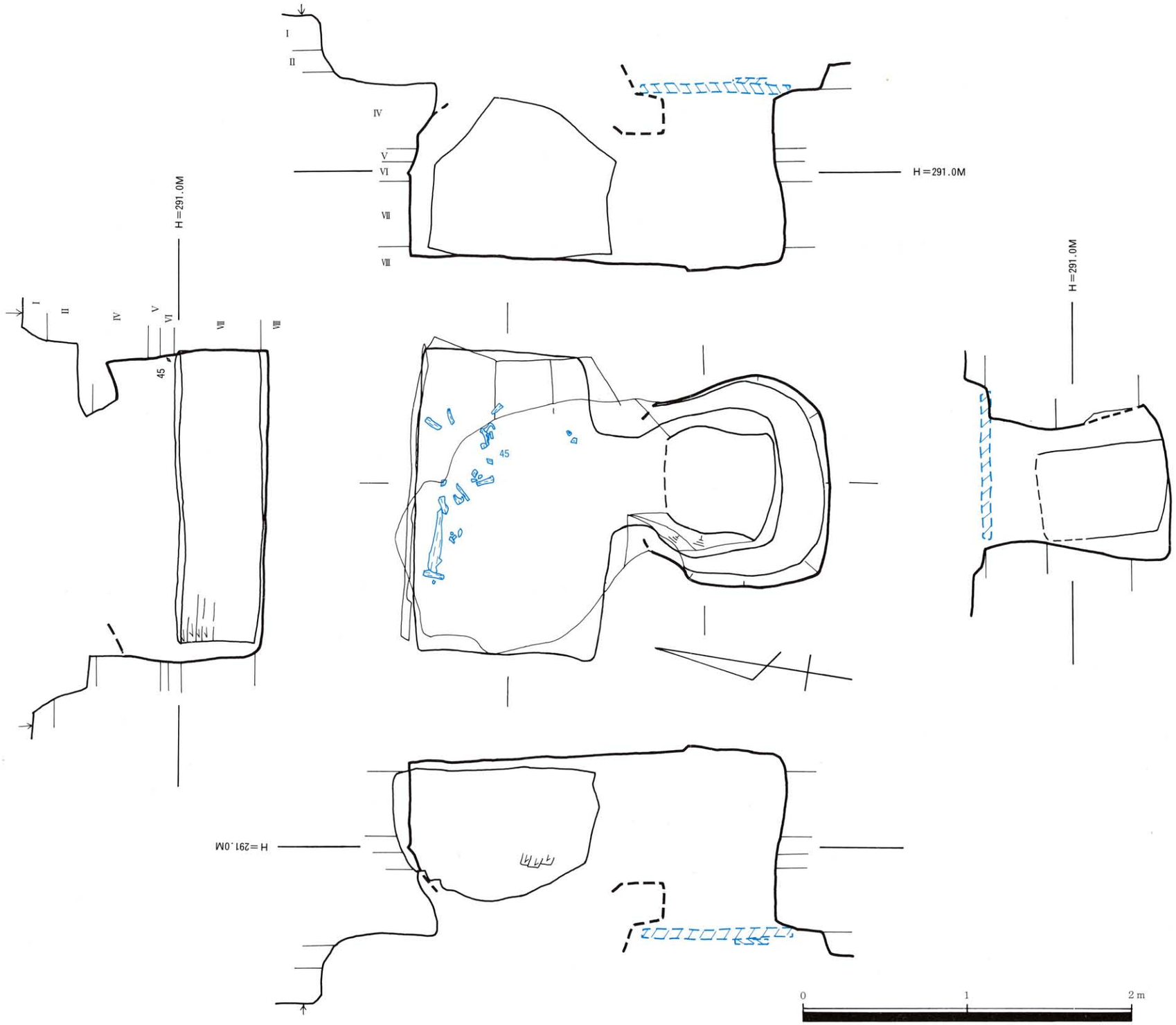
竪坑１段目は、長さ1.38m、幅1.31mのほぼ方形を呈し、深さは0.11mである。２段目は、長さ0.80m、幅0.62m、深さ1.34mを測る。羨道部は明瞭でないが、底面は若干凹み、高さは0.89mを測る。玄室は、長さ2.00～2.16m、幅1.07～1.42m、高さ0.97mを測る。両側壁はほぼ直立し、奥壁と右側壁には幅0.06～0.08mの庇を有する。天井は切妻の屋根形を呈するが、丁寧な造りではない。右の袖部はいびつで、突出している。

被葬者は男性２体で、１号人骨のほうが遺存状態が悪い。

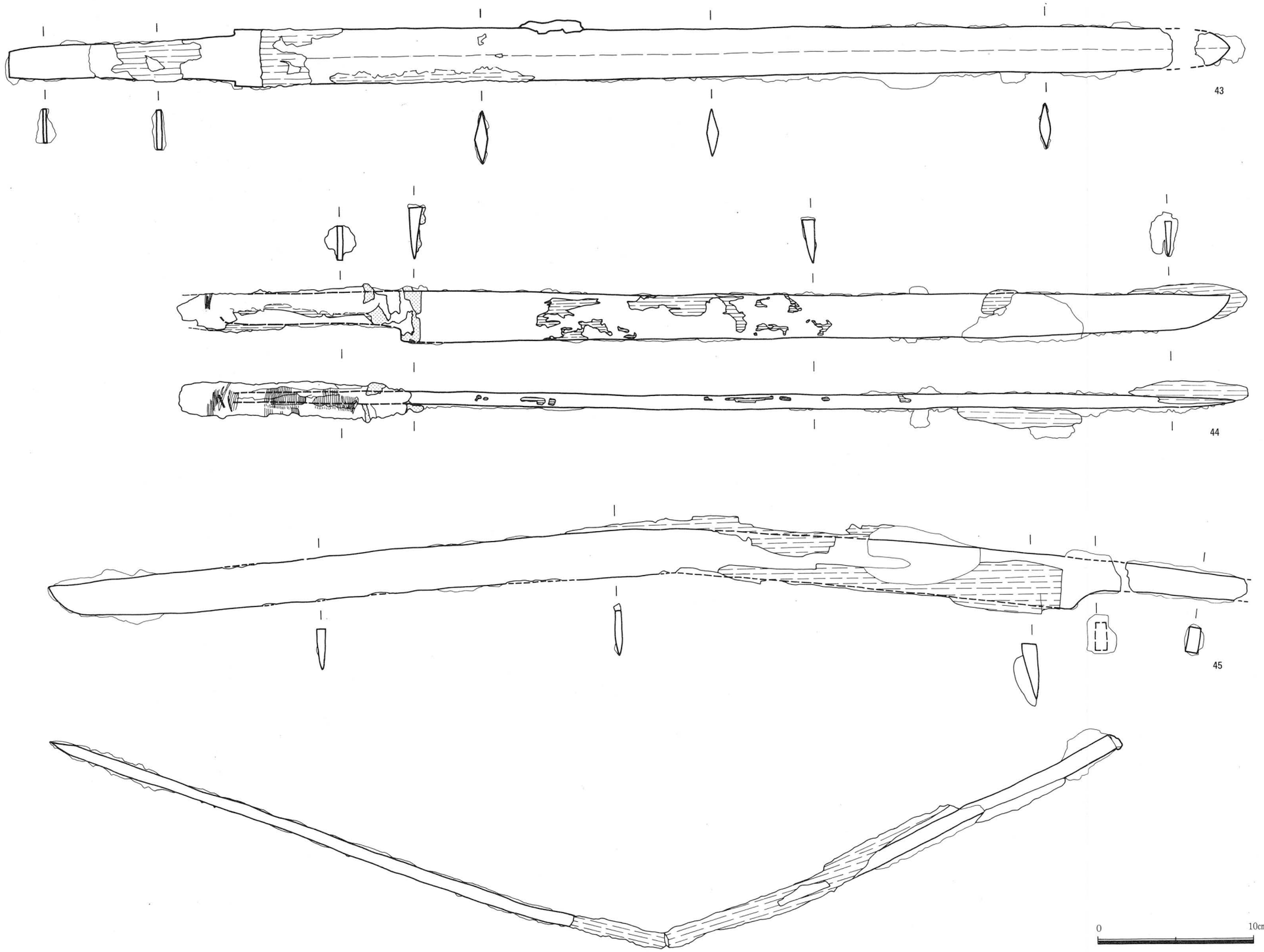
竪坑上部は、長さ0.30～0.70m、幅0.18～0.50mの板石７枚で閉塞される。



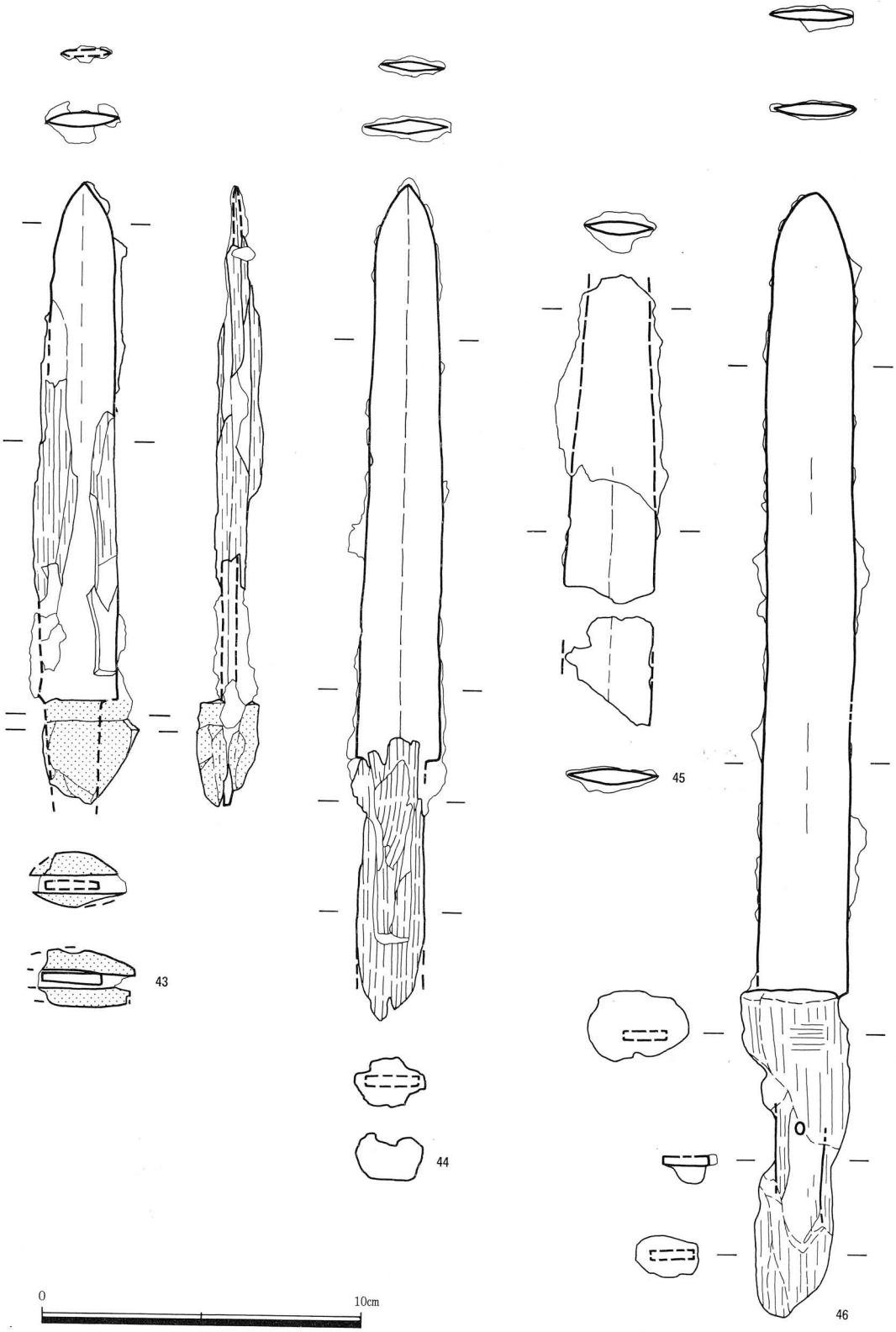
第49図　ＳＴ-18 遺構実測図（1：30）アミ目はシラス塊



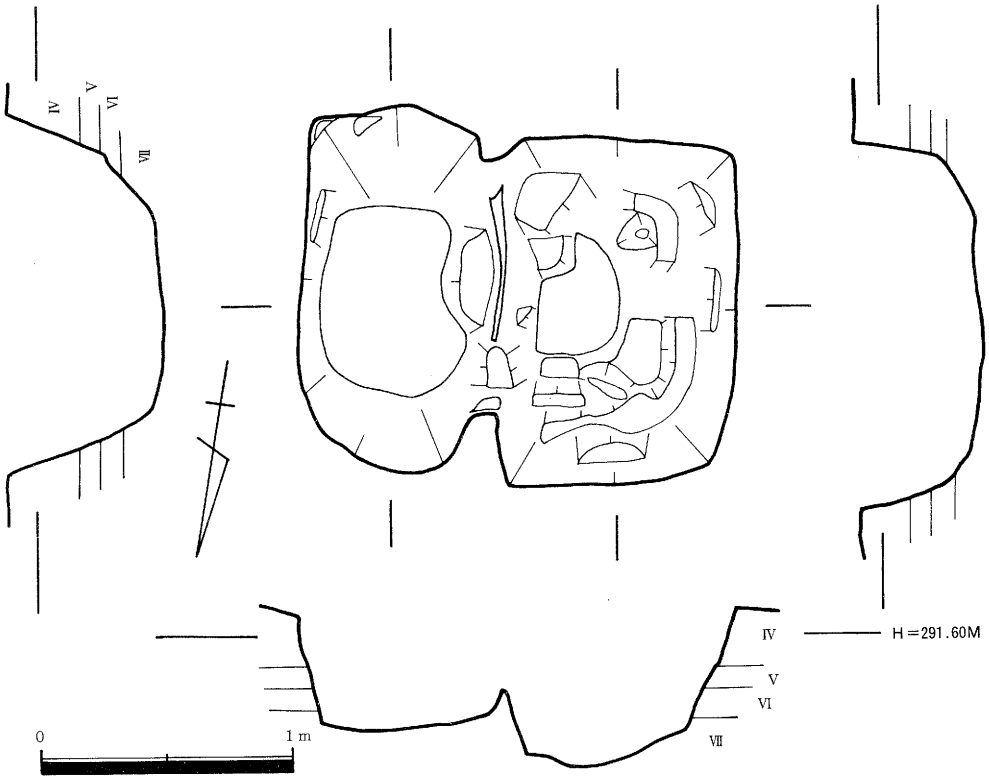
第50図　ＳＴ-19 遺構実測図（1：30）（閉塞石は図上復元）



第51図　ＳＴ-06、15、17出土刀剣実測図（１：３）アミ目は鹿角



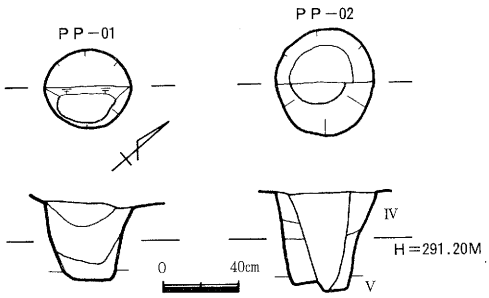
第52図　ＳＴ-03、11、13、19出土短剣 実測図（１：２）アミ目は鹿角



第53図　ＳＫ-01 遺構実測図（1：30）

出土遺物（第46図－32～35、第47図－39、図版41・42）

２体の頭骨の間に、庇に立て掛けた小刀１振と、２号人骨の横に側壁と並行して鉄鏃４本が副葬されている。**39**は、現存長460㎜、刀身長358㎜、最大幅27㎜を測る。鋒67㎜は、左右対象の両刃造である。刀身には木製鞘が遺存、錆着しているために、鎬の形状は不明である。鞘口には鹿角が、把には把柄の一部が遺存する。**32**は鏃身部を欠き、現存長 143 ㎜を測る。**33～35**は圭頭鏃で、矢柄を着装した痕跡は無い。**33**は現存長 130 ㎜、鏃身長29㎜、最大幅37㎜を測る。**34**は、それぞれ140、30、39㎜、**35**はそれぞれ180、40、41㎜を測る。



第54図　ＰＰ-01，02 遺構実測図（1：30）

ＳＴ－17（第48図、図版29）

調査区の東端、ＳＴ-16と約10ｍ離れて位置する。遺構検出時には、すでに天井が崩落して黒色土が埋積していた。

また、竪坑上部の閉塞石も全て消失していた。

主軸方位は、N72°Eを示す。プランは、平入り楕円形を呈する。

竪坑の１段目は削失する。２段目は、長さ0.68m、幅0.53m、深さ0.99mを測る。羨道は、長さ0.24m、幅0.54～0.62m、高さ0.64mを測る。玄室は長さ1.98m、幅1.42mを測る。床面中央部は若干凹み、貼り床が施される。壁面全体には、赤色顔料が塗布されている。

被葬者は２体であるが、遺存状態が悪い。

出土遺物（第46図－36～38、第51図－41、図版41・42）

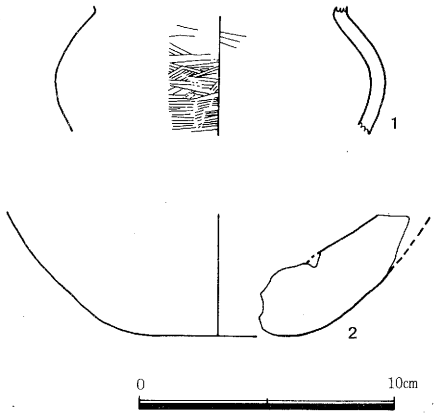
人骨の中央部に大刀１振、下肢骨下部に鉄鏃３本を検出した。大刀（**41**）は、２号人骨の下肢部に、鋒から0.26mの部分まで床面下に突き刺した状態で、天井部崩落の影響で中途から折れ曲っている。把部は一部欠損する。現存長805mm、刀身長694mm、最大幅34mmを測る。**36**は、現存長152mm、鏃身長26mm、最大幅30mmを測る。樹皮巻き矢柄の一部が遺存する。**37**はそれぞれ146、31、34mmを測る。**38**はそれぞれ144、49、22mmを測り、箆被を有する。

ＳＴ－18（第49図、図版31）

ＳＴ-17から北東へ約４m離れて位置する。主軸方位は、N52°Eを示す。

羨道閉塞、平入り楕円形プランを呈する。竪坑は、長さ1.42m、幅1.08m、深さ0.74mを測る。羨道は不明瞭である。玄室は長さ0.92m、幅0.49m、高さ0.45mで、床面は傾斜している。左袖部には、シラス塊が置かれていた。

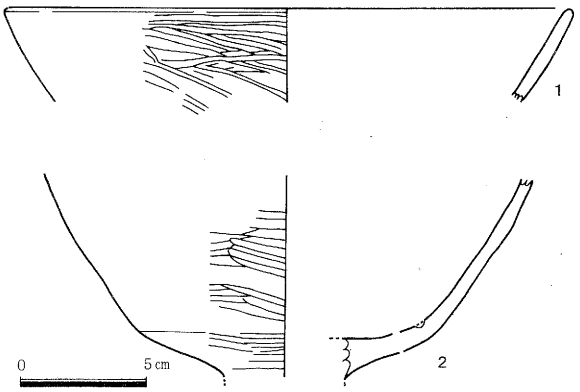
当墳墓には黒色土が充塡しており、人骨・副葬品および羨道閉塞材は認められないものの、玄室内の流入土は軟質であることから、ＳＴ-08や09と同様、板（有機質）閉塞であったと思われる。また、その規模から、小人用の墳墓であると思われる。



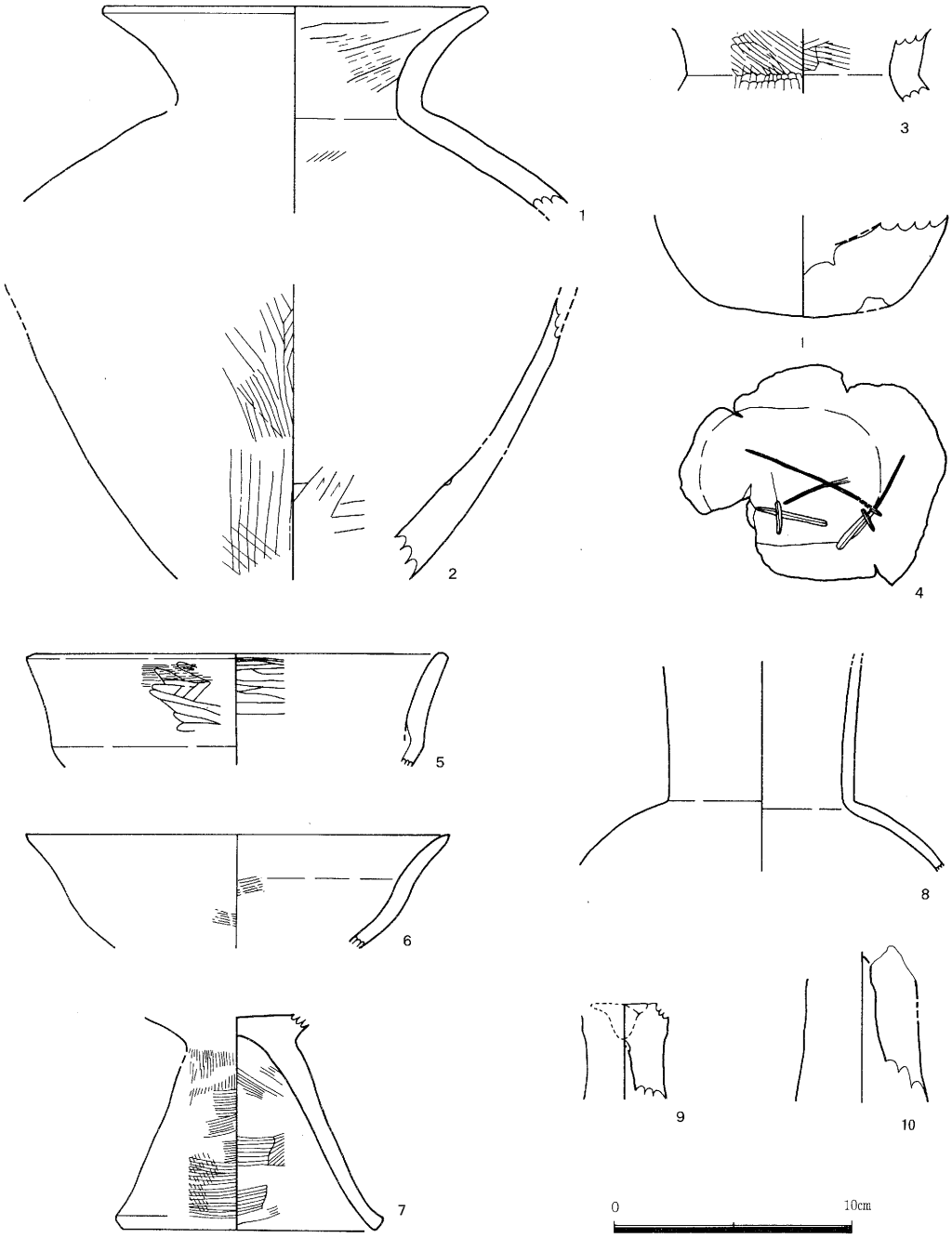
第55図　Ｄ群遺物実測図（１：３）

ＳＴ－19（第50図、図版30）

発掘調査終了直後、資材運搬車輌が玄室の天井を陥没させたため、急拠、調査を実施した。地権者の話によると、数年前にも陥没し、その際頭骨と傍らにあった刀を取り出して近くの寺に納骨したとのことであった。実際、埋土を除去すると頭骨以



第56図　Ｆ群遺構実測図（１：３）



第57図　Ⅳ区 出土遺物実測図（1：3）

外の人骨が検出され、また、陥没口を塞いだと思われる直径約１m、厚さ０.２mのコンクリート塊を確認した。

当墳墓はＳＴ-03から西へ10mの地点にあり、主軸方位はＮ９°Ｗを示す。

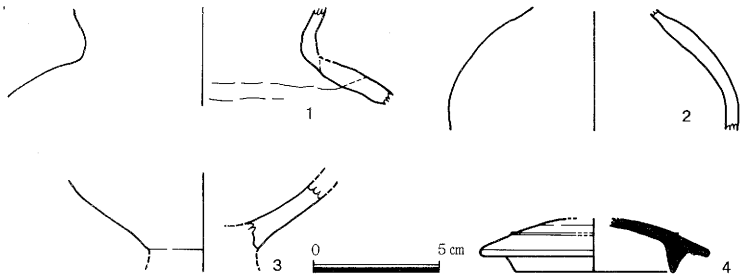
竪坑１段目は、長さ1.28m、幅1.25m内外、深さ0.11m、２段目は長さ0.80m、幅0.70m内外、深さ1.12mを測る。羨道は、長さ0.23～0.28m、幅0.52～0.60m、高さ0.78mを測り、竪坑底面とは僅かに段差がある。玄室は、長さ1.85m、幅0.96～1.22m、高さ0.9m内外を測る。両側壁は直立し、奥壁のみ幅0.04m内外の庇を有する。天井は切妻形であるが、雑な整形である。壁面には、刀幅50～70㎜の工具痕が明瞭に残っている。

被葬者は１体で、遺存状態も良くない。

竪坑上部は、縦横0.9m内外と0.2m内外の板石で閉塞されていた。

出土遺物（第52図－45、図版42）

玄室奥壁の右隅に剣先が刺さっていた。これは人骨と混在していた小片と同一個体で、かって取り出された「刀」の一部と思われる。現存長 139 ㎜、最大幅28㎜を測り、鎬が通る。鋒は欠失し、壁面に刺さっていた部分約70㎜は錆化が著しい。



第58図　Ｖ区 出土遺物実測図（１：３）

No.	図版	出土地点	器形	法量(㎜) 口径	法量(㎜) 底径	文様および調整 外面	文様および調整 内面	胎土 砂粒・量	胎土 しそ輝石	胎土 赤褐色粒	焼成	色調 外面	色調 内面
1	38-8	ＳＴ-02玄室上面	壺	162		ナデ	ハケ、ナデ	1～4ミリ・多		1～4ミリ・多	良	淡橙褐～茶褐	淡黄褐
2	39-1	第43図-Ｃ層	壷			ナデ、下半ケズリ	ハケ	1～2ミリ・多		1～4ミリ・多	良好	淡桃褐	淡桃褐
3		排土	甕			ハケ	ハケ	1～2ミリ・多		1～5ミリ・多	良好	淡桃褐	淡桃褐
4		排土	壷		58～76	ナデ	不明	1～2ミリ・多		1～5ミリ・多	やや あまい	淡黄褐	淡黄褐
5		排土	高坏	177		ヘラミガキ	ヘラミガキ	精選			良好	淡黄褐～淡黄	淡黄褐～淡黄
6	39-6	排土	高坏	178		ヨコナデ、下半ハケ	ヨコナデ、下半ハケ	精選			良	淡桃黄	淡橙黄
7	39-3	第43図-Ｂ層	高坏		106	ハケ	ハケ	1ミリ位・多			良好	淡黄～淡黄褐	淡黄～淡黄褐
8	37-12	Ⅲ層（Ｃ群）	長頸壷			ナデ、頸部ハケ	ナデ	1～2ミリ・少	少		良	淡茶褐～淡灰褐	淡黄褐～淡灰褐
9	39-5	排土	高坏			ハケ	不明	1ミリ位・少			あまい	淡黄褐	淡黄褐
10		排土	高坏			不明	不明	1～2ミリ・多		2～3ミリ・多	あまい	桃黄～淡桃黄	桃黄～淡桃黄

第５表　Ⅳ区出土遺物観察表

No.	図版	出土地点	器形	法量(㎜) 口径	文様および調整 外面	文様および調整 内面	胎土 砂粒・量	胎土 赤褐色粒	焼成	色調 外面	色調 内面
1	38-6	Ｇ群	甕		ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1～2ミリ・少		良	淡黄褐	淡黄灰
2		Ｇ群付近	長頸壷		不明	ナデ	1～2ミリ・少		あまい	淡黄褐	淡黄褐
3		Ｅ群付近	高坏		不明	不明	1ミリ位・少	1～3ミリ・微	やや あまい	淡黄褐	淡黄灰
4	39-4	ＳＴ-17玄室崩落土内	蓋	61	ヘラケズリ	ナデ	1ミリ位・少		堅緻	淡紫灰～淡紅灰	淡紫灰～淡紅灰

第６表　Ｖ区出土遺物観察表

ＳＫ−01（第53図、図版31）

ＳＴ−01の南に位置する土坑で、楕円形と長方形のものが接したプランを呈する。前者は、長さ1.46m、幅0.79m、深さ0.60mを測り、埋土は黒灰色土を主とする。後者は、長さ1.20〜1.38m、幅0.81〜0.93m、深さ0.63mを測り、埋土にはⅣ層の土塊を多く含み、地下式横穴墓の竪坑のように埋め戻されている。接触部には、長さ0.62m、幅0.02〜0.05mの平坦面をもつ仕切り状のものがあり、羨道部に相当する。

以上を総合すると、小木原遺跡群・蕨Ａ地区でみられた土壙墓に類似する遺構と思われる。出土遺物は無く、時期比定はできない。

ＰＰ−01（第54図、図版31）

ＳＴ−10の竪坑から北東へ０.２ｍ離れて位置する。直径0.42〜0.45m、深さ0.40mを測る。柱痕は無く、埋土はⅣ層の微細粒を含む淡黒灰色〜暗灰褐色土である。

ＰＰ−02（第54図、図版31）

ＳＴ−02と07のほぼ中間に位置する。直径0.52〜0.56m、深さ0.52mを測る。尖底の柱痕を有する。埋土は、Ⅳ層の粗細粒を含む暗灰褐色〜淡黒灰色土である。裏込めの埋土は、Ⅳ〜Ⅴ層の粗細粒を含む暗灰褐色土である。

土器群Ｄ（第55図）

土器片数10片が散在する程度であり、壷と長頸壷、甕で構成される。**１**は長頸壷の肩〜胴部で、最大径130㎜を測る。外面はハケ調整、内面はナデ調整で頸部の一部にハケメが残る。胎土には１〜２㎜の砂粒を少量含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。**２**は壷の底部で、器面の摩滅が著しく、外面の一部にハケメが残る程度である。胎土には１〜３㎜の砂粒を多く含み、焼成はややあまい。

土器群Ｆ（第56図、図版38）

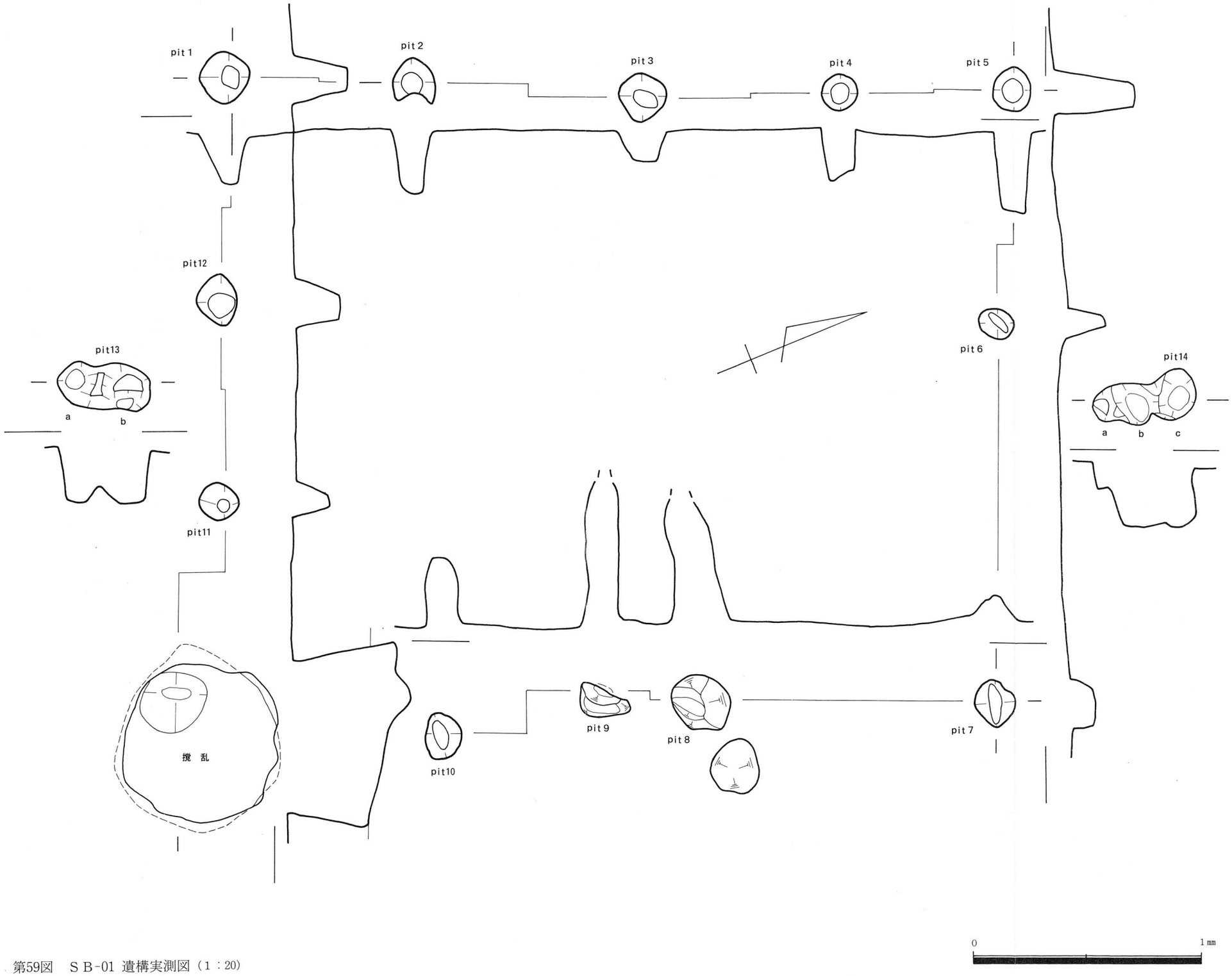
ＳＴ−14と15の間に数点づつ散在し、長頸壷と甕、高坏で構成される。**１**は高坏の口縁部で、口径233㎜を測る。内外面ヘラミガキで、胎土は精良、焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。**２**は高坏の坏部で、口縁部を欠く。外面はヘラミガキ、内面は器面剥落のため不明である。胎土は精良、焼成は良好である。外面は淡紅褐色、内面は淡橙褐色を呈する。

土器群Ｇ（第58図−１、図版38）

ＳＴ−16竪坑の西に位置し、甕と長頸壷で構成される。**１**は甕の頸〜肩部で、頸部は内外面ヨコナデである。内面は、粘土紐の継ぎ目が顕著である。胎土には１〜２㎜の砂粒を多く含み、焼成は良。外面は淡黄褐色、内面は淡黄灰色を呈する。

pit	直径(m)	深さ(m)	柱間(m)
1	0.20〜0.23	0.22	
			0.80
2	0.16〜0.22	0.28	
			1.03
3	0.19〜0.21	0.13	
			0.85
4	0.15	0.23	
			0.76
5	0.17〜0.20	0.35	
			1.02
6	0.13〜0.15	0.18	
			1.67
7	0.15〜0.19	0.11	
			1.32
8	0.24〜0.27	0.55以上	
			0.38
9	0.13〜0.24	0.65以上	
			0.75
10	0.16〜0.20	0.30	
11	0.16〜0.18	0.16	
			0.88
12	0.18〜0.23	0.20	
13a	0.20	0.24	
b	0.19〜0.24	0.24	
14a	0.14	0.12	
b	0.16〜0.21	0.28	
c	0.18〜0.24	0.26	

第７表　ＳＢ−01 柱穴一覧表



第59図　ＳＢ-01 遺構実測図（1：20）

その他の土器（第57・58図、第５・６表、図版39）

ａ．第57図－１　　ＳＴ－02玄室の上面で検出した壷の口縁部から肩部の破片である。口縁部の内面にハケの痕跡を残す。

ｂ．第57図－２、７　　ＳＴ－13の盛土断面で検出した土器で、Ａ群に帰属する。

ｃ．第58図－４　　ＳＴ－17玄室の崩落土上層内で出土した須恵器の蓋である。副葬品ではないものの、築造年代を推定する手がかりになる。

３．その他の遺構と遺物

時代不明の掘立柱建物１棟（ＳＢ-01）と溝約10条がある。

ＳＢ-01（第59図、第７表、図版32）

ＳＡ-01から西へ約14ｍの地点に位置する。梁４間、北の桁行２間、南の桁行３間の建物で南北に棟持柱を有する。梁間の全長3.45ｍ、桁行の全長2.70ｍを測る。南東隅の柱は、後世の撹乱によって消滅している。柱穴は、直径0.15～0.24ｍ、深さ0.2～0.3ｍの小型のもので、柱痕も無い。Pit ８・９は木痕であることから、自然木を利用した簡易な建物が想定される。

主軸方位は、N23°Wを示す。出土遺物は無い。

ＳＤ-01、04、05（第４図、図版32・33）

ＳＤ-01は、現道と並行して検出された。幅0.60ｍ内外、深さ0.08～0.19ｍを測る。ＳＤ－04はほぼ南北方向に走る溝で、旧一筆境の畦畔と並行している、幅0.60～1.45ｍ、深さ0.10～0.20ｍを測る。ＳＤ-05は台地縁辺に位置し、地形に沿って湾曲している。幅0.50ｍ、深さ0.40ｍを測り、断面はＵ字型を呈する。

ＳＤ-06～08（第４図）

ＳＴ-16を囲むように、不定形な溝状遺構が検出された。ＳＤ-06は、長さ6.20ｍ、幅0.74～1.24ｍ、深さ0.07～0.26ｍを測り、中央部が最も深い。ＳＤ-07は、長さ4.70ｍ、幅1.00～1.65ｍ、深さ0.08～0.20ｍを測る。ＳＤ-08は、長さ7.06ｍ、幅0.49～0.96ｍ、深さ0.09～0.13ｍを測り、壁面は垂直に近い。

ＳＺ-02（第４図）

ＳＴ-14から北東へ５ｍに位置し、長さ1.20～2.44ｍ、幅2.30ｍの不定形な掘り込みである。埋土は黒灰色土で、深さは0.10～0.20ｍを測る。

Ｖ．まとめ

Ⅰ・Ⅱ・ⅥおよびⅦ区では、現在の一筆境畦畔と並行する用排水路や、長方形・円形を呈する芋穴等を検出したにすぎず、調査はⅢ～Ⅴ区に重点を置いた。

遺構面はⅢｂ層上面で、後世の削平の度合によってⅣ層下部まで下がったりする。

旧石器～縄文時代の遺構・遺物は、皆無である。

１．弥生時代

竪穴式住居１棟を検出したのみで、付属施設等は何ら発見されなかった。四隅を欠く間仕切り型で、内区の南側に集中する３個の柱穴と南辺壁溝内の小柱穴から、入口を南側に設定しうる。埋土から磨製石鏃の破片が出土しており、集落内で製作していたことを伺わせる。土器は甕１個体が出土し、後期に比定できる。

２．古墳時代

地下式板石積石室墓５基、地下式横穴墓19基、石組遺構１基、土坑１基、柱穴２基、そして土器群を７ヶ所検出した。

a．地下式板石積石室墓について

調査結果と地権者の話を総合すると、調査区から東南部にかけて分布している。05号は、位置と規模・形態から、当該墳墓の未完成墓とみなした。

直径は1.7～2.6mとバラツキがある。02号のプランは長方形に近く、古い要素を持つ。

側石が遺存している01、02、04号についてドーム形の天井を復元すると、遺構面（Ⅲｂ層上面）よりも数10センチ上位に出ることから、半地下式（封土を伴うかどうかは不明）であったことは疑いない。従って遺構の切り合いも無い。

石組遺構（ＳＺ-01）とＡ群土器は、ＳＴ-11と13構築の際に破壊を受けており、板石積石室墓群の祭祀施設および祭祀土器としてみなされる。また、Ｃ群土器も同様、ＳＴ-04・05への供献ではなくＳＩ-04の祭祀土器として、Ｂ群・Ｄ群土器およびＳＴ-02竪坑埋土内の土器も板石積石室墓の祭祀土器として扱うべきであろう。土器群は、４世紀末～５世紀に含まれる。

b．地下式横穴墓について

上記のことから、板石積石室墓という墓制を否定して営まれたものと言える。

Ⅳ～Ⅴ区に集中し、竪坑上部閉塞（Ａ類）６基と、羨道閉塞（Ｂ類）13基を検出した。人骨の遺存例も多く、26体を数える。

1）規模について（第60図）

Ａ類は、Ｂ類よりも一回り大きいことが明瞭である。Ｂ類においては、楕円形プランよりも長方形プランのほうが規模が大きい傾向にある。

2）群構成について（第61図）

Ａ類とＢ類は混在しない。Ａ類は、大きく２ヶ所に分かれて分布し、各々約10mの距離を置く。主軸位置も北西～北東と様々で、各々独立した墓域を有していたものと思われる。

18号はＢ類であるが、Ａ類分布域に入っていることから、小人用として簡単に構築された特殊な例として、ここでは扱わない。

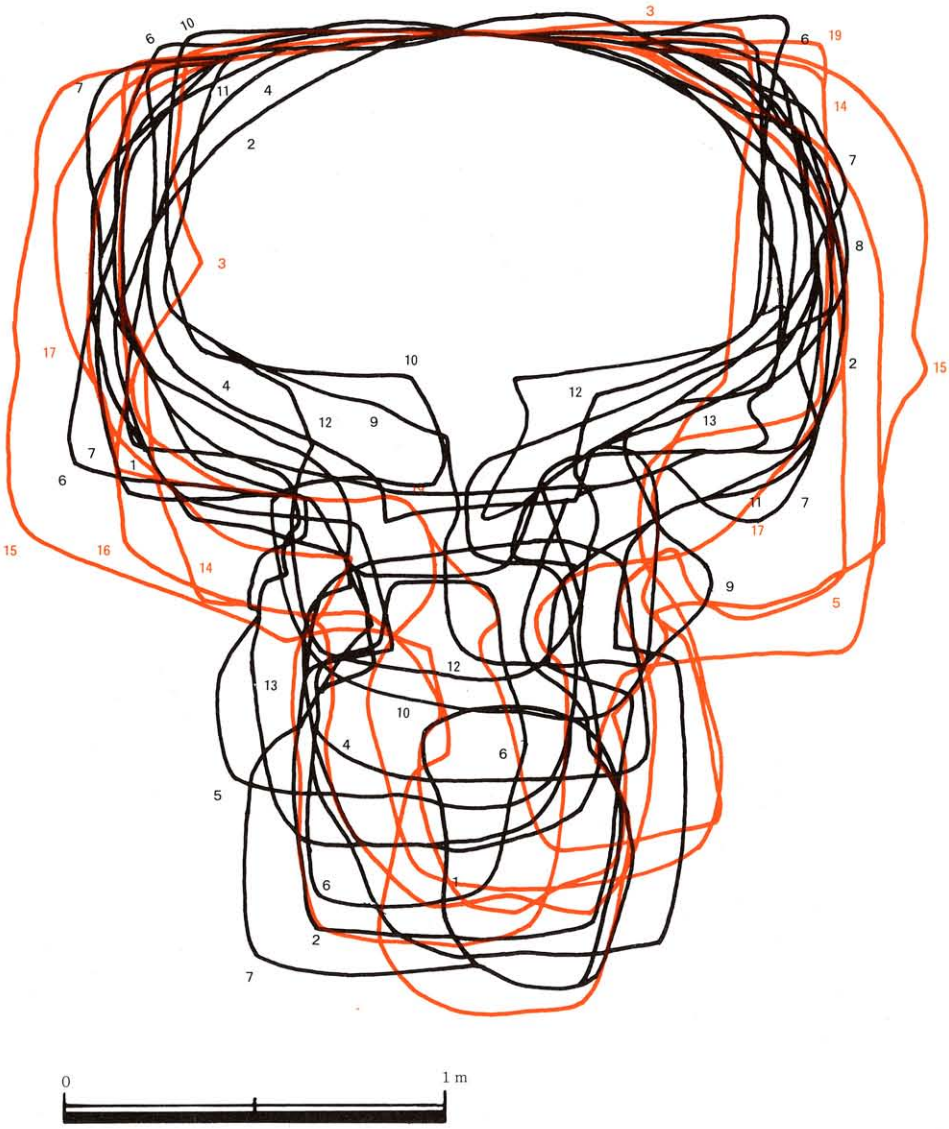
Ｂ類の主軸方位も纏まりが無いものの、１つの群を構成していることがわかる。02と04・05・06・11・12号は環状に配置し、主軸を放射状に向ける。これらの玄室のスペースを空白帯とし、その外側に08と09、01と07・10、13号の３つの小群がとり巻く配置である。[(11)] なお、12号が

東向きであることと、10号の位置的なズレおよび寸詰まりな感を呈するのは、板石積石室墓の存在を意識してのことと思われる。

3）副葬品について

土器は１点も無く、鉄製武器のみが副葬されている。

Ａ類では、14号を除く５基が刀か剣を保有するのに対して、Ｂ類では保有率が低い。06号は大刀を有し被葬者も男性１体であることから、Ｂ類の中では最も権力が強かったものと思われる。副葬品を持たない02・04・09・12号の被葬者は、女性もしくは女性の可能性が高いという鑑定結果から、武器の副葬は男性のみに行なわれたと推定される。



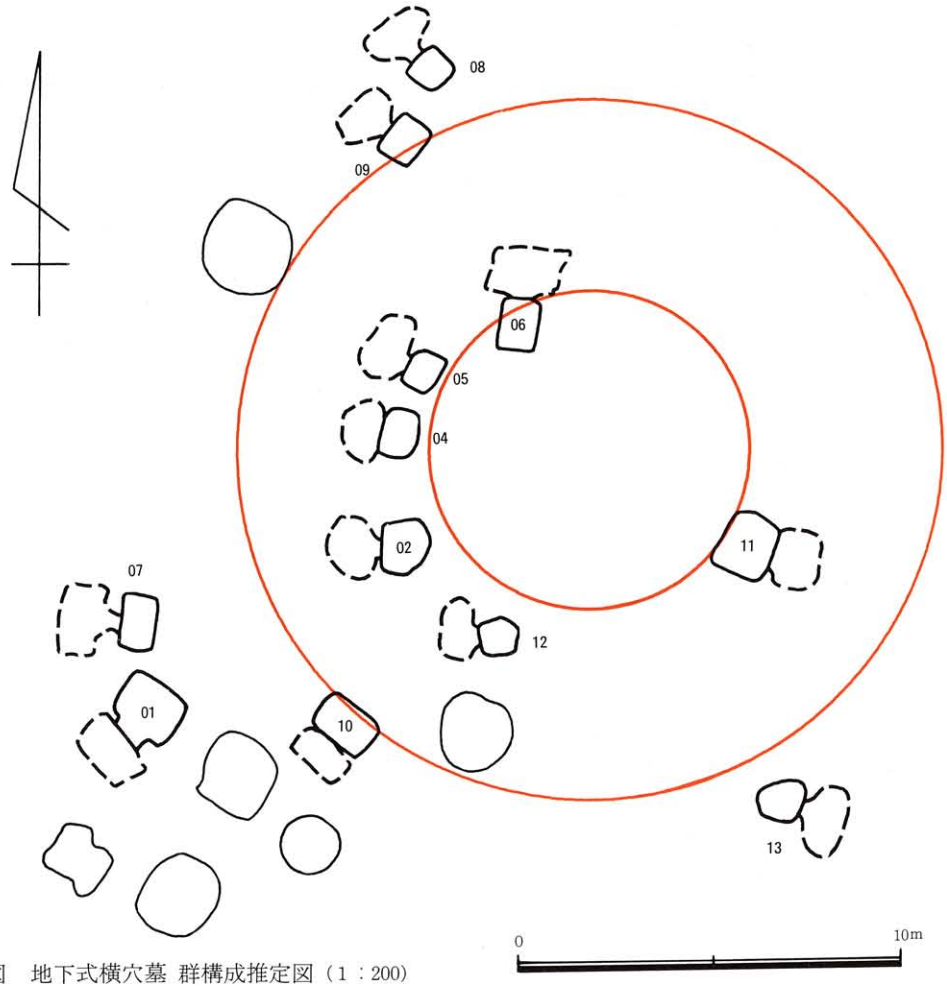
第60図　地下式横穴墓 集合図（1：20）

鉄鏃は、圭頭・三角形・二段逆刺・長頸鏃と多様であるが、量的には少ない。樹皮巻き矢柄の遺存しない鉄鏃をみると、全て箆被を有さないタイプで、年代的要因か地域的要因かは断定し難い。

4）築造年代と変遷について（第62図）

A類の供献土器としての可能が高いE～G群土器、二段逆刺鏃および大刀の形式から５世紀前半～６世紀後半には収められる。

玄室のプランを「長方形から楕円形へ」という仮定で変遷したのが第62図である。A類では二面庇・切妻タイプの16号を最古とし、次いで一面庇・切妻タイプの19号、長方形プランの03・14・15号、楕円形プランの17号を序列した。B類は、長方形・寄棟タイプの06号を最古とし、次いで長方形プランの01・07・10号とし、かつ、羨道部に仕切りを設けた01号を分別する。各々、次の楕円形プランへと継がり、系統的様相を呈する。最終段階で、新たに羨道板閉塞の08



第61図　地下式横穴墓 群構成推定図（1：200）

・09号が現われる。

以上の状況から、A類からB類へという変遷は考えられない。

なお、05号の玄室が片袖に近いのは、04号が先に構築された後に隣接して竪坑を掘削したために、玄室を北寄りにとらざるをえなくなったためと思われる。

5）追葬について

A類では16・17・19号が複数埋葬であり、いづれも人骨の遺存度に差があることから、追葬とみられる。B類では01・02・05・08・11・13号が複数埋葬であるが、竪坑断面では01と02号のみ追葬坑を確認した。従って05・08・11・13号は、当初から複数埋葬であったと思われる。

6）ＳＴ−13の排土処理について（第38・63図）

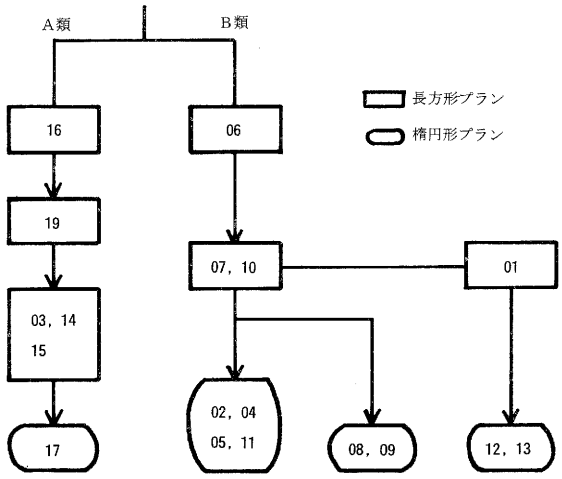
層序図（第38図）に見られるように、掘削土は、地表で殆ど目立たないように押し広げられている。そこで、掘削土と排土と竪坑埋土の関係を知るために、それぞれの体積を計算してみた。その結果、Ⅲｂ層とⅣ層の土塊から成る排土Ｃ層は、竪坑内の１層（机上での１層）とほぼ等しく、約0.60㎥である。Ⅲｂ層とⅤ〜Ⅷ層の土塊から成るＡ・Ｂ層は、竪坑内の２層とほぼ等しく、約0.90㎥を測る。次に、羨道と玄室の掘削土である３層は、竪坑内の埋め土（１層＋２層）にほぼ等しく、1.4〜1.5㎥を測る。

以上のことから、小木原古墳[12]や飯野古墳[13]、平松古墳[14]に共通する高い「墳丘」は持たないタイプであることがわかる。

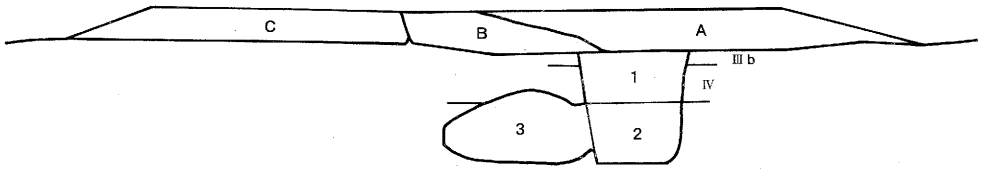
7）封土について

Ⅳ区の機械掘削の際、ＳＴ-13以外では封土（掘削排土）は認められなかった。板石積石室墓を含めても遺構の切り合いは全く無い。また、01・02号の竪坑を見ても、追葬時、当初の掘形を削ることもなく確実に掘削しているということは、竪坑の位置が明瞭に標示されていたと考えざるをえない。

13号の竪坑底面の小Ｐｉｔや10号の



第62図　地下式横穴墓 変遷図



第63図　ＳＴ-13排土 模式図

ST	主軸方位	閉　塞	プ ラ ン	竪　坑 長さ×幅×深さ(m)	羨　道 長さ×幅×高さ(m)	玄　室 長さ×幅×高さ(m)	被葬者	副葬品	備　考
01	N175°E	羨道	平入り長方形	1.86×1.30×1.39	0.30×0.78× X	1.66～1.82×1.00～1.21× X	2	鉄鏃2	頭部に赤色顔料
02	N130°W	羨道	平入り楕円形	1.60×1.38×1.36	0.36×0.39～0.67×0.60～0.66	1.88×1.31×0.72	女2	無	羨道部に赤色顔料
03	N	竪坑上部	平入り長方形	X ×0.94×0.18 (0.62×0.52×0.96)	0.30～0.46×0.42～0.66×0.75	1.57×1.20× X	—	短剣1、鉄鏃3	
04	N127°W	羨道	平入り楕円形	1.35×1.19×1.40	0.14×0.51×0.52	1.70×1.13×0.66	女1	無	頭・足先にシラス塊
05	N 98°W	羨道	平入り楕円形	1.15×0.97×1.07	0.11～0.17×0.42×0.50	1.92×1.24×0.73	男2	鉄鏃1	
06	N 58°W	羨道	平入り長方形	1.52×1.18×1.12	0.20～0.27×0.41～0.60×0.50	1.64～1.82×1.12～1.24×0.79	男1	鉄刀1、鉄鏃2	寄棟型
07	N126°W	羨道	平入り長方形	1.41×1.12×1.57	0.35～0.41×0.39～0.57×0.84	1.97×1.12～1.24×0.84	1	鉄鏃2	
08	N 81°W	羨道	平入り楕円形	1.12×1.04×0.96	0.22～0.28×0.50～0.58×0.41	1.89×1.21×0.61	2	鉄鏃3	
09	N 87°W	羨道	平入り楕円形	1.35×1.16×0.90	0.30×0.43～0.48×0.69	1.71×1.05×0.69	1	無	
10	N179°E	羨道	平入り長方形	1.61×1.21×1.05	0.21～0.30×0.70×0.52	1.55×0.91×0.72	男1	鉄鏃3	
11	N 73°E	羨道	平入り楕円形	1.63×1.56×1.52	0.20×0.65～0.76×0.60	1.97×1.40×0.88	3	短剣1、鉄鏃2	足先にシラス塊
12	N142°W	羨道	平入り楕円形	1.12×1.00×1.18	0.10～0.14×0.68～0.78×0.41	1.58×1.00×0.60	女？1	無	
13	N 67°E	羨道	平入り楕円形	1.20×1.14×1.24	0.22×0.59～0.81×0.48	1.86×1.16×0.73	男1、女1	短剣1	羨道部にシラス塊
14	N 21°W	竪坑上部	平入り長方形	X ×0.66×1.17	0.24×0.67～0.75× X	1.67～1.80×1.41～1.54× X	—	鉄鏃1	床面に赤色顔料
15	N 28°E	竪坑上部	平入り長方形	1.51×1.42×0.07 (0.70×0.60×1.10)	0.28×0.38～0.49×0.73	2.38×1.20～1.63× X	男1	鉄剣1、鉄鏃7	壁面に赤色顔料
16	N 25°E	竪坑上部	平入り長方形	1.38×1.31×0.11 (0.80×0.62×1.34)	X ×0.77×0.89	2.00～2.16×1.07～1.42×0.97	男1、小人1	小刀1、鉄鏃4	切妻型
17	N 72°E	竪坑上部	平入り楕円形	0.68×0.53×0.99	0.24×0.54～0.62×0.64	1.98×1.42× X	2	鉄刀1、鉄鏃3	壁面に赤色顔料
18	N 52°E	羨道	平入り楕円形	1.42×1.08×0.74	——	0.92×0.49×0.45	—	無	羨門部にシラス塊
19	N 9°W	竪坑上部	平入り長方形	1.28× X ×0.11 (0.80× X ×1.12)	0.23～0.28×0.52～0.60×0.78	1.85×0.96～1.22× X	2	短剣1	切妻型

第8表　地下式横穴墓一覧表　　(　)は2段目掘方

竪坑に隣接する柱穴は、竪坑の位置を示す標柱の存在を推定させる。

13号を除くＢ類の墳墓は、竪坑の埋め戻しに必要な土以外の掘削排土を、Ａ類の「墳丘」の材として提供していた可能性もある。

8）ＳＴ−16出土の小刀（第47図）について

鋒両刃造の類例としては、山口県朝田墳墓群のＳ13[15]および福岡県長行遺跡[16]１号石棺の素環頭刀子、同山田遺跡[17]・佐賀県二塚山遺跡Ｄ36[18]および長崎県亀岡神社蔵[19]の素環頭大刀、京都府南原古墳[20]および静岡県松林山古墳[21]の大刀、さらには正倉院北倉宝物の金銀鈿荘大刀[22]などがある。これらは、３〜４世紀代に集中し、当遺跡出土の小刀はきわめて希な例と言える。

9）小結

以上、限られた調査範囲にもかかわらず多くの成果を得ることができた。築造年代については、墳墓の形態や副葬品から６世紀代に集中すると思われるが、資料の希薄さに加えて分析が不充分であるために特定できていない。

Ａ・Ｂ２系統の墳墓は、分布域の相異や規模、個体間の距離、副葬品の優劣、赤色顔料の使用頻度などを総合すると、Ａ類の被葬者が優位にあったと言える。また、平面プランはそれぞれ長方形から楕円形へと変遷し、Ａ類のみ「墳丘」を有していた可能性が高い。[23]

３．古墳時代以降

近世〜近代あるいは戦中戦後の入植によって、畦畔と水路で区画する大規模な開墾が行なわれるまでの間は、全くの空白である。このことは、人口の希薄さや移動、Ⅲ層（黒灰色火山灰土）が耕作土として不適当であることに起因する。

〔註〕

（１）　えびの市教育委員会『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』1985

（２）　（１）と同じ

（３）　（１）と同じ

（４）　宮崎県教育委員会「灰塚遺跡」『九州縦貫道埋蔵文化財調査報告書（１）』1972

（５）　えびの市教育委員会『小木原遺跡群　蕨・久見迫・地主原地区』1989

（６）　えびの市教育委員会『永田原遺跡』1987

（７）　（１）と同じ

（８）　飯野町『飯野町郷土史』1966

（９）　木崎原操「小木原古墳群調査報告」第２報〜第７報『えびの』第２号〜第８号　1971〜1975

（10）　宮崎県総合博物館『宮崎県総合博物館収蔵資料目録　考古・歴史資料編』1983

（11）　えびの市小木原地下式横穴群蕨・久見迫支群や小林市東二原遺跡、高原町立切遺跡では２〜３基の一群が主軸を１点に集中させるように位置する例があり、１つの墳丘を共有することを伺わせる。しかし、本遺跡では主軸が１点から放射状に並ぶという、

類例の無い分布状態を示している。

(12)　1969年に調査した小木原A号墳は、直径16.0m、高さ1.2mを測る。(宮崎県教育委員会「小木原古墳、地下式A号墳」『九州縦貫道埋蔵文化財調査報告（1）』）このほか県指定の古墳が1基現存している（未測量のため規模は不明)。

(13)　えびの市大字建山に県史定の古墳が1基現存している。裾部は削失しているが、直径は20m（推定)、高さ2.5m（推定）を測る。

(14)　えびの市大字島内に県史定の古墳が1基現存している。直径23m、高さ2.5mを測る。

(15)　山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅰ』1976

(16)　田頭喬「長行小学校庭の原始遺跡」『西谷　その歴史と民俗』小倉郷土会　1965

(17)　福岡県朝倉高等学校史学部「朝倉町大字須川山田石棺」『埋もれていた朝倉文化』1969

(18)　佐賀県教育委員会『二塚山』1979

(19)　末永雅雄『増補日本上代の武器』1981

(20)　後藤守一『日本古代文化研究』1942

(21)　後藤守一ほか『松林山古墳発掘調査報告』1939

(22)　朝日新聞社『正倉院宝物　北倉』

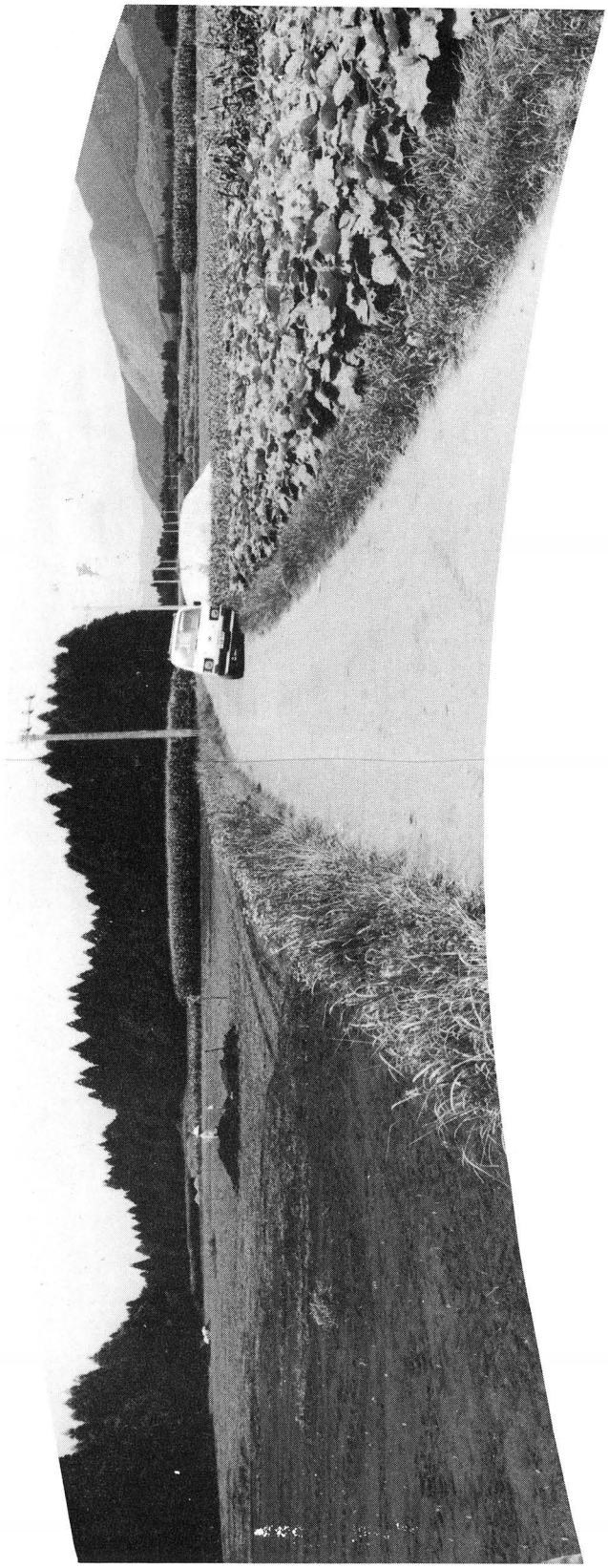
(23)　地下式横穴墓（名称は統一されていない）は、いわゆる「古墳」の範疇に含めて良いかどうかの問題がある。玄海灘周辺の前方後円墳の主体部に箱式石棺が多用されるように、形だけ受け入れて中身は在地形ということを考えれば、当遺跡のA類の地下式横穴墓も同様、「古墳」と呼承しても良いと思われる。

図版１

調査地周辺
航空写真

調査地周辺遠景
（北から）

図版２



Ⅲ～Ⅴ区　調査前の状況（東から）

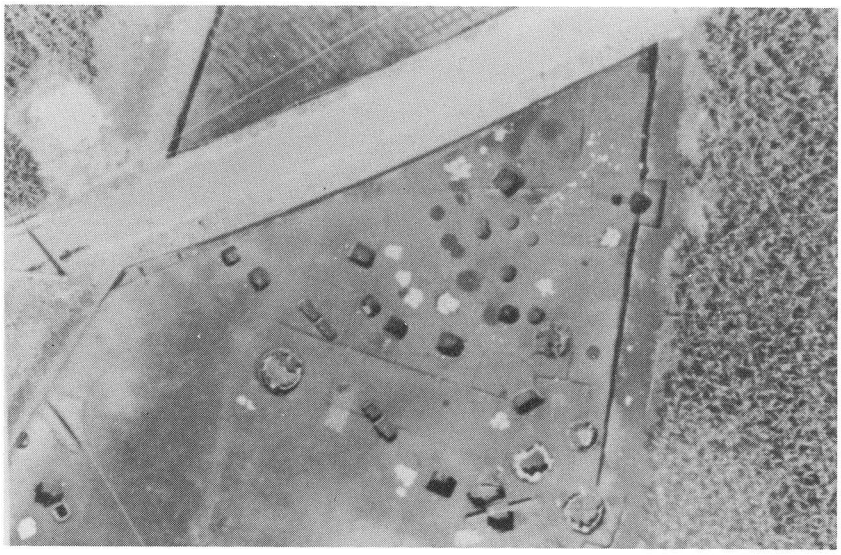
Ⅴ～Ⅶ区
調査前の状況
（北から）

Ⅰ区　完掘全景
（北から）

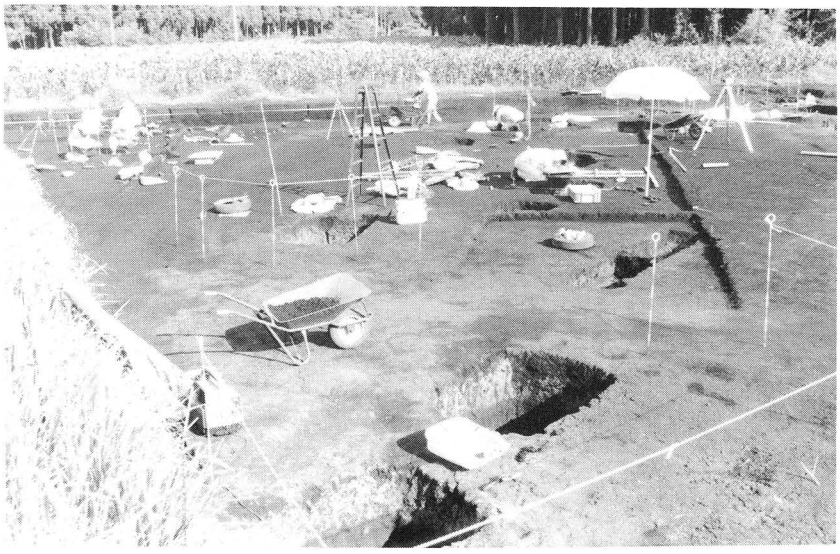
Ⅱ～Ⅲ区　全景
（南から）

図版４

Ⅲ区　完掘全景
（北東から）



Ⅳ区　完掘全景
（上が北）



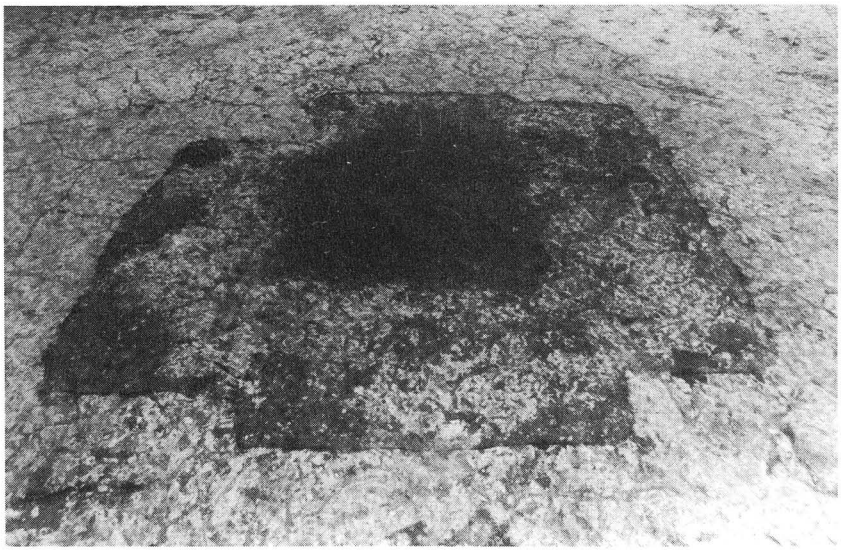
Ⅳ区　作業風景
（北から）

Ⅴ区　作業風景
（南東から）

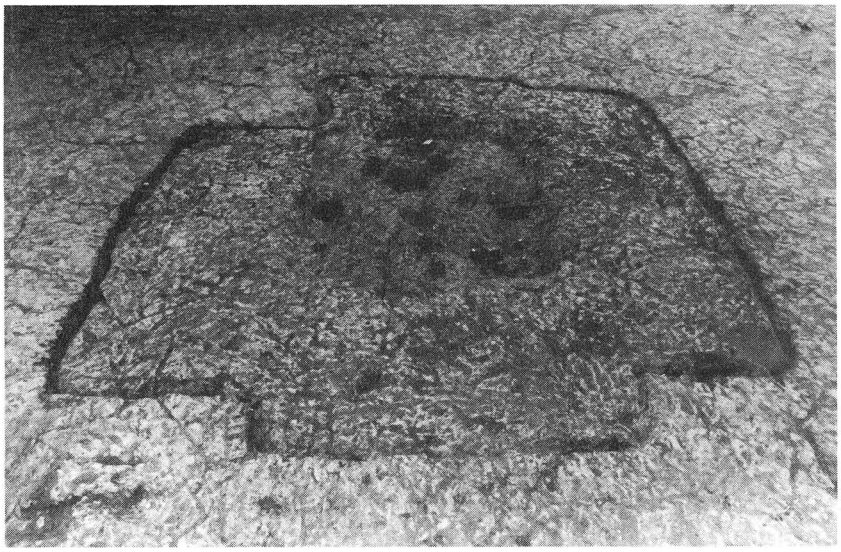
Ⅵ区　完掘全景
（北から）

Ⅶ区　完掘全景（北から）

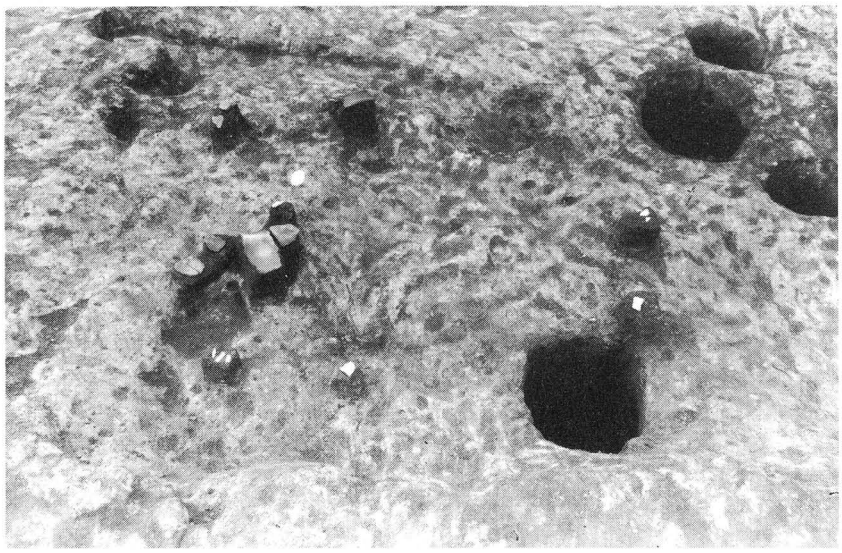
図版6



ＳＡ-01
遺構検出状態
（北から）



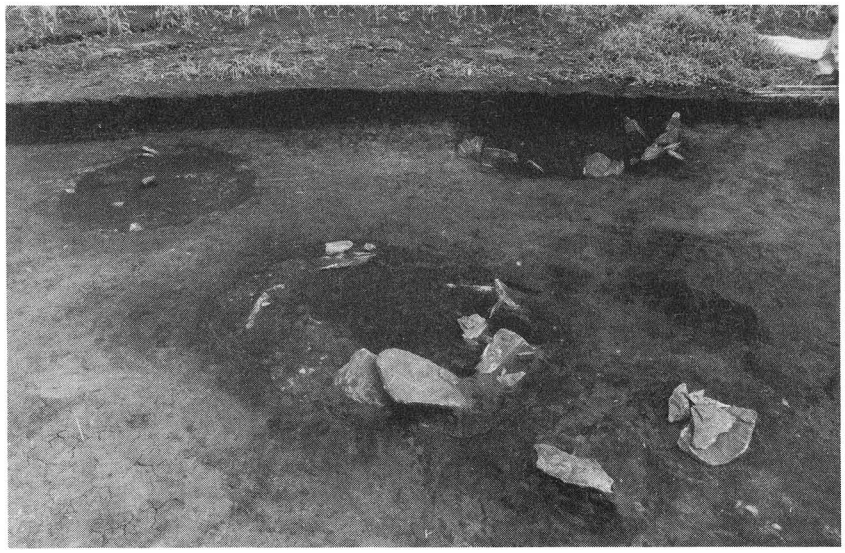
ＳＡ-01
掘込・遺物出土
状態
（北から）



ＳＡ-01
遺物出土状態
（北西から）

ＳＺ-01・Ａ群
遺物出土状態
(北から)

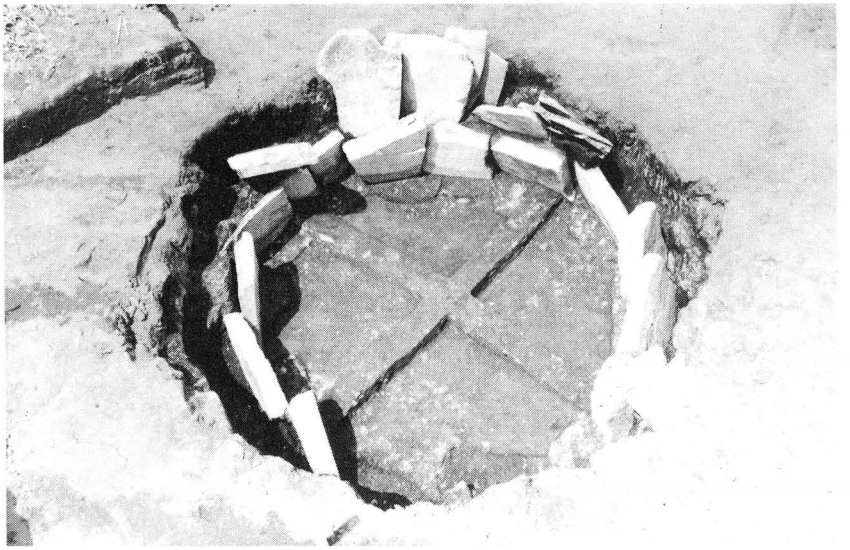
ＳＩ-01～03
遺構検出状態
(北から)



ＳＩ-01～03、
ＳＴ-01
作業風景
(北から)

図版８

ＳＩ-01
層序
（北西から）

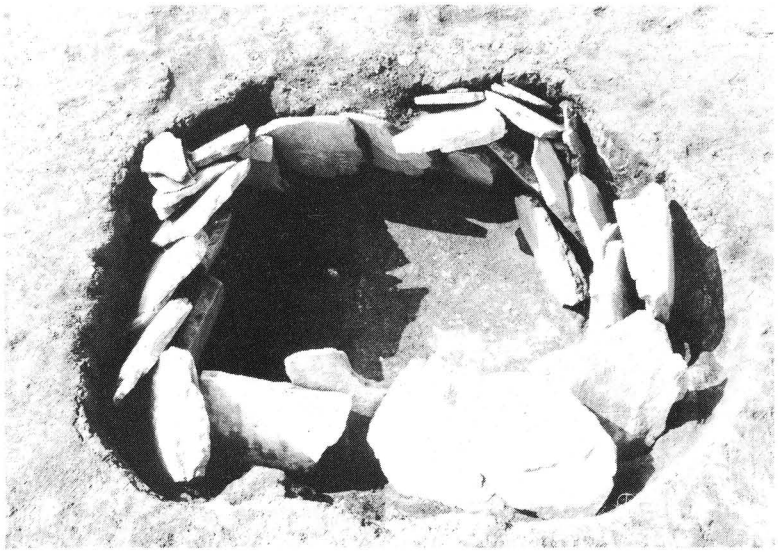


ＳＩ-01
完掘全景
（東から）

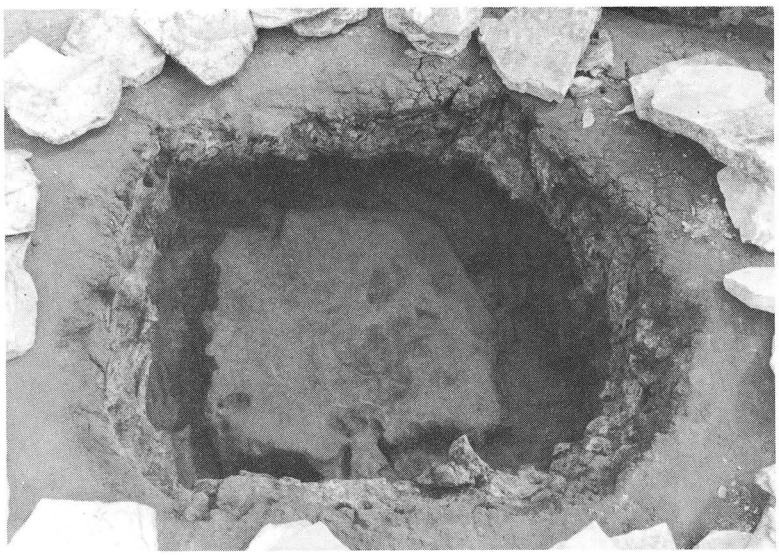
ＳＩ-01
側石除去、完掘
（東から）

ＳＩ-02
層序
（東から）

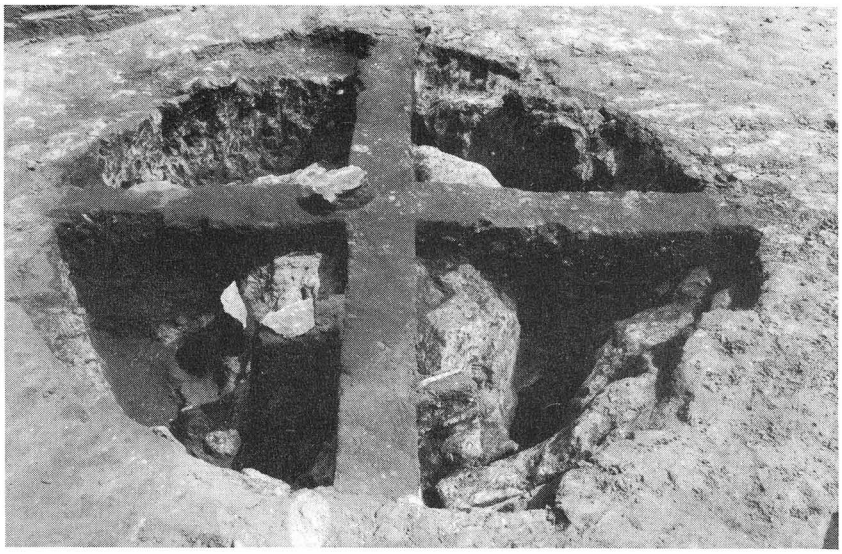
ＳＩ-02
完掘全景
（北から）



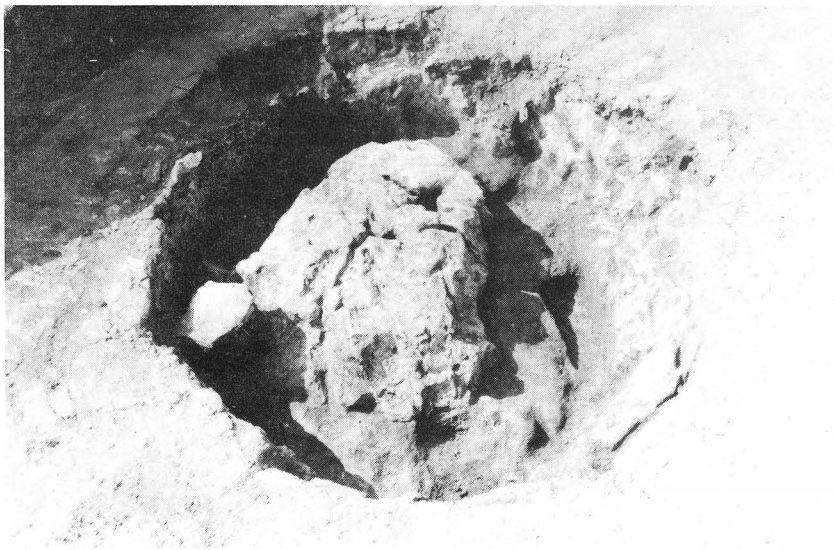
ＳＩ-02
側石除去
完掘
（北から）



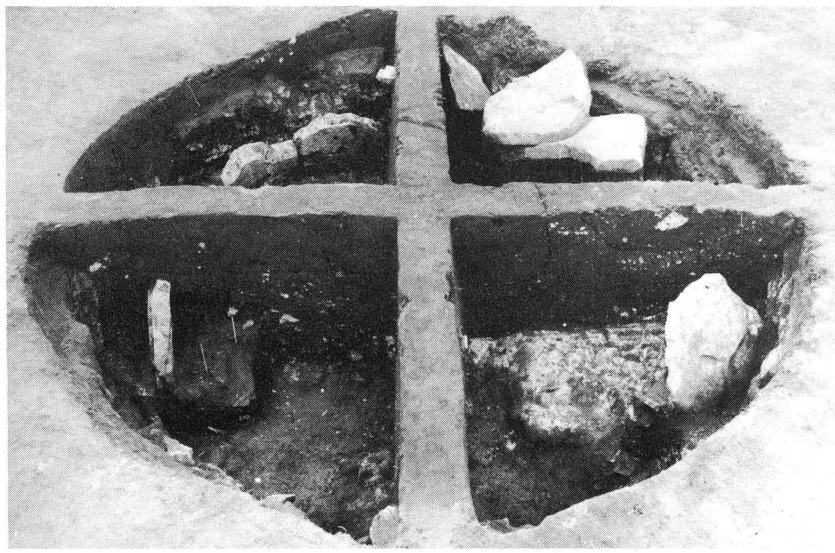
図版10



ＳＩ-03
層序
（西から）

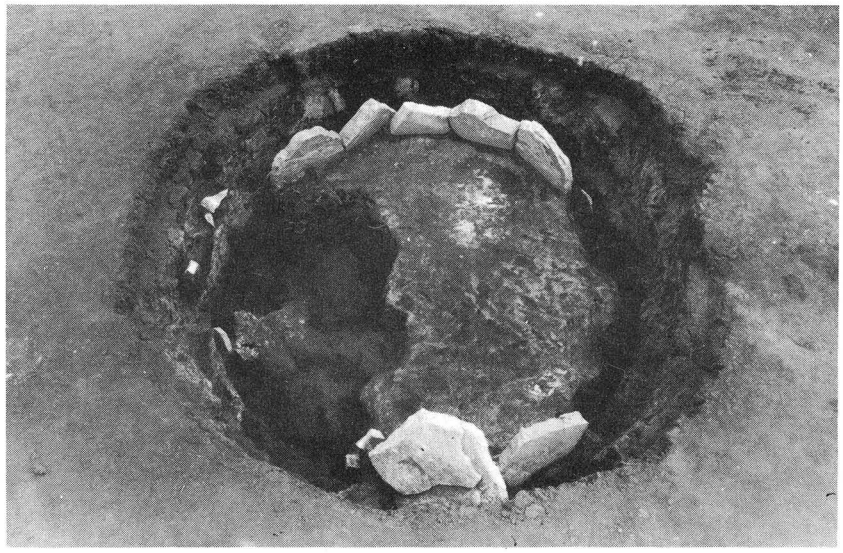


ＳＩ-03
完掘全景
（北から）



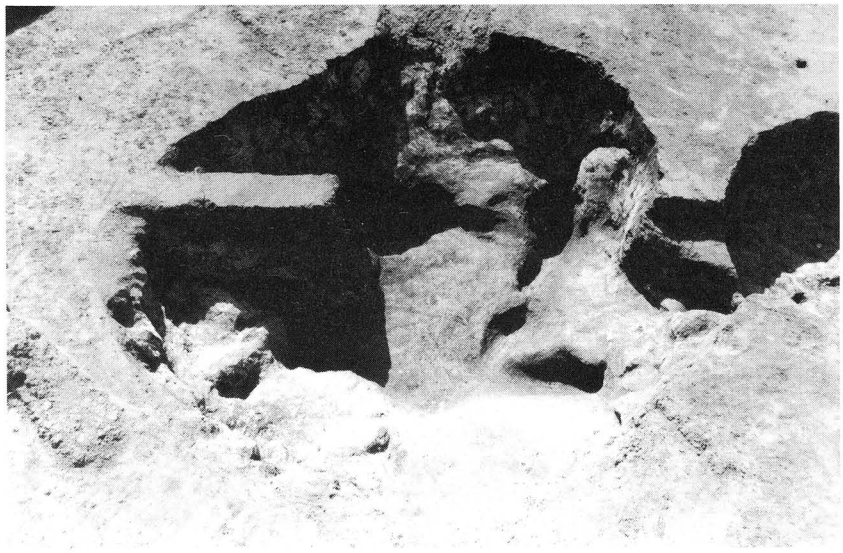
ＳＩ-04
層序
（北から）

ＳＩ-04
完掘全景
（北から）



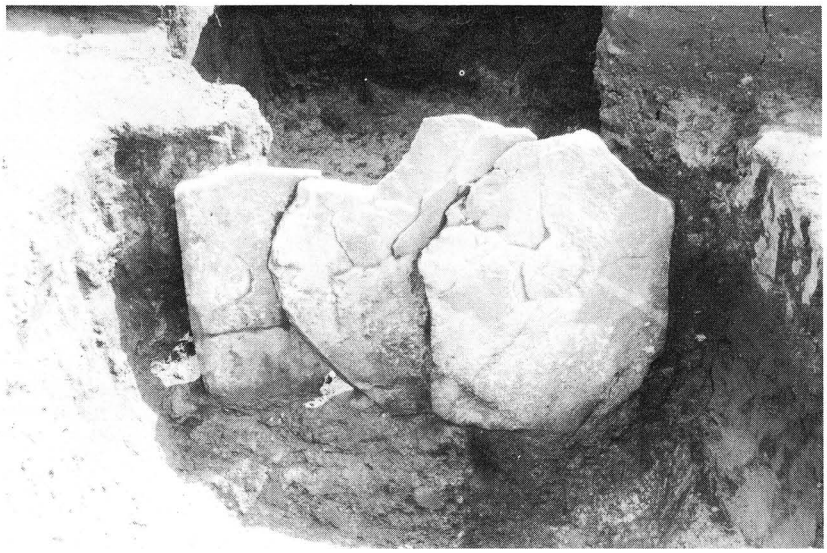
ＳＩ-04
側石除去
（南から）

ＳＩ-05
完掘全景
（南から）



図版12

ＳＴ-01
竪坑層序
（西から）



ＳＴ-01
羨道閉塞
（北から）

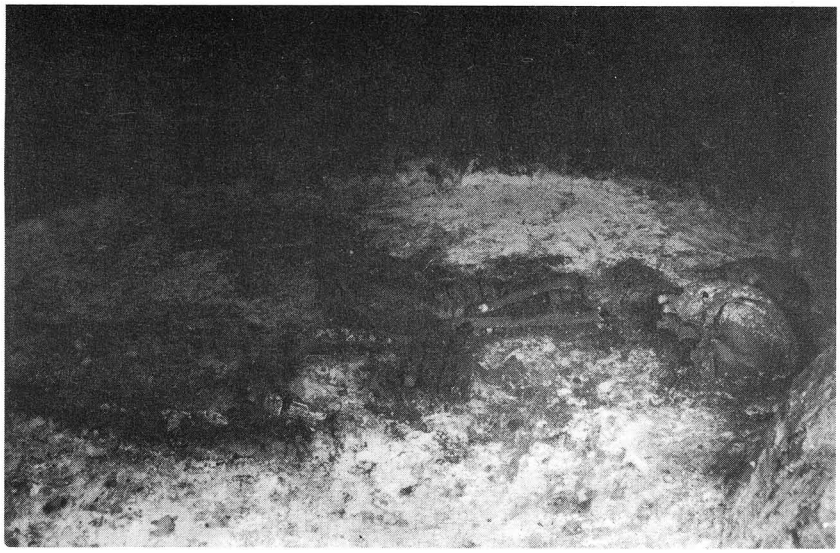
ＳＴ-01
完掘
（北から）

ＳＴ-01
玄室内
(北から)

ＳＴ-02
竪坑層序及び
閉塞状況
(南から)

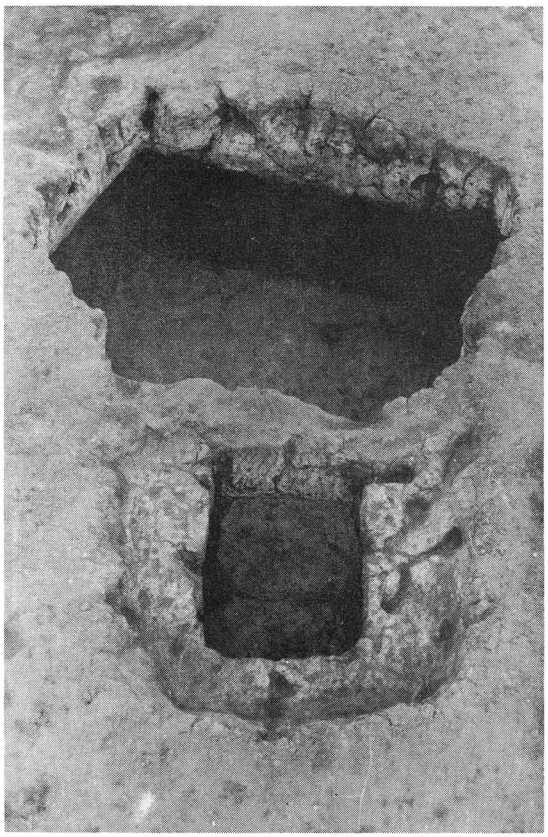
ＳＴ-02
閉塞石除去
(北から)

図版14

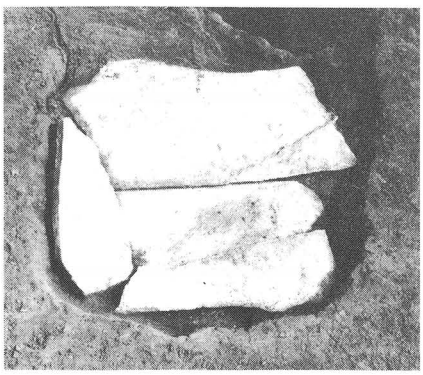


ＳＴ-02
玄室内人骨

玄室内出土遺物



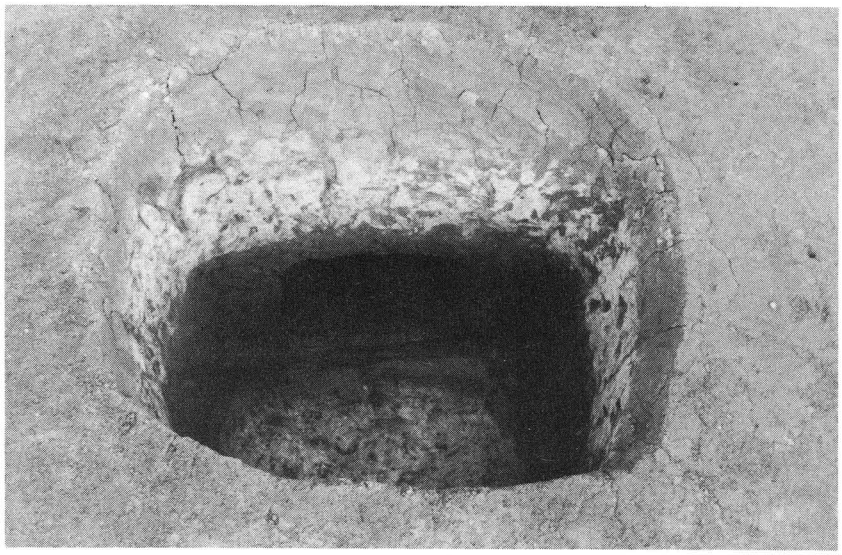
ＳＴ-03 完掘全景（南から）



竪坑上部閉塞状態（南から）

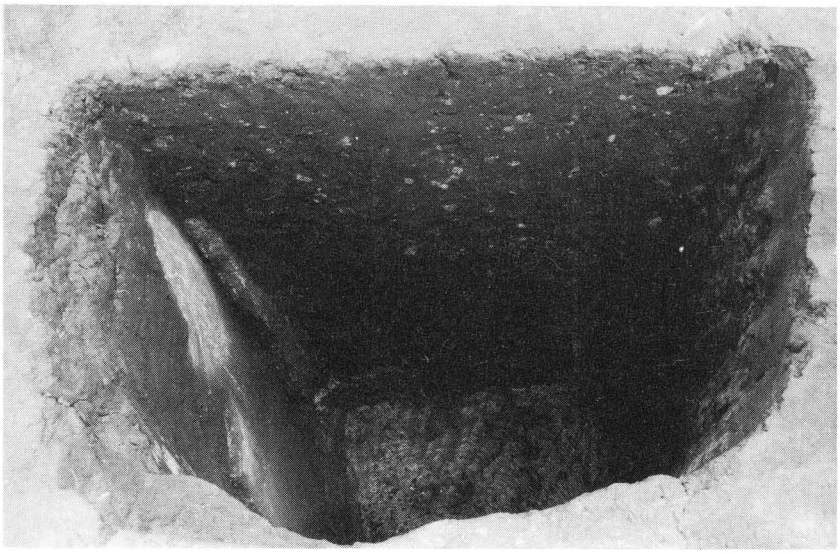
ＳＴ-04
羨道閉塞状態
(北東から)

ＳＴ-04
閉塞石除去
(北東から)



ＳＴ-04
玄室内人骨

図版16



ＳＴ-05
竪坑層序
（南から）

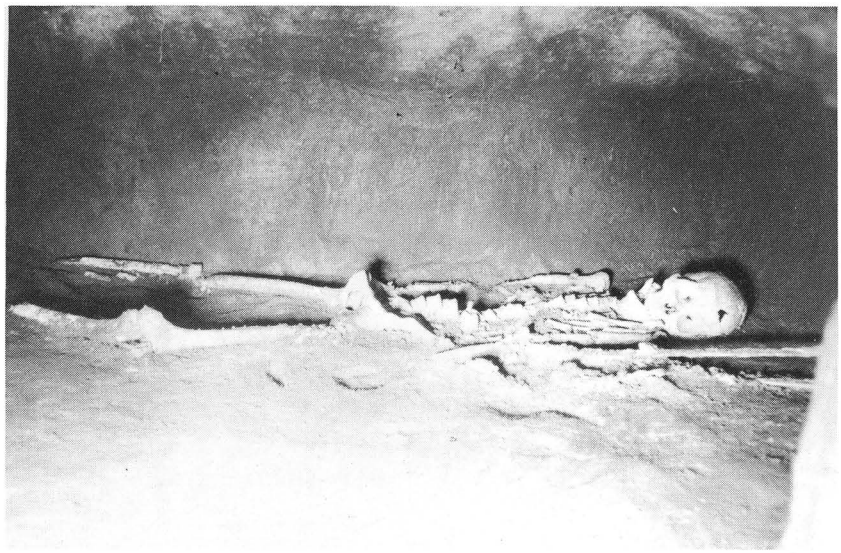
ＳＴ-05
羨道閉塞状態
（東から）

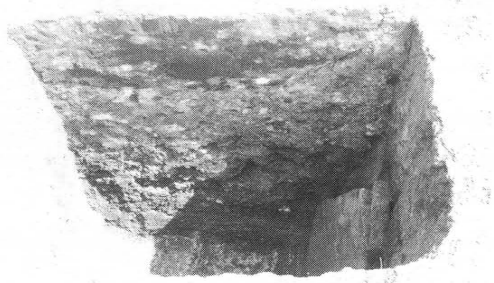
ＳＴ-05
玄室内人骨

ＳＴ-06
竪坑層序
（南西から）

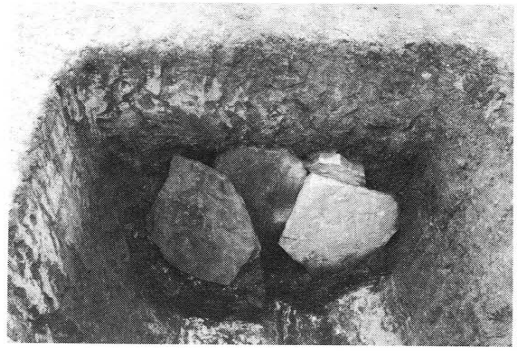
ＳＴ-06
閉塞石除去
（南東から）

ＳＴ-06
玄室内





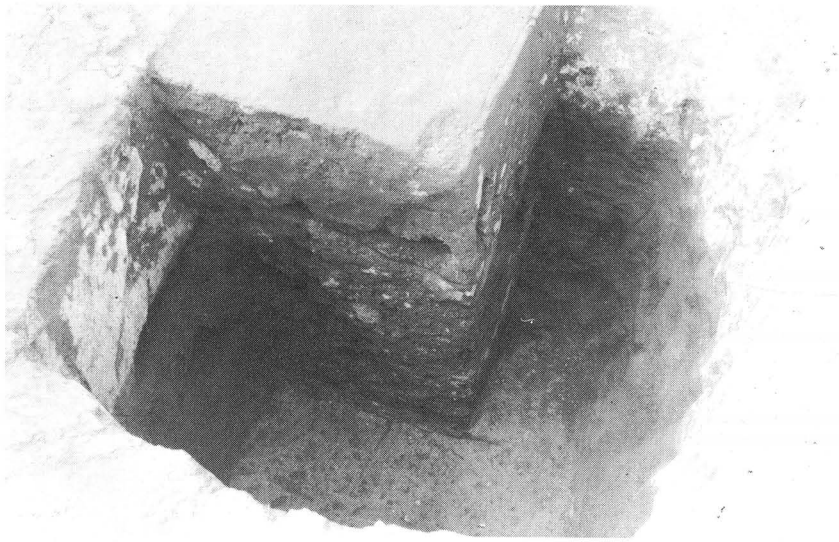
ＳＴ-07
竪坑層序
（南から）



ＳＴ-07
羨道閉塞状態
（東から）

ＳＴ-07 玄室内

ＳＴ-08
竪坑層序
（南から）



ＳＴ-08
完掘
（東から）

ＳＴ-08
玄室内人骨

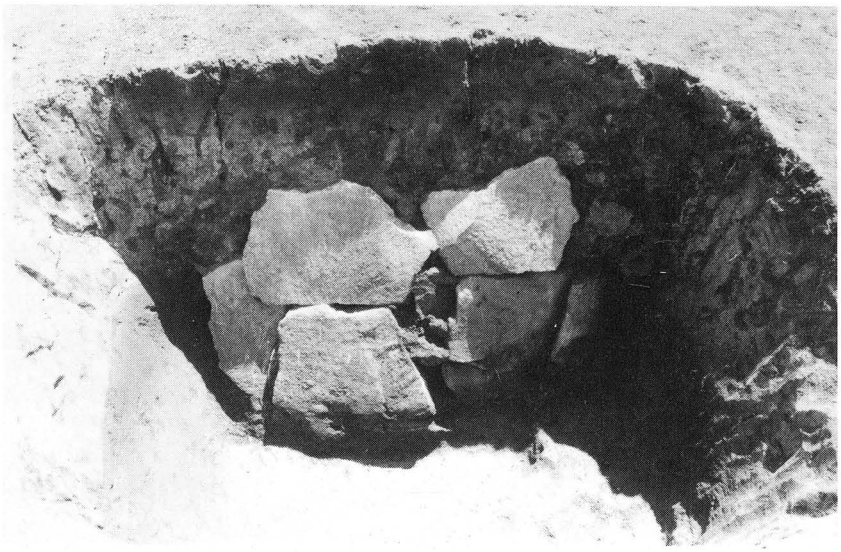
図版20

ＳＴ-09
竪坑層序
（南から）

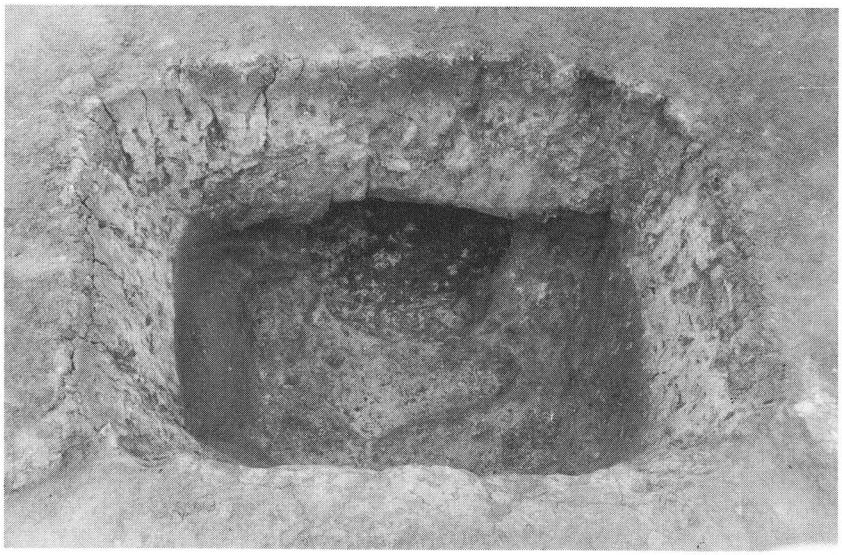
ＳＴ-09
完掘
（東から）

ＳＴ-09
玄室内人骨

ＳＴ-10
羨道閉塞状態
（北から）



ＳＴ-10
閉塞石除去
（北から）

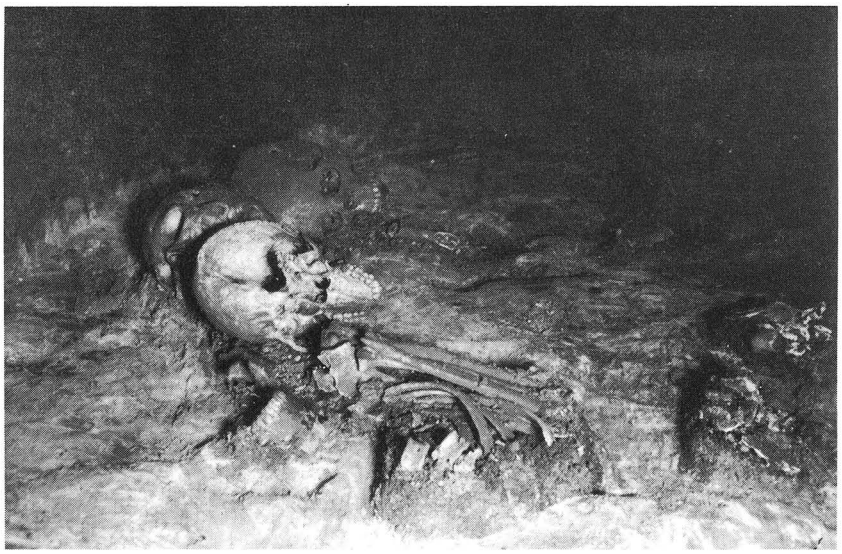


ＳＴ-10
玄室内人骨

図版22

ＳＴ-11
羨道閉塞状態
（西から）

ＳＴ-11
閉塞石除去
（西から）

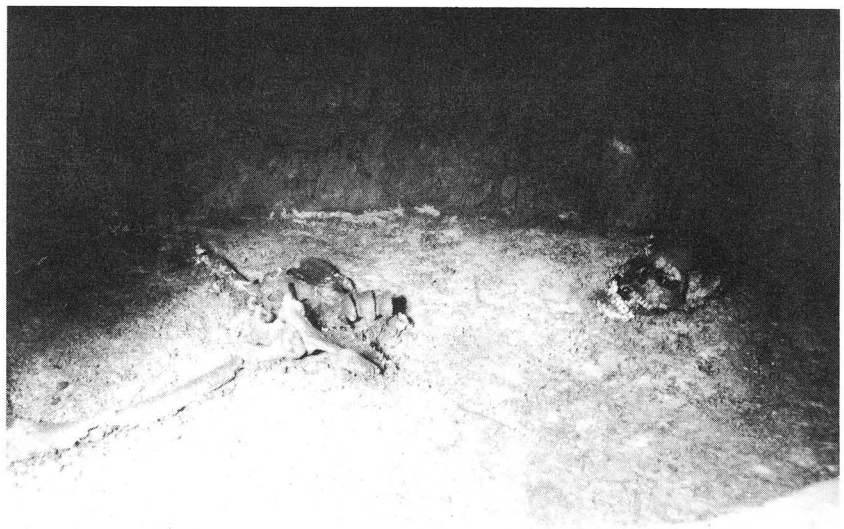


ＳＴ-11
玄室内人骨

ＳＴ-12
羨道閉塞状態
(北東から)

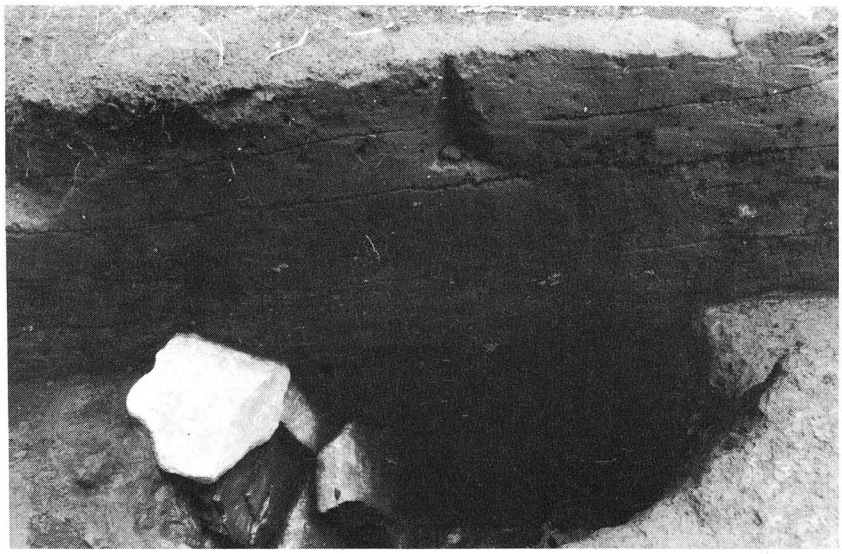
ＳＴ-12
閉塞石除去
(北東から)

ＳＴ-12
玄室内人骨

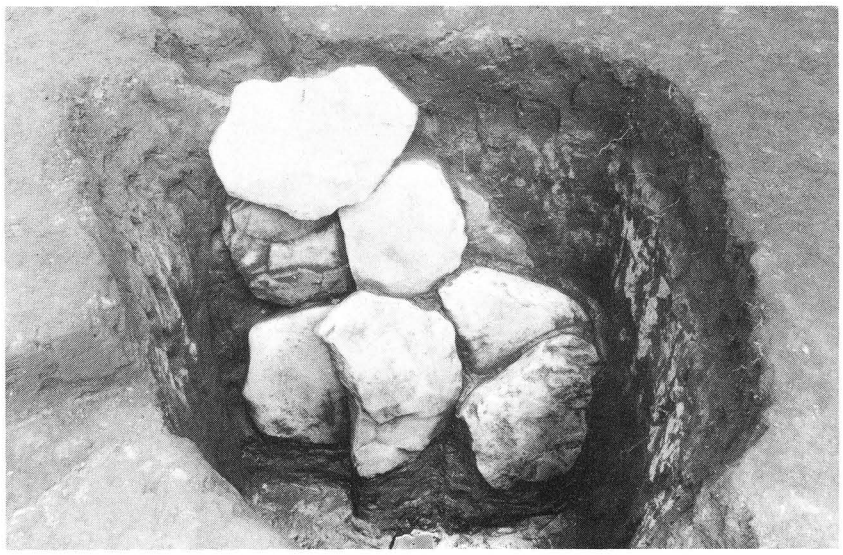


図版24

ＳＴ-13
層序
（北から）



ＳＴ-13
竪坑層序
（北から）



ＳＴ-13
羨道閉塞状態
（北西から）